日俱瑣録

大正十四年五月上浣起筆

特別
イ4
1919
372

176640

日間瑣録四

大正十四年三月一日起筆

○奥の著述で二版まで出たものゝ内で大阪屋一手一行の「随筆頼山陽」がある、山陽の一ヶ月位の内で一版二千部売切れて、再版千部既に発売、三版更に発売を予約して訂正をかくつてある、同書界不景気を叫つゝ折柄の売行の高のことゝの著述が如何に民衆の興味を投しておる故であらう、殊に自分の山陽が如何に従来の山陽を吾いたものゝ上に出てゐるかを自知するの一事実也

38- 9161

○著述の出版まうけ
んの世あらそひのさま云ハゞ子を学ばけ秘さるものも、
著者みづから自祝の念を禁し得ざる譯ありとまんべん支人や知人や著者の縁ある祝
しそよみもよい云ひあるも、然るに子が生まれゝ祝すると
るのが習慣ともなりてゐるも、著者が出でも祝まるもの
ハ或んを無い、本を買うてやつても、売もするも謝状
すら寄もて来るものがいくらもある、苦しい著
述を人に寄ると、又手数料を要求する金を謝礼
として返礼をするのが通例ひあつとも苦くが、償をも
て謝するい野卑こと自分ともの如きものが著
者の労を犒ふ様な手紙位い寄ともおのでそう

のごとき、例へ人からみるとうるさき著書を寄
かえても、それを買ひ用立ぬとも、無挨拶な
ことを書き無い、
○近著で就も未だの婿候者からポツ〳〵手紙が来る、
その中に拙しつゞくべきの児玉譲と云ふ人から一冊
を寄を来た、それを開くと長文である、北の人ハ総本
市三新町に住する武人で、白山陽門人児玉旗山の
曾孫ゝといふ乃ち旗山の北の人の祖父の弟三ヶ
雷りもといふ加賀の大聖寺藩に仕へたものである、
その旗山は脱藩して維新の大変に際し命ひ死んだ
山の事跡かのこともを記ひ、今の著と伝り多くの
ことが合ひとゞいふを以ひ、且つ祖父旗

山の家庭のまことを賞讃して来たが、頁の頭山を特に称えるに憚びるものから乗しいことが、ここの画がある、旗山は山陽の孝後嫡阪を防ぐ比門人の共に墓は京都の山陽の墓地である任、深い関係が頼家とある、頁の不義の山陽孝後嫡阪の終まで旗山の詩文が附加してある、大抵の書は旗山の集は除いてあるが、家義本は刊行当初のおもみを富むものである、

○陽雲菴が京都に蓄いた妻と生まれた男子を山陽は雲菴といふ子としてみるが、此男子は夭死したらしく、その次の男子が剣会と長く生存したとかいて、その次男が雲菴の跡の任巻をおちぶ

侍くまんが北渓東条琴台とうたつてみるといふ、此の巻は細村冲四が細紙に会入うる書のようである、前端心証があり、飯白に三十三体仏が九ごとに金泥三寸ばかりである、但し三十二体仏あるべきものが、三十二体しかないから、心証を以て一体と見做して一体と看做したものであらうと佛性と思してみるあの説である、北巻は雲菴の雲を描いたものである、山陽の赤一点が冊帳に於けることく、雲菴が見物のため陽春いたものか、その来歴は分らぬが、遠西の推するまでの数うある、北渓実も自分の如きを画きたることも、お宿と二人まで子のあるから云ふ書も

蜨亭刻陶印九顆　文曰酒酒也

つけおく、

○今年八一ゝと陶印九顆を彫り来る、九顆共酒誌を刻す　刻者の蜨亭（姓）は北川（名）と云ふ人也　長春堂といし処と云ふ　此印皆文卿当荘を題したる自序あり　即ち蜨亭の書也　此人今年（嘉永甲寅）の守屋と共に京都へ来り、今度の指遣ひをなす者ゆゑ、此印を彫らせ、長春堂へ贈りたるなるべし

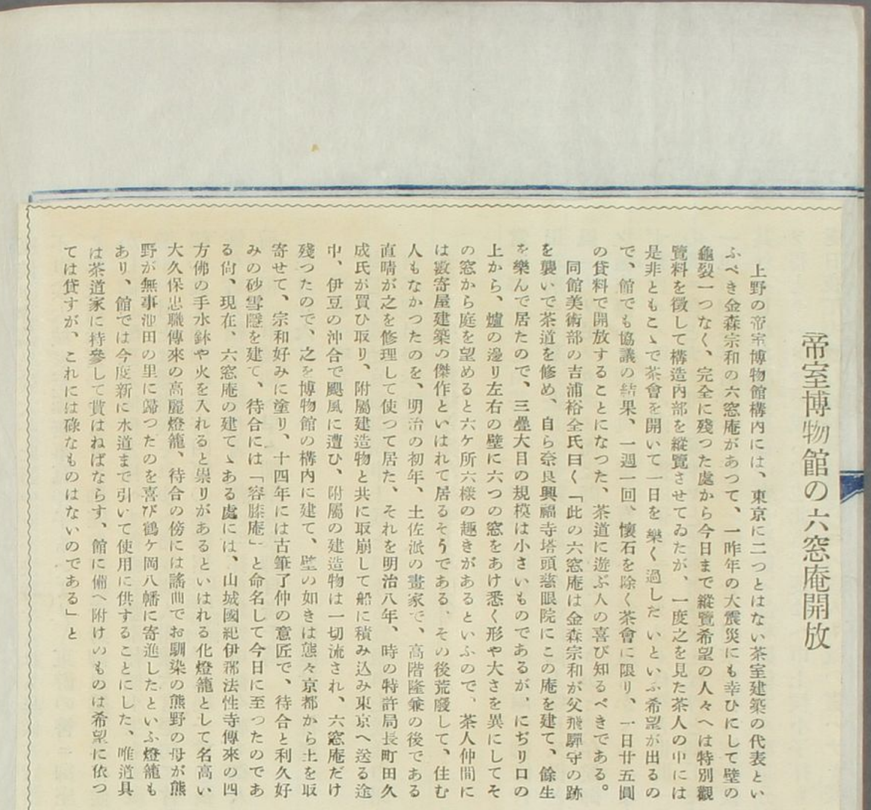
○今度の新印の鈕の紐を可愛ゆゑ、五ゝ載を楽翁（五ゝ五歳）の賀に贈りたるなるべし

五月二日記

帝室博物館の六窓庵開放

上野の帝室博物館構内には、東京に二つとはない茶室建築の代表といふべき金森宗和の六窓庵があつて、一昨年の大震災にも幸ひにして壁の龜裂一つなく、完全に殘つた處から今日まで縱覽希望の人々へは特別觀覽料を徴して構造内部を縱覽させてゐたが、一度之を見た茶人の中には是非ともこゝで茶會を開いて一日を樂く過したいといふ希望が出るので、館でも協議の結果、一週一回、懷石を除く茶會に限り、一日廿五圓の貸料で開放することになつた、茶道に遊ぶ人の喜び知るべきである。

同館美術部の吉浦裕全氏曰く「此の六窓庵は金森宗和が父飛驒守の跡を襲いで茶道を修め、自ら奈良興福寺塔頭慈眼院にこの庵を建て、餘生を樂んで居たので、三疊大目の規模は小さいものであるが、にぢり口の上から、爐の邊り左右の壁に六つの窓をあけ墨く形や大さを異にしてその窓から庭を望めると六ケ所六樣の趣きがあるといふので、茶人仲間には寫寄屋建築の傑作といはれて居るそうである、その後荒廢して、住む人もなかつたのを、明治の初年、土佐派の畫家で、高階隆兼の後である直晴が之を修理して使つて居た、それを明治八年、時の特許局長町田久成氏が買ひ取り、附屬建造物と共に取崩して船に積み込み東京へ送る途中、伊豆の沖合で颶風に遭ひ、附屬の建造物は一切流され、六窓庵だけ殘つたので、之を博物館の構内に建て、壁の如きは態々京都から土を取寄せて、宗和好みに塗り、十四年には古筆了仲の意匠で、待合と利久好みの砂雪隱を建て、待合には「容膝庵」と命名して今日に至つたのである尙、現在、六窓庵の建てゝある處には、山城國紀伊郡法性寺傳來の四方佛の手水鉢や火を入れると祟りがあるといはれる化燈籠として名高い大久保忠職傳來の高麗燈籠、待合の傍には諸侯でお馴染の熊野の母が熊野が無事沖田の里に歸つたのを喜び鶴ケ岡八幡に寄進したといふ燈籠もあり、館では今度新に水道まで引いて使用に供することにした、唯道具は茶道家に持參して貰はねばならず、館に備へ附けのものは希望に依つては貸すが、これには祿なものはないのである」と



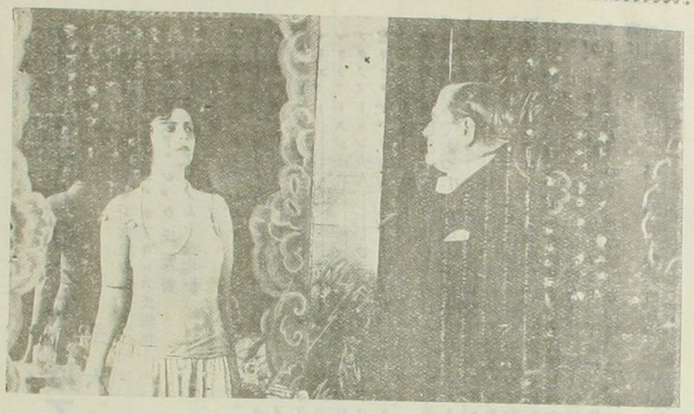
さて此畫稿は故實の上より觀ても、構圖の上より觀ても、寬裕優雅の狀現はれて、如何にも歌人其人を偲ばしむるものあり。而してこれら百畫像は古圖より出でゝ古圖を脫化せるものなるを以て、それぞれ正確なる典據を有すること前に言へる如くなるが、今試に若干の像に就いて、その出所かと思はるゝものを列擧して參考の資に供せん。卽ち第一圖「天智天皇」は光長の『年中行事』中の圖が其根據なるべく、第二圖の「持統天皇」は奈良の藥師寺に安置せる神功皇后の木像に酷似し、その手にせる團扇は、『聖皇曼陀羅』中の畫像の翳せるものが取入れられしにはあらざる歟。「柿本人麿」は信實の『三十六歌仙』に據りたること明かなり。信實が歌聖人麿を描くに得意なりしは、畫史に傳ふる所の如し。『三十六歌仙』に據りたるものには、原圖其儘なるは「小野小町」あり。藤原朝臣敏行の像より來れる「源宗于朝臣」あり、多少の變化の見ゆる「權中納言敦忠」あり、又坂上是則の像より出でたる「參議雅經」、僧正遍昭が根柢となれる「前大僧正慈圓」等あり。また信實の『普賢十羅刹』に據れるものは、同圖の右下より三番目を「右近」に、左の下を「小式部」に、左の上を「清少納言」に、右の下を「周防」に、右の下の隅を「紀伊」に採りて描きたり。『伴大納言双子』に據りたるものに「元良親王」、「三條右大臣」、「清原深養父」等を認め得らる。『紫式部日記』より出でたるものに「壬生忠岑」、「伊勢大輔」あり。「紫式部」もまた此日記に同じ姿の見ゆれど『春日驗記』が一層鮮かなる如し。「藤原實方朝臣」、「源兼昌」も『春日驗記』なり。「藤原基俊」は『北野緣起』中に出でたる子供の姿を大人に描き改めしやうに見ゆ。「鎌倉右大臣」は神護寺所藏の源頼朝の木像に據れるらしく、「皇太后宮太夫俊成」は古畫像に基づけり。讃岐琴平神社に藏する爲恭の遺物中に其原圖と思はるゝもの存せり。「藤原定家」は信實筆の肖像より來れり。「山邊赤人」及び「猿丸太夫」の如きは古來確實なる肖像なければ、これらは說明附の四像と同じやうなる考案に成りたるならん歟。其他も個々に繪卷物などに對照すれば首肯せらるゝもの多からんが、そは後日に讓る。

斯くの如く博覽多識にして大和繪に忠實なる爲恭の畫が、尾州德川家所藏『隆能源氏』（春日畫所預主殿頭藤原隆能筆、藤原時代の著名なる繪卷物）及び大阪四天王寺の寶物『扇面古寫經』の畫等に影響を受くる所なきは、蓋し彼れが未見の故なりし爲か疑問なり。

○伊藤博文の萬流版を複製せんことを謀りしの
八數年前のことであつたが、ヤット三冊の内上巻一冊
丈け複製を生、来本月中巻が出来る筈
である、萬流の版全部を複製せんことを謀りしに
多分没収されたるが、今ごろ日本化したるそれ八
と思ふ、全く日本風と洋風と折衷したる体裁も
吉かんで後日本風と西洋風と何れが一般に
風を好むか(と尚ほ解しかねる)き解しかねるも、又イツ
ツアの模型の前も多く印刷のものであるが、古雅
の点に於ては一層優るべき味がある、営利の点
智るべき後世元から二風したるものであるかの如き
思ふ。

十二行

○温故叢録という書を得て、諸書の華を
多く抄録したるものである、若者は一読を
ることのである、若者は一読を
希輯とあり、巻首に寛政乙卯年四月官之弘人
三輪陽典の漢文の序がある、若者の西人とこの
序に拠ると西土のものであることがてる、北人は多く
の華を摸写し、之に附属する考証の比あひ
ることがてる、比書は好古の流の年間政府も出版もんと
試みたことがあるが、西洋現に権心、農商務者の刊
行のある果たし主流と合されるのである、権勢の者
汁を以てしても和らくることあり、遠華の毒歎



獨逸ウファ社映畫　アルフォンズ・ドゥデー氏原作

悲劇 名花サッフォー 全七卷

デミトリ・プコウエスキ氏脚色並監督
アルバート・ウイラック氏撮影

「サッフォー」ルシール・ラ・ローシュ……ポーラ・ネグリ嬢
ルシアール・ジョールジ……ヨハネス・リーマン氏
テディー……アルバート・スタイルック氏
マリア・ガルデル……オットー・トレブトー氏
ルシアールの母……ヘルガ・モランダ嬢
エルザ・ワゲネル嬢

——梗概——

文化の華咲く古ギリシアに花顏情熱の女流詩人サッフォーと言ふ者があつた。彼女は失戀の苦汁を嘗め、悲嘆の餘り、哀調悲戀の頌な賦吟しながら巖頭から飛び下りて自殺した。時はこれより二千年後の事である。

ルシール・ラ・ローシュと云ふ踊り女は「サッフォー」と呼ばれて若い男達の身を心も奪つて居た。彼女に最も熱烈な愛を捧げたのは兄の心狂つた事を知つて故郷に歸つて來たルシアールであつた。サッフォーも又此の純な青年に凡ての愛を捧げて居たのである。彼等二人の間には樂しい夢の樣な日が續いた。併し或る日ルシアールは忌れたが爲であると云ふ事である。ルシアールは岐路に立つて迷つた。そして彼は兄の爲にサッフォーの許を去つた。サッフォーは悲しみつた。彼女はルシアールを忘れる事が出來なかつた。彼女も又戀を失つたのである。カーニヴァルの夜である狂人は家を飛び出した。そしてサッフォーの後を追つた。弟は狂人の後を……狂人はサッフォーの骸を抱いて氣味惡く笑つて居た。

説明　泉虎夫　伴奏曲目選定　賀洞喜代治

メトロ社映畫　ヴィクター・シェルチンゲル氏監督

哀話　**フランダースの少年**　全八卷

ウイダ女史の小說『フランダースの犬』より

ウオルター・アンソニー氏映畫化

ネロ……ジャッキー・クーガン君
イェハン・ダアズ……ナイゲル・ドゥ・ブルリエ氏
パース・コヘツ……フィオネル・ベルモーア氏
其の妻マリー……ネル・クレイグ嬢
其の娘アロア……ジアン・カーペンター嬢
クロンスュタット……ラス・ポウエル氏
ロカルト……ローレンス・フィッシャー氏
ドウンベルト……アミ・チャーランド氏
パトラッシェ……テッディー

——梗概——

風はおだやかに、白い雲は浮いて居る、風車はからく廻つて居る、だが孤兒ネロの心は淋しかつた。お祖父樣の死んで仕舞つた今日此頃は本當に物憂い。お祖父樣の居らした時でも、三度の食事が取れぬ時もありました。又目の見へないお祖父樣と牛乳車を引いて朝の冷たい空氣をついて町まで出るのは大變に苦痛でありました。併しお祖父樣と二人だと云ふ事が何よりの慰めに成つて居たのでしたのに、そのお祖父樣が居ない今は、何と云ふ冷い世間であらう、地主から住み馴れた家を追ひ出されて、何處で今夜は寢たら宜いだらう救つてやつたパトラッシェは手助けになる可愛い犬だが、犬だけに相談にならぬ。どうしたらいゝだらう、もう藷も藷も揚げないだらうか、悲しいなあ。

併し、地主の娘アロアは、彼をそつと納屋に入れた、そして幾日かして、幼い彼の手に美事な畫が出來たが、貧乏人であるので、町の教會に飾られないで居たが、やつとその才能が認められた時には彼はパトラッシェと相抱いて冷めたく降る雪に埋まれて居た……。

說明　山野一郎

伴奏曲目選定　長谷川秋市

十二行

フランダーの犬

岡崎眞砂雄

○この『フランダーの少年』はウイーダの『フランダーの犬』を土台として作つたもので、昨年の五月にメトロ社を通じて市場に發賣された映畫です。一體この『フランダーの犬』と云ふ小說は、大變に變つたそして强く哀調で彩られた面白い小說ですが、映畫化されたこの『フランダーの少年』は、いつものクーガン型とも云ふべき一種の型に嵌められて仕舞つて、ウイーダの特異な持味は傷へられて居ません。一體、クーガン映畫、即ちジアクグ・クーガン・センニヤーが、クーガン・ジュニヤーの爲に選んだ脚本に依つて作られた映畫は、原作を遠く離れて、同じ樣にある型を取ります、私が云ふこれがクーガン型なので、からした行方は、現在のクーガンを活かす上に於ては、利口の樣に見へますが、將來の事を考へると、クーガン・センニヤーは、よく考へ直さなければならないと思ひます。ヴァラエティーと云ふものは、何に依らず必要です。この映畫の原作が非常に變つた味を持つて居た丈けに、本當にもつとクーガンを美しく見せ、彼の生命を長からしめ得たものをと殘念に思はれます。

○この『フランダーの犬』の原作者ウイーダとは、ルイズ・デ・ラ・ラメエーのペンネームで、彼女はフランス人を父とし、イギリス人を母として、一八三九年の一月英國に生れた一八八〇年頃相當に鳴らした英國の小說家であります。彼女が文壇に乘り出したのは、一八八六年『Held in Bondage』と云ふ小說を發表してからの事でありますが、それ以前にも雜誌に短篇小說を寄せた事はある樣です。

この『フランダーの犬』は、一八七二年の作で、伊太利に居を移してから書いたものです。この當時、彼女は小說の外に英、佛、伊の文學の評論等にも手を染めて居ました。彼女は初めからお金に緣が薄く、一八九〇年時分、即ち彼女の名聲が昔日のおもかげを失つた時分からは、非常な貧苦に陷り、伊太利の陋居に一八九八年、寂り寞まれて居なかつた生涯を終つたのでした。彼女の小說は、美しく又劇的で興味はありますが、見解がドグマに陷し勝ちな上に、筆致に誇張あるのと事件の經過、人物の心理過程に無理が多かつた事が、大分當時の批評家に批難されて居た樣です。

○ネロとお祖父樣との關係、お祖父樣は、兵隊上りで、長いナポレオン戰爭の結果は彼に何んの報ひる所もなく、唯彼な片輪にして仕舞つたのです。彼がもう八十に成らうと云ふ時分、彼の娘は二つに成る赤ん坊を殘して死にました。これがこの物語の主人公ネロなのです。パトラッシェと云ふ彼等二人のこの世の唯一の友達に成つた犬は、耳のピンと立つた、肢を踏くフン張つた山犬の樣な犬で、フランダーとブラバンを往復する荷車を引曳つて居た兩親から生れ、皆と拳骨と怒鳴に依つて育てられ、それも未だ充分生長しない內に親方の同じ仲間の醉どれに賣られ兩親と同じ苦勞して居る事二年で、終に斃れ、親方が道傍の溝へ飜込んだのを、ネロとお祖父樣が拾つたのです。

そしてネロがパトラッシェを抱いて雪の中に死んだのは、彼が十五の年の事です。

○この『フランダーの犬』の次にジャッキーが作つた映畫が『小ロビンソン・クルーソー』で、その次ぎが極く最近に發賣された『屋根』『The Log Man』です、これは皆樣と大分お馴染である劇作家ウイラード・マック氏の書いたもので、監督は、キートン喜劇に於てバスター・キートン氏と常に共同監督をして居たエディー・クライン氏が特にジャッキーの爲にメガホーンを取つたものです。

○唐時報出身先輩の話柄と係る飽迄同好社の
旅行と金が吉日択んで二三の旅侠を試みとのを兼
記し、それを同社の雑誌に掲けんとまるを押止め改め
一稿をおのおのすることゝなし其の憂暇なのもし
"頼山陽ほど人気のあるものは他にあまりあるまへ
そんな社会でも受けがらく、人気は年を
逐ふて降れど昔を慶んでくる抑々ある、
その著述が盛んに流布して今も一向衰へ
ず子が無いのみか、其の書画のことさら珍重
されて、断簡零紙と雖も貴重のことさ
れ、容易に現はしてある、山陽と云
へば容易ならぬ価を現はしてある、山陽と云
へば実に人も車も之のを慕ふの

十二行

○過る廿日頃より日人の河に溝渠[illegible]するものゝ如く、早速整爪の如き流石に廣島生れ丈あり迚も〳〵婚姻の儀は出来ぬと断り二回も後刻の事と話さず傲岸の徳市義降十五の娘民子を、三日の後に、電車内に往き、此者を手のすると、ものを認め、貴掬をうけ、長き帝国万歳主役本を流石馬鹿あきれます。とよそ丸に、三版を出すかも知れぬ。なんかの事れう、和田萬吉を以て二日後の話を時事新報に掲くる筈と報じ来る

十月廿日記

『隨筆賴山陽』を讀む（一）

蘇峰生

市島春城君の『隨筆賴山陽』は、此種の著書として、近頃出色の一と云ふ可き歟。予は之を通讀して、解事者と與に、山陽に就て語るの心地がした。

此書は山陽傳でもなく、山陽論でもなく、又た山陽評でもない。云はゞ山陽に對する側面觀、若しくは山陽に關する雜說、若しくは風聞錄と云ふ可き歟た。併し其の資料は、頗る豐富であると與に、其の取捨も亦た妥當にして、精要を得たるに感服し。

但た率直に云へば、神社は結構たが、其の神體の如きは物足らぬ感がある。即ちあらゆる方面の山陽は、說き盡して餘蘊なきも、山陽其人の本領、眞面目は、何となく茫漠たる。併し著者は却て之を其の本意としたかも知れない。そは山陽の本領、眞面目は、世間的に之を知り盡くしてあるから、却て世間の未た知らざる方面を、開拓するにあつたかも知れない。著者は山陽が規模偉であり、殊に記者は曾て新島襄先生より聽いた。安中侯板倉靜明が、大阪城代として在るや、篠崎小竹は、其のお出入りの儒者として、門下に趨走したが、今日もお酒頂戴して、酒樽を擔へ、順次請ひ持ち去つたと云ふ云ふ迄もなく新島先生は、安中藩士たる。

山陽は曾て小竹に、御身はふ儒たるが、侯門に酒の無心に出掛くる程なれば、當時の儒者、文士の、自尊心消磨したる態度、以て想ひ見る可しと。山陽は死にも角にも、此點高貴の人に屈せずして、其節を全うした。之を思へば、彼が財布の口を締むるのみならず、出來得る程度に於て、稼がんとしたるも、決して強く咎む可き理由はあるまい。

大しまりやであり、世間で思ふよりも、世渡りが上手であり。且つ死後には、妻子を藏ふたけの貯金も、出來てあたことを語りてある。而して彼が山陽遠十往返も、老母を廣島に省みる爲めはかりでなく、淀道の旅稼ぎの爲めであつたらうと、推定してゐる。

併し家に定祿なく、身に定職なく、而して學者としての尊嚴を保持せんとするには、隨分骨が折れたであらう。記者は山陽に深く同情するを禁じ得ない。然も彼が表も角も、他の幇間文士の如くならずして、せめて表面たりとも、獨立自尊の位地を、保持したのは、當時に於ては大出來と云はねばならぬ。

『隨筆山陽』を讀む（二）

蘇峰生

山陽は全くお山の大將であつた。京畿に於ける交際の中、小竹以外には、殆んど擊劍上の益友は無つた。併し其の朋友、門生は、決して乏しくなかつた。著者は多く之を語つてゐるが、其の門人關藤成章に就て說く所なきは、聊か物足らぬ感がある。關藤成章は、天下の老中阿部伊勢守の愼刀石川和介、後に石川文兵衛のことだ。

晩年の山陽は、最も彼を親信した。山陽の出づるや、彼は樞ね從うた。然らざれば彼は山陽の依賴にて、其の留守番となつた。天保壬辰（三年）山陽沒する歲の五月、山陽の最終の旅行として、彼は實に其の隨行者であつた。

山陽の死前死後、最も力を竭した一人は、恐らくは彼であつたらう。本書中に揭げられる未亡人梨影子が、馬關の賣江吉郎夫婦に與へたる書中にも、

六月十三日よりかねて一兩年心がけのちじつ（著述）とも、いまたさうこう（草稿）まゝにて、夫を熟中にせき（關）五郎子いらへ候てうつさし、今ま關除希遺稿を見れば、たゞ元日永西莊感生一人にまかし候てかかされ、又自身がなを一候てうつさし、

日本せい記を申物に候。又なをし、其間に詩文又たいはつ（此れは豐後關坡の事であらう）みなゝはん版になり候やうに、さつぱりとしらべ申候。右せき（政記）も、九月廿三日迄はつ文迄出來上り候、廿三日夕七つ前（午後四時前）迄五郎子かゝりうつし候。夫を又見申候て安心いたし、半時たゝぬ内ふし被し申候所、私むねをさすり居候、うしろにいるは五郎かと申、もはや夫きもにて候。これ六つさきに候。

さある。此の關五郎が、卽ち關藤成章其人である。

三面庭梅未ㇾ著花。春風吹動柳條斜。仙遊隔ㇾ世君知否。迎ㇾ歲吾猶在ㇾ此家。

と。小野湖山は、評して頗門の子貢と稱す可しと云うてある。

古人も舊ふる所、用ふる所に非ずと、最終の旅行として、舊ふる所にあらずと言うた。舊家の大故に際しても、其の鄕に當りたるは、卽て此の晩來新進の關五郎であつたのは、不思議の關係でも不思議でない。

學者としての進除は、日本政記の著述に、手傳うたに過ぎなかつたが、政治家としての彼は、若し其非阿部正弘にして、其識を永からしめたならば、必らず爲す所があつたであらう。此の意味に於ては、同じく幾來の門人でも、宮原節庵抔とは、同日の論ではあるまい。

『隨筆賴山陽』を讀む（三）

蘇峰生

頭相照兩暗然。此れは正しく彼が東遊の志を擔ぐるつもりであつた乎。著者は彼が昌平黌に聽せられ、將軍家直參の儒者たらんと欲するにあつたと、云うてゐるが、其事に就ては、記者は未た意見を保留して置く。但た彼が十八歲より十九歲以來、未た足跡みせざる江戸に志したるは、恐らくは間違あるまい。彼が天保壬辰の初一即ち其の死亡の歲一書富士に題する一絕に曰く、

自別芙蓉三十年。空於夢裏一瞥雲烟。再會遽驚胸常作一日。白

（承前）

山陽は京都を終焉の地としたのであつた乎、將た江戸に出でて、一飛躍ぐるつもりであつた乎。著者は

＊　＊　＊

尚ほ山陽の親友梁川星巖が、翌年の首夏、山陽長子聿庵の江戸より歸州に還るを送れる長律に、

聽唏催得發征軍。留滯汗城兩歲除。脅撫承歡爲慈逸。豈圖泣血是奚魚。慈邊勤慰客衣冷。望裏白雲親杏虛。行到琵琶湖水畔。知君弔影重獻歟。

と題して其の附注に、

聿庵（山陽長子聿庵）承緒（聿庵）修二解作一、人間に遺す可かりし乎。

＊　＊　＊

斯る問題は、無益こと云へば、無益である。假し記者は有識に云へば、遂成「永訣」

こゝある。此の附註によりて、山陽の東遊の志は、殆んど實行的範圍に進んでゐたるが判知る。但た此れが仕官の望みであつた乎、否乎は、容易に決し難い。

＊　＊　＊

少くとも日本外史は不朽である。假し暮から云へば、文士としての山陽の作物は、決して多しと云ふ能はず。山陽全集を編しても、恐らくは馬琴の半は愚ろか、三分一にも及ぶまい。而して山陽にして、五十三歲にして逝かず、假りに二十年を假して、七十三歲迄生存せしめたらは、彼は果して幾許の製作を、人間に遺す可かりし乎。

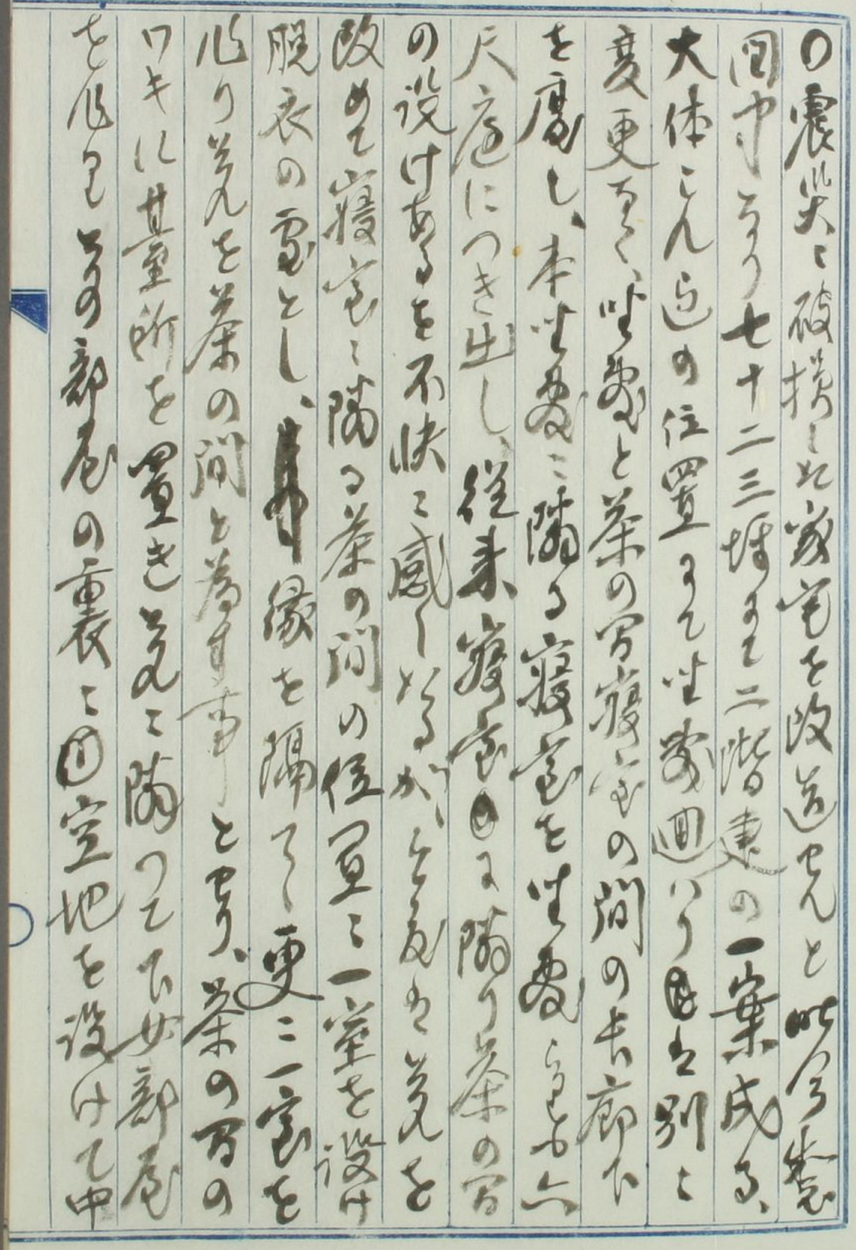
＊　＊　＊

斯る問題は、無益こと云へば、無益である。假し記者は有識に云へば、五十三歲にして死したる山陽は、寧ろ仕合せであつたと思ふ。彼は如何に努力しても、山陽詩鈔、外史、政記以上の著作は、爰來ないではあるまい乎。而して彼は勉強家ではあつたが、決して精力過絕こと云ふ程ではなかつた。實を云へは彼は一生の中に、其の成す可きものを成し、其の成さんこと欲する所のものを成した。

＊　＊　＊

市島春城君の『頼襄輔山陽』は、決して世間に行り觸れたる杜撰のものではない。山陽をして之を讀ませしむるも、其の七八分迄は、首肯す可き價値が存する。（完）

十二行



廊下を以て寝室の次の間に光線を等く取入れ、その廊下を隔て於て寝室の脇に校の間を以り便所を設け、関係往来の便所の位地を異し而も互ひに校の間を設くることとし、家扶の室ハ舎の如し、又往来茶室の隣りに二ヶ室の用を為さしめ、その内一室を以て玄関の地位に一室を設け玄関を置くの意とす、湯殿ハ別る廊下に従ひて押入を以て之に接し、茶室ハ再築せさる事、二階二間ハ西ノ方に充つる事、大略左の如し

を以て大略三分の二若干坪の図面とす

○家屋を改造するの資金ハ古書と図書を売りて
方法をつくるのみなし、古き前より売るべき書
画幅七十五點を撿出し番號を附し目録
を作る、これ丈にてハ五千円を得るも困難なるべし、
他に割合に思ひなる書画四五十點あり、これ必ず
しも便宜に売らしむべきにあらざれども趣味の存す
ることなり、出来得べくんバ親戚に買ハせ度きことの
なり、此部類二千円などのことあるべき歟、骨董
類ハ売却するとしても壱万円を得らるべき
形勢也、但し家屋の印ハ相当の価あれどもこれハ
骨董類と如く貴重なる保留の積りなり
右の資本にて図書をも売却せざれハ到底建築費

を償ふに足らず、偶々名古屋の市当局が余の蔵書を全
部購入せんとするの意あり、平山堂金を売却をすゝめ
来たり、目録を示すことゝなしたるが、如何に話が行く
や未だ明かならざれども、何れにも図書を売却するとせば
原価を取調ぶるの必要あり、幸に購書の都度
価を記し置き購書歴三冊あり、然れども漏れたるもの
しあれども[illegible]て合計を算出しおくことゝなし、仍て
家族に命じ大正十一年七月以降同十四年四月末迄の
購書歴の合計を算出せしめたるに壱万九百
六十円の数を得たり、乃ち内訳左の如し

十一年七月より十二月末迄　二千三百三十七円三十銭
十二年一月より十二年十二月末迄　七千三百七十円

十四年一月より四月まで
他の二冊の婚書歴の合計八通を通じ計算すべし
大正八年十月より同十一年七月迄
統計 八千三百七十九回十一年七月迄
一千二百余冊
十一年七月より
約壱萬九千回也
大正八年以前の婚姻歴今手元に無く計算
に由りて其多約六七千回ならんか
回書保数元帳の記事果たのめし
四千九百枚前後
大正八年以前の婚姻歴は同じく他に預けありて

十二行

今取調べかきたる二萬回に達すべし、印譜
数と寸珍本は此内より控除すべきも、二萬五千
回乃至三萬回に達すべし、仲人者の手数料は
ひ難し、回書の数は載せざるべし、
三千ヶ部
三千ヶ部あり、北裏目録と称めて
きものは大概一部十冊以上のものにて
二千二百部
ある部を
三千ヶ部
も既に売萬回以上の
三千部を
売弘めたることを
附記 印譜は印と保証
寸珍本統数一千二百ヶ部
数に書き再考慮約百あり、一帖平均三十

円とて三千円の便あるも路の小西にあるの便
あんパン千円ハあるの便とあるず

○襟懐絶塵と署せるすゐの書幅を得入る寸
尺小軸度の室にいかゝふ、巻首に江村雪山の数
字あり別に一紙入れを書すす、嘗刻家可亭
の旧書「谷一紙入れ杉村谷の山水あり田中緑雲
の柏寺、市川の茶の書あ
り、すゐ両幅の一ニかゝるべし
○山来南宋の技法が追々洋化しつゝある、デパート
メント、ストアが生来のもの
であつて、三越なども

十二月廿日記

業ハ呉服も一部業のデパートメントストアが利の
お掃除されて来た、先づ着めの小売舗のもつ高が風
ひとく脅威を感じてゐる、通信販売が其次ぎ
々行なわれそれも之も追々盛んになつて所謂デパート
お行なわれるものの世界をおそれ手度
ろいそれ廿四五年前の二三新もある程の大冊
のものであつた、日本ハまだ交通(鉄道)が不便(なり)と甲
便が多くかゝる為めに盛んなるにいたらず
交通の便と比例してデパートといふものが発展
勿論震災前からも其形はあつた、東京駅附近の高

架軌道の下を利用して一列に店を設け、店前に並
棚を以つてするといふやうなことをしてゐるといふ、アルケードの式をも
いふ。街道に接してゐるが、あの辺地帯で列をなして並ける
人車馬車自動車を避ける必要もなく悠々と
歩けるといふ点がアルケード式である、萩棚の代りに
ガラスの天井でも張つた式とでもいふのである、丸ビルも震災
洋風のものゝ如きは勿論真の
前のものゝ如きこの巨大な建物も十分の形に於て
してあつて店舗がそろひ美しくかつ
西洋の如きアルケード式と云ひ得るであらう、震災
後改修の後日も猶前の様に
天井二日復を張つた店舗の両側に向き合つて並

人なるものがある、あの日ハリ前に
式に倣つたものであらう、尚千エーン、ストアといふのが
ポツ〳〵見へる、信盛堂千エーン高座といふ称も
看板の文字にある、千エーン即ちリ
サリの意である、同式の店を各所に設けて売る
らクサリのリングであるといふから然かもある
のであらう、西洋の北式の店舗はドコに入つて同式同
形で店の入口の勾合から
階あり十度ある物もあるのもあるが
のもある、黄店に入ると後手が入口にある日ふれてある日
ハまよ西洋の秋の夜長ーてハおらぬが如き

未だいくらも發達するに至らぬ、此チエーン法に倣つたのでドウカ知らぬが、いろはと云ふ牛肉店が當時大繁昌で前に東京市中到る處にあつて、其店の形式も女中の服裝も皆何れの店舗も同樣であるといふを以て評判を出したことがある。其のいろはの支店は今日まで多くあると人は皆氣が附いたが、チエーン式の趣のあることを今の人は氣付かなかつたが、今日西洋と倣つて工風せられて以來、漸く大資本をかけて一手で大仕掛の商業を爲すことが追々盛んになるを便利とするの趣意であるが、小資本の商店は顧慮を感じ終には衰滅に瀕するの傾向のあることは甚し、事は誰い勢となつて來たことを感ずる

○富嶽の下に一大公園を經營すべしとの説は久しい間唱へ傳へられて唱へられたことだが、多くの人は夢想であるとされ實地其の計畫を立てゝ之れを實現せんとしたものはなかつたが、今や漸やく其の事が實行されようとして居る。時恰も鐵路と飛び其等つた一括の出數は富士の林藤に通ずる四十五哩の鐵道を敷設する計畫が議せられてゐる。これが即ち其林藤公園を作るの一大手段である。此の鐵道を敷く爲めに十五萬圓の金額を投じ而して其の土地金額を設し別莊住宅をなすといふ計畫をすべて亞米利加に大公園を作つた先例に則つたもので、交通機を通ずることが何んといふても先驅であると思へるからで將來の公園研究をした田村剛といふ人の此經營

今回、山梨縣知事本間利雄氏主唱と成り、縣下官民有志の發起にて、富士山麓勝地開發の企畫を爲し、在京山梨縣人實業家亦熱心此擧に應援して其實行に黽めつゝあり。其方法の一として岳麓を周遊する電氣鐵道會社（資本金五百萬圓）を創設し、岳麓に於ける山梨縣有地三百萬坪の永遠貸附を受くると共に、沿線町村有地壹百萬坪を買收して、之を兩會社株主に開放し、以て別莊の施設を民衆的ならしむる一方、延いて國民の保健、敎化に貢獻し、且つ多數の內外觀光客を誘致せんとす。然も現在の風致を保存し、更に將來國立公園としての施設に對應せしむる爲め、歐米各國に於ける國立公園の調査をなし、最近歸朝せられたる斯道の權威林學博士田村剛氏を聘し、大正十四年三月二十日本間山梨縣知事を始め根津嘉一郎、志村源太郎、神戸挌一、若尾璋八、若尾謹之助、若尾幾太郎、植村澄三郎、中島滋太郎、穴水要七、堀田金四郎、小野耕一、德田昂平、藤田胸太郎、關本英作、田邊七六、河西豐太郎、三枝彥太郎、古屋德兵衞、小澤信之輔、塚原元兵衞、穴水熊雄、內藤彥一、堀內良平の諸氏其他十數名日本工業俱樂部に集まり、同博士の講演を聽取したるを以て、其筆記を謄寫に代へ、廣く同好の士に配布せんとす。

拜啓

愈々御清適の段奉大賀候

偖て富士山麓の雄大なる景觀は事新しく吹聽する迄もなく、先年　攝政宮殿下の御巡遊に依り、この大自然に對する國民的憧憬を一層旺盛ならしむるに至りたるは、國民の保健並に教化の上に鑑み、寔に同慶至極の儀と存候、御承知の如く富士山麓は海拔三千五百尺の高地にある熔岩地帶にして、空氣乾燥清澄、衛生上申分なき別天地たるのみならず、山麓を繞りて點出せられたる五個の湖水は宛として太古の靜寂を偲ばしめ、千年の姿態を競ふ青木ケ原の大森林は往昔より樹海の名に依りて其神秘的壯觀を想はしむ、然かも春は滿目の新綠に映じて躑躅、馬醉木などの咲亂れたる岳麓特有の風趣あり、夏は現代の世界的流行たる高原生活に、秋は紅葉と千草の觀賞に、冬は三ケ月に亘り完全に結氷する山中、河口、精進三湖上のスケート、或は山麓一帶の痛快無比なるスキーに、四季夫々の興趣擧げて數ふべくも非ず、殊に精進湖の如きは今を距る三十年前、一英國人の發見する處となり、此處に精進ホテルを建設し、我々日本人の頭上を越えて遙かに海外に宣傳し來りたるが、其結果、今日に於ては世界的勝地の重なるものとして著聞するに至り、先年英國皇儲殿下御來朝の砌は、岳麓御巡遊の一項を英國にて作成せるプログラム中に加へられありたる如き確かに岳麓の景觀を世界的に裏書するものと存候、若夫れ斯る大自然の勝區が東京より僅々三時間にして到着し得べき地點にあるは、各國々立公園中他に類例なき處に有之、此地帶の一部を開放して其處に湖畔別莊、林間別莊、高原別莊を經營し、簡易小規模の民衆的別莊部落として汎く一般國民の利用を見るに至らんことは、吾人の希望已む能はざる處に有之候

而して今次、山梨縣に於て、米國レニヤ國立公園の施設に倣ひ岳麓開發に關する方針を樹立し、先づ交通機關を整備する爲め資本金五百萬圓を以て富士山麓電氣鐵道株式會社を創立せんとす、該鐵道線路は大部分政府の豫定線路に該當するを以て地方鐵道補助法の規定により利益率七朱に達する迄の補償を受る見込なるも別に姉妹會社として資本金壹百萬圓の富士山麓土地株式會社を創立し別莊建設に適當せる山梨縣有地三百萬坪の永遠借入をなし又沿線町村有地壹百萬坪を低價にて買收し、電鐵土地兩會社の株主に對し無償に等しき條件を以て株式十二株に付土地壹百八十坪（株式一株に付十五坪相添へ）の割合にて富士山麓絶勝の地に於て別莊地を收得すべき頗る有利の方法相立候間別紙創立目論見書並に田村林學博士講演筆記御一覽の上株式豫約御申込被成下度此段得貴意候

草々敬具

大正十四年四月　日

於ける山梨縣有地三百萬坪の永遠貸附を受け社株主に開放し、以て別莊の施設を民衆的ならしむる一方、延いて國民の保健、教化に貢獻し、且つ多數の内外觀光客を誘致せんとす。然も現在の風致を保存し、更に將來國立公園としての施設に對應せしむる爲め、歐米各國に於ける國立公園の調査をなし、最近歸朝せられたる斯道の權威林學博士田村剛氏を聘し、大正十四年三月二十日本間山梨縣知事を始め根津嘉一郎、志村源太郎、神戸擧一、若尾璋八、若尾謹之助、若尾幾太郎、植村澄三郎、中島滋太郎、穴水要七、堀田金四郎、小野新一、德田昻平、藤田胸太郎、關本英作、田邊七六、河西豐太郎、三枝彦太郎、古屋德兵衞、小澤信之輔、塚原元兵衞、穴水熊雄、内藤彦一、堀内良平の諸氏其他十數名日本工業倶樂部に集まり、同博士の講演を聽取したるを以て、其筆記を謄寫に代へ、廣く同好の士に配布せんとす。

共同で利用出來るやうに設備をして戴けると、甚だ結構だと思ふ。兎に角私は、斯う云ふ岳麓地方に相應しい宿泊設備享樂設備と云ふものは、いろ〳〵な種類が欲しいのでありますが、結局は多數の人を此處へ呼び寄せると云ふのが、根本にならなければならぬと思ふ。

私は岳麓地方が、他の地方に對して一番の特色は何かと云へば、大都會に非常に接近して、あれ程異常なものがあると云ふことであると思ふのであります。兎に角東京から中央線で三時間（電化されゝば）御殿場の方から行つて四時間、こんなに短い時間であれ程の大天然公園に接し得ると云ふことは、外國では殆ど考へられない。東京ほどの大都會から、三四時間であれ程のものを利用されると云ふことは實に大した天惠だと思ひます。從つて施設に就ては、短時間で利用出來ると云ふことも考へて戴きたい。別莊を持たなくても、或はホテルに何日間も滯在しなくても、日歸り、或は一泊位で、十分利用出來ると云ふやうな方法を講じて戴きたい。日光其他名勝地は多くありますが、簡易に探勝出來ると云ふ箇所が少ない。御承知の如く東京市に近い高雄山の如きは、今日四十五萬人の人を呼んで居ります。今日比較的不便な日光が總てゞ四十萬人しか呼んでゐない。世界的な大日光と高雄山とが相匹敵しようとは思ひませぬが、而も都市への遠近は、利用者に於て斯樣な結果を齎らすのであります。富士を最も簡易に、日歸り或は一泊位で利用出來る、經費も是れ〳〵で安く上ると云ふのであれば、利用者は非常に增加するであらうと思ふ。交通機關の經營等に就て此點を御心配願ひたいと思

ふ。殊に彼處は東海道、中央線に接して居ります爲めに、此處を通りかゝりの人が、ちよつと途中で立寄つて探勝し得ると云ふやうな方法も欲しいものだと思ふのであります。無論岳麓の異常なる大風景——日本の風景を代表して居り、雄大な、そして優美を失はない所の完全な風景地を、唯今申上げたやうな日歸りの旅だけで味ひ、探勝すると云ふのは、實に勿體ないことであります。無論國家的の大公園としての設備をし、經營をしなければならぬのでありますが、併し一方唯今のやうな東京市の一つの市外公園と云ふやうな考で、此方の施設をすると云ふことも必要な事だと思ふ。

それから局部の施設としましては、彼處は他の山岳を中心にする公園と違ひまして、非常に親しみ易い風景地であります。子供でも婦人でも滿足する事の出來る、親しみ易い、長く滯在し易い地であります。大風景地でありながら親しみ易い、家族的な休養地であると云ふ點が、一つの特色だと思ふ。斯う云ふ方面に總ての施設を特色附けるやうにして戴きたい。殊に幸福な事には、今日迄是れと云ふ施設がしてない。謂はゞ白紙であります。白紙の儘殘つて居つたと云ふことも、非常に幸福だつたと思ふ。是が今日迄既に何等かの特色を以て發展して居つたとすれば、——箱根の如き、日光の如き一つの空氣が出來て居つたとすれば、將來理想的な計畫を行ふと云ふことも至極困難でありますが、あそこはさうでなく、白紙で殘つて居るのでありますから、自由に、理想的な民衆的施設を是から描き出す事が出來る。是も非常に結構な事と思ふ。それから其次にあそこの非常な特色と思ひますのは、

岳麓を中心にしまして、附近に名勝地が非常に多いと云ふことであります。從つて公園區域を廣くしようとすれば、幾らでも廣げられ得るのであります。中でも箱根地方とあそこを連絡すると云ふことは、最も必要なことであらうと思ふ。長尾峠から御殿場へ拔けて須走へ連絡する。是はどうしても成立たなければならぬものだと思ふ。今日迄箱根が貴族的に發達して居りますから、一方はどうしてもそれと違つた特色を持たせるやうに仕向けると云ふことも、益々意義を持つ譯であります。それから一方大宮から身延、殊に富士川下りと云ふやうな、斯う云ふ別樣の名勝地がある。或は北の方に參りますと女坂を越えて甲府に出て、今日既に著名になつた御嶽もある。かう云ふやうな地方とも連絡を圖る事が出來る。之に就ては東海道線又は中央線の主要な驛で、廻遊切符を賣つて戴きたい。是は外國の國立公園で總て採用して居るやり方でありますが、公園の入口で一枚の切符を買へば、其一枚を以て公園内を一週し得る。總ての乘物に乘り得るし、何時乘つても差支ない。どう乘つてどう降りても宜い。其間に泊り、或は食事は何處でやつても宜いと云ふ自由な切符が出來て居る。是は非常に公園を探勝するのに便利であるのみならず、安心して探勝を思ひ附く事が出來る。例へば富士驛で下車した人が、其處で一枚の切符を、十圓か二十圓で買へば、もう一文も無くても是だけは廻つて來られると云ふ一つの安心を得るのであります。さうでなければ幾ら持つてどう廻つて宜いのかと云ふやうな不安がある。斯く云ふやうな切符を、富士驛とか、御殿場とか、大月とか、甲府とか云ふ所で發賣

せられたら面白いと思ふ。あそこを廻遊するのに、いろ〳〵な方法がありますが、例へば東京の人が假りに探勝するとすれば、東京から大月へ出て、吉田から登つて須走へ下る、此間は無論徒歩か馬でありますが、須走から山中、河口、精進、女坂を越えて甲府へ出て、自動車で御嶽を探勝する。それから電車で鰍澤へ出て身延を探勝して大宮から歸つて來る一つの廻遊系統が出來ます。もう一つは東京から箱根へ出て、長尾峠から御殿場、それから登山して吉田口へ降りる。岳麓を探勝して大月或は女坂經由で甲府へ出る。さうして前の如く身延を廻つて來る。是も一つの廻遊であります。それから是等の中で、甲府を略して來る探勝の方法もありませう。是は賃銀を兩樣にすれば宜い。それから例へば關西の方から來たとすれば、大宮口から上つて吉田口に下山し、後は大月又は甲府を經由して中仙道を通つて歸る。或は先に大宮口から上つて須走に下山して、それから先程申上げたやうな順序で廻つて來る。或は關西から東海道線に依つて來た人は、箱根から入つて探勝した上で御殿場へ出て上のやうに廻る。或は中央線に依つて、甲府から先づ始めて身延を探勝し、大宮へ出て大宮口から登山し、吉田口又は須走口へ下山する。湖水地方を見て中央線に依つて歸るご云ふやうな、いろ〳〵な探勝の方法があります。それから三日とか四日とかで廻遊し得るのと、それを短かくしたのと、三通り位の廻遊切符を賣る。同時に極く簡單なパンフレットを出して、それさへあれば一人で探勝出來るやうな方法を考へて戴いたら、非常に便利だらうと思ふ。外國の國立公園では政府の印刷物であります

が、到る處無料で配附してゐる。精密な地圖と、案内、ホテル其他いろ〳〵な娯樂設備、料金等總て書いてある(賃物指示)是等は何れも立派なもので、政府で出してゐるもの〻外、會社が出してゐるものもあるが、何れも無代であります。非常に安心して旅行が出來るのであります。

今日迄岳麓地方が、餘りに偉大なる天惠を持つてゐるに拘らず、其利用が少なかつた。是は寧ろ奇蹟のやうに私共には考へられる。正確な數字は知りませぬが、富士山に登る者が十萬人に足らない。是は餘りに少な過ぎると思ふ。今日の儘でも少なくも五六十萬人の登山者を、直ぐ導く事が出來るやうに爲し得ると思ふ。詰りそれは第一が交通機關が不完全であつたと云ふことに依ると思ふ。無論あそこの交通機關は、富士を一週して、一方は御殿場、一方は富士驛に連絡するやうなことにならなければならぬと思ふが、將來甲府と直接連絡すると云ふことも、非常に結構なことと思ふ。是等の交通機關さへ出來れば今の廻遊系統が完成する譯であります。第二には矢張り宣傳の必要があらうと思ひます。宣傳と云ひましたら唯今のやうな簡單なパンフレットを、停車場等で配るやうな方法で、其他適當な方法がありませう。昨今は殊に日本人も休養生活の必要を、痛切に感ずるやうになつて參つたやうであります。誠に好い傾向だと思ひますが、公休日と云ふものが段々多くなつて參りまして、東京附近の郊外の遊覽地、例へば高雄、御嶽と云ふやうな地方は、土曜の探勝者が大部分でありますが、殊に公休日には、普通の日曜日に比べて倍にもなると云ふ

ことであります。公休日を持つのは中流以下の人であります。それ等の人が斯様に休養を欲して居るものであります。將來公休日は段々多くなつて參るに相違ない。又夏冬の休暇と云ふやうなものも段々多く持つやうになつて來るに相違ないと思ふ。從つて今後の休養地、別莊地、遊覽地と云ふやうなものは、段々利用者の數が增して來るものである。さうしてそれ等は少なくも土曜日曜とか、或は公休日と云ふやうに、切詰めた時間に利用せらるゝものと、又一層長い休暇等を利用さるゝものと二つが入用である。此の兩樣を一箇所で集めて居るものが、實に岳麓の強味であると私は思ふ。殊に岳麓の非常に面白い點は、今日でこそ岳麓は、夏でなければ利用の出來ないものゝ樣に考へられて居りますが、實はあそこは四季を通じて利用し得る可能性を私は持つて居ると思ふ。今日交通機關が不完全な爲めに、大月あたりから入つて行くと云ふのでは、夏でなければ行く氣分がしない。交通機關が完備して、御殿場から一日で一週出來る。一泊で愉快に探勝出來ると云ふやうになると、東海道を旅行する人が、年中何時でもちよつと氣輕に廻つて來る氣分にもなると思ふ。富士の實際景色が好いのは夏ぢやない。春景色若くは秋の紅葉季であります。殊に落葉樹の多い富士一帶の風景の、一番麗はしく裝はれるのは春と秋に相違ない。此の兩方の季節に人を呼ぶ天然の美はしい花や紅葉は、立派に備つて居るのであります。從つて春と秋に、今日以上の遊覽者を惹つけ得ることは、分明であります。私は冬の調査はして居りませぬが、山中、精進、及河口の湖水は冬期結氷してスケートが出來ると云

ふ話であります。最近スケート熱は非常に擴りまして、私も其仲間でありますが、山中附近には又スキーの好適地があると云ふ話で、冬の利用と云ふことも、極めて實行し易い事柄であるやうに思ひます。四季を通じての平民的、家族的、遊覽地として殆ど總ての條件を、一つの地で滿足に備へて居る。斯う云ふ所は實際珍らしいと思ふ。無論私は特に岳麓地方に緣のあります者ではございませぬが、偶然にも二回も詳しく行つて見て居りますので、どうかして此の地方の大きな開發に就て、一日も早く根本の計畫が立つて、着々實行の域に入る事を希つて居つた次第であります。

今日は私專門家の一人としまして、岳麓開發に關する意見を申述べる機會を得ましたことは、非常に光榮とし且つ悅びとする次第であります。甚だ長くなりまして定めて御迷惑でありましたことゝ存じましてお詫を申上げます。（拍手）

○志村源太郎氏　唯今田村博士より、いろ〳〵御調べの結果を御演說下さいまして、岳麓開發に於ての概念をお與へ下さいましたことは、誠に有難く一同を代表しまして御禮を申上げます。是から御自由に御質問を願ひたい。

○本間山梨縣知事　縣の計畫した事で、ちよつと註釋的に申述べて見たい。先づ別莊地の選定に就て大體四箇所豫定してあります。一つは山中湖の方面で、籠坂峠から三國峠にかけて居ります。唯今お話の平民的に開くものとしては、吉田口から馬返しに到る土地の、適當な場所を選びたいと思つて居

○家毎の図書全部に対する冊数の計算を試みたる結果左のごし

大正十四年五月十二日

法書	一六二
古学	一三二
書道	一八五
〃	〃
印譜	四七九
仝元	三〇七
仝元	一三〇
仝元	九三

語勢	三八
釈道神仙	〃
詩補	五六七
和訳	二〇九
画	三八
〃	五六
〃	三四七
〃	六五〇
〃	三三五
〃	二五五
〃	一四三
〃	一七三
〃	九二五

地誌
史傳
随筆
諧藝

書史　一三四
本草　一七〇
筆書　六八
古法帖本　五二
雑補　六三

国文　メ四八七
傳奇　二六九
雑劇　二六三
雑　一三一
　三一〇
詩　メ九七三
　四九九

文　一五六
説話　一五七

合計四千八百九十三部　メ八一二

大正十四年十月現在

寸珍本千三百部の内
此数ニ入ラサルモノ約八百部位アルヘシ

○昨日稀書複製会の同人五人神田龍泉寺町ア
ルドドの京都霜葉吟社ニ会シ、雲奥後ホトヽギス経営
シ玉ヘル一社の政略ニ関シ、二階の中庭ニテ

引き取て京都本宅に帰る、飲食抔もすむ
まで咯々京都のことを思ひ出し兎角を
為す、此日今までの和田の事内田等
高林義相山田ちか抔四人まで、林八一二九一号本
を読て来る、文あり、尚筆子の三番姓来
天心洞の筆等と思ふ、人像●（首座
為すあり）すれば元る、山田もうと会
を来さる、十本まで寛談、尚の出版に係る、衣
行と浴衣をかけ合紙のあるまゝ換抔
異ふ浜形を施し、何人の道、朱出版
くく跡くきこの也、画次金二円著につき
和田内田交ゝまく出来ると喜む、内田のあゐ

十二行

貴著の支流七一頁を山陽をも考のうがある人
うなければなのい貴下自為のまゝ、あくまでと
もあるべしとおもふ、和田八金と頼裏の文政元申
泥後川を淘る箱を帆に押竟しんまと真面白
ことゝ笑て読す、何の為ぬ抔意をあまをも
知らず、画次例のことくいうくの候ふく、お義ま
麻ぬるまで、多く績候す、内田の浜ん永田の
書をかく人世東の各方面を施のしそ程の人て
交うけ其の印象記をしとるとのあゐ、著者の
其内と里田浩隆をもあと合ゆしを折、前に共後
里田事と夜会と再会ことを記す、そん

おのしみを感ずるとともに、九の里田妻八後妻を洋州の村木屯田の娘をもらうこと云ふ事にて、里田の媒酌にて先方へ赴く時酒の徳利を二つ提げ行きしが、よせばよいを北外人に無理に勧めて自から記したる日本書物の人間に対する賞讃の美辞を北外人に読ませんとて、里田妻八林妻と共に北婦人の服装の美なることを賞讃し、外人なる北婦人の服装の美なる北婦人の着衣の眼を一々と見廻りて記すなど無遠慮の洋服をつけ洋館に住む婦人の寝室の模様を細かく聞き、里田夫人の如きは、かしこき、顔をまっかにして、

十二行

人七面ぐらいの若者に憑かれもする、行かねばならぬ時は大抵二階下のコルセットを絞めかける、里田の夫人なるものの後ろ面倒臭の感を抱くらしい、内田の語るに依れば北の若者八北の美男子の条件は里田の妻八例の如く「眼の細き事」を北外人に言ふものなりと解するのなりと云ふ。

五月十四日記

○家内の風邪の部数八昨日の統果を前記したるが、尚今日一部数の増加を来たしたるを以て茲に再数を改めて記す。

あり、亦寸珍圖書を本目録に收めることゝなる、あるにより、爲めに此の正稿の數を減ずるかたちを大略を爲すに千冊を下らざるを知り得べし、即ち左の如し

一、二千〇九十八冊　冊數の内訳

一千一百七十四枚　百七十四枚

一千一百九十四冊　七十枚拍合表

一千三百　冊　冊數不明ノもの四百三十部校りこれ新三冊と計算せり

ソ　十冊ばかりを目録に入れざるもの

一、北合版り　三冊

一、二枚不明、初枚

一、"冊數不明、初枚

（　）

十二月十二日記

十二行

詩	1129.	(53)
文	472.	(27)
佛書	244.	(6)
計	1845	(86)
不明	709.	(122)
仕子	390.	(21)
雜書	269.	(8)
殘卷	63.	(7)
計	1431.	(158)
佛書	646.	(1)
金石拓	623.	(24)
計	1269.	(25)
總計	12,096	(430)

大隈重信侯傳編纂會原稿

あつ、永寿殿図書之印あり、唐本なること明なり。本目録に収めるところの書、悉皆此印あるを以て、唐本の数を知るべきなり。

大略を為すに千冊を下らずと知り得べし。即ち左の如し

一、経二千〇九十八冊　冊数の内訳等
百七十四枚　七を数物の数

一、千貯百九十四冊　冊数の内訳等三十部及び三冊と計算いたし

一、千三百　冊　十部なるも目録に入らざるもの

一、雑四千八百六十二冊

尚各門の冊数の別紙のごとし。

十二月十一日記

十二行

経	465.	(4)	125枚
詩	44.		
物語	348.		1枚
画	620.	(34)	
計	1514.	(42)	140枚
書史	292.	(14)	5枚
本草	548.		
薬書	127.	(2)	
法帖	112.		
靴	118	(1)	
計	1192.	(17)	5枚
地理	913.	(11)	29枚
伝奇	409.	(23)	
随筆	771.	(4)	
芸	441.	(8)	
計	2934	(50)	
文集	599.	(13)	
伝奇	468.	(27)	
閑話	129.	(4)	
雑	616	(31	
計	1807.	(52)	

詩	1129.	(58)	
文	472.	(27)	
伝奇	244.	(6)	
計	1845	(96)	
本草	709.	(122)	
仕子	590.	(21)	
雑書	269.	(8)	
残巻	63.	(7)	
計	1831.	(158)	
法書	646.	(1)	
金石	623.	(24)	
計	1269.	(25)	

総計 12,096 (480) 174枚

(　) 〃冊数不明の部数

国立国会図書館蔵書

❶余が近著山陽を評するや、三田村鳶魚子、公余の筆に、頼山陽を富岳に比べ、其方人の著行の無節操なるを論じ、而も居ながら鳶魚の攻撃を蒙るなどいふて、余を駁するに、コンナ攻撃を苦しい陳腐であるとか、蘭斎と共に書物を焼くべきであるとか、自分も此書物を読んだ丈けは山陽の為に忠義を尽すのであるとか、鳶魚の山陽嫌ひを笑ふのである。

あつ、亦すでに図書寮に収めらるゝものとなる。あるの巻数を知りたき

詐僞取財犯人頼久太郎

（「隨筆賴山陽」を讀みて（上））

爲魚

市島春城先生から僕に其の新著を讀ませ、且つ何か書けといふ御誂へで、「隨筆賴山陽」を投與された。其の實は僕が賴山陽嫌ひなのを善く知つてござるので、何かお笑草を拵へさせて、無聊な日の長い晝間の睡氣の伽にする、頗る惡い御量見のやうにも存ぜられる。忝くも先輩から美しい新刊書を頂戴して、變なことを申上げるとは、以ての外の儀ではござらうけれども、さうした男であることが却つて僕の御愛嬌なのを十分知つて居られもすれば、お人の宜しくない此の先輩は僕が若し顏膨しでもしたなら、偖こそと嬉ばれるのであらうと、見掛けに寄らぬ智惠を出し掛ける。やつぱり有り合せの面で頂戴物を讀み、無理にも恭悅がつて書き立てゝ先生の注文外れを往つて見たい氣になる。

だが三年や五年、久太を嫌ふのではない。慥に三四十年來の禁物であつて、幼時漢文といふものを初めて讀み習ふ時に日本外史が句讀の師から擇ばれてから、月に日に厭になつて來たので、今日でも久太の署名のあるものを机の上へ載せることをしない程にして居る。從つて久太の事は殆ど何も知らない、今度春城先生の惡戲の爲めに、氣の毒にも僕は一日有半頂戴物を臥讀せざるを得なかつた。其の臥讀の爲めに半生の禁物であつた久太のことを大分知つた。

春城先生は云ふ迄もない苦勞人、それも幅の廣い世間の苦勞をした先輩で、ドラ息子の異見を引受ける叔父さんの役廻りが本役らしい。久太にしても活かさず殺さず、七擒七縱的に叙述されて居る。暗い方の强點を揚げ、明い方の弱點を抑へ、差引いてエライ男さといふ處に持つて往く。讀んで居る中に前來の僕の知つて居た事の幾十倍の割增しで、大に嫌ふべき箇條が書いてある。僕のはモツと箇條が尠かつた。先生は久太の愛すべき部分と憎むべき部分とを極めて多量に知りそれを錯綜しながら叔父さん式の諒解を示される。僕には叔父さん式になれない。僕は頑固親仁の格で兎角久太を勘當して了ひたいのだ。「隨筆賴山陽」は既に此の頑固親仁の怒るべき材料を云ひ盡したとよりも、其の上にも云ひ增してあるのだから、今更小言も種子切れの狀況にある。のみならず粹を通して此の新著に對しては三四十年來の憎惡も餘程手持無沙汰の氣味だ。何故なれば久太を窮迫すると、宛い人間といふものはないよ、大抵に取舍したが好いと云ふ態度が近時流行の妥協とやらでなく、世間に就いての諒解から生れて居るからであらう。即ち御尤に聞かなければならないやうに出來て居る。

久太が多數な處女を玩弄した中に、江島細香を娶らなかつた際の放言、色には好いが女房にはイヤだといつたといふのは細香のことではなくて、玉蘊女史のことではなかつたかと思ふ。是も「山陽と細香」と「玉蘊女史」の二項を讀んで、從來聞いて居た久太の艶聞に謬があり、はせぬかと疑ひをする。だが如何に輕佻な女にもせよ、輕佻な女なるが故に玩弄しても好いとは云へまい。僕は人間を玩弄物にすることを誰にも許さぬ。女房に持てぬ者なら拘り合ひを附けないが好い。若し拘り合ひを附けたら背負ひ込むべき筈だ。

久太は儒者であるか否か。儒者なら彝倫道德を講ずる人間だ。此の頃も儒者を製造させるために、支那へ留學させる計劃が大東文化何とやらに有ると聞いたが、四書五經の知識を持つ者が儒者ではあるまい。儒者は知識だけのものではなく、其の知識を體現する者でなければならぬ。それには支那へ往かすとも、戶外一步を移さすとも、儒者になれる者は成れる。成れない者は世界中を掛け廻つても成れぬ。

先師島田南村先生が、上州から出て來た靑い坊主の東京留學の相談に答へて、お前は淨土宗だといふが、東京の學校に這入つて三年五年と費す隙を、常念佛で過して見なさい、其の功德の廣大なのが幾分か知れよう。結構な物を持つて居ながら、それを放棄して有りもせぬ資金を造つて、切り賣り學問などを覺えて何にすると云はれたのを思ひ出す。知識の分際に限局させるものならば、儒者も坊主も學者も物識りも同じである。

辜鴻銘老人の名分論も感心して聽聞されて居るが、然らば辜は何故に共和政府の辭令を受けて大學教授になつたか。昔來朝した朱舜水とは話が違ふ。議論は立派でも其の人がホコトンでは往けない。理論と實際と餘り違ひ過ぎる。其の辨別もないやうでは僕の儒者論も徒勞であらう。斯うした時世に久太が儒者で有るか無いか抔といふ詮議も。漢字と共に鼻摘みにされるだらう。

久太が儒者でなくても宜しい。儒者が何だと、今日の人は云ふだらう。山崎闇齋、淺見絅齋、伊藤仁齋、同東涯、中江藤樹、熊澤蕃山等の諸先生のみならず、人に先後あり、學に同異あるにも拘らず、時世、其の器局、其の位置に依つて差隔は脫れないにせよ、其の知識だけを體現して居らるゝことは同樣である。第一等の儒流でなくても、器局にこそ相違はあれ、其の志は決して甲乙がない。故に儒門儒家の行實を誦する時、漫に其の風采が想望される。卽ち第二三等の儒流でも經義のまゝに言行せんとする樣子が看取されよう。儒門儒家には久太の如き私奔野合の徒はない。苟も志を立てゝ就學するほどの者は、若いからとても饑餓の仕丁たり、性慾の傀儡たるが如き筈がない。手近な四書五經を御覽なさい、それは志學の童年に素讀させられる本だ。句讀を受けるのも隨分困難だが先づ其困難に打勝つて往く。子供ながら志を立てゝ

就學する。今は昔獨案内が行はれて洋學が脆弱になつた例を此の困難に打勝つた例に對照したい。志が堅固だから學問が出來たのだ。因位の修行も斯うであつたが、果位に於ての聖賢たることも、當初からの抱負なのだ。江戸時代にもオマン マ成佛、月給往生のために學問する奴も無いではないが、儒者たらんとする者は初發心が違ふ。學問するからは第一等の所願を以て奮勵しさうなもの。まして久太の如きは讀書の家に生れ居ながら、儒者にならうとしない。其處に彼の柄行の惡いのを見せて居るではないか。しかし儒者にならうと勉めないからとても、僕が彼を憎惡する心持ちになれるものでもない。若い時分などエラがるのは誰もの常である。久太にしても及ばぬ迄も第一等の所願を持たうとすべき筈のものがそれを持たなかつたのは彼の人物の低等下劣なのを證する。けれども彼が低等人であつて、第一等の所願を立てなかつたのならば人間相應の往き方で却つて自知の明があつたのだ。とも云へませう。

久太は性慾の傀儡であつて細香玉蘊のみならず、幾多の處女を瀆し、果ては寄食して居る家の下女をさへ討伐ししたことが二度もある、それ以上に人妻を犯したとも云はれた。間男は評判だけかも知れないが、評判だけにしても相應な人間ならば起りさうもない、氣の毒千萬な人柄だつたと見える。

久太は廢嫡されたので親仁の跡を繼いで廣島藩の御儒者になれなかつた。なれなかつたのではない、されなかつたのである。それを我儘が出來ないから祿仕しないと、洒落たことを云つて居る、久太は何時になつても多數な處女膜打拂を後悔しないと見えて、洒落たことをいつて居るが、彼の廢嫡理由から見て淺野家の祿を受けられなかつたことは義理にも洒落た言は云へない筈だ。珍しいものではないかも知れないが、菅茶山から伊澤蘭軒へ宛てた手紙を御披露しよう。

追啓　御寛後御火中

先達而兩度久太郎事申上候へども、尋常の事に而御座候、勿論人之惡事を一々に申たて候も心にあらす候故、ざつとあら〳〵笑話とも奉存候也、然るに此比承候へば周兵衛出府いたし候次に取なし候而、君側の人へも申上、京よりつれ歸りて、又神邊塾へおし入れ候隱謀有之候よし、一通り御きゝ可被下候。

一前年久太郎、藝州公府之臀手形をいたし候事あらはれ、入牢嚴科とも可有候處、狂氣と申たて檻へ入れ、あたまをそりて坊主にし、やう〳〵事をまぎらし候由、そのうち狂氣快見え候故、檻を出し申度願にて、また髮をたて候よし一去々年か士家の妻か後家かを姦通いたし、其繪すがたをかけ物にいたし、自身、詩にて賛をし、こゝかしこもちあるき候よし、其事大評判、また官裁にもかゝるべき所を、晋帥のまれ、季布廣柳の車の心にて引うけ候（然るを來ると晋帥なおとし入れんと計り候三月もたゝず

一備前某と云豪家へ金をかりに遣し、これも臀狀に而取出し候よし、この類は處々に而多候事に御座候、右之類の事多候よし、私はよくいひきかせ、行々志改り候はゞ塾後住とも可仕心に御座候處、中々顏色氣持急に直り候樣にも見え不申、彼が望にまかせ上京いたさせ候、かゝることは備後にては、かくしてやり候心、誰にも不申候、故、周兵衛なども知り不申候、もし君側之人へも申候樣之ことも御座候はゞ宜奉願候、尤周兵衛が右之企も人の推量に候へば、さも無之事もあるべし、左候へば穩便も宜候、私も三四十年來の志に而、叢爾小書院をたて、御前を拜勞御手跡の額をも願うけ、永久にも傳度候處、かのごとき輩に附し候は心に非ず候、御推察可被下候、都合を申せば藝侯は學問ずき也、彌太郎には一子也、藝州に而、何にも不被用、藝に居られぬといふ處にて見候へば判然たること候へ共、私もあのほどにあらふとは夢にも不存候ひき、かへす〳〵も周兵衛もし此事打いたさず候はゞ大事に候、それなりに御祕し可被下候。

勿論事大になり言てかへらぬこと、我兄御身の越度となりそふに候はゞ御用心可被下候、か樣に申上候こと、備後へはいよ〳〵しれぬがよく候。

久太が京都へ出たのは卅四歳の時である。去年の姦通事件といふのは文化五六年のことで、卅一二歳であつたらしい。藝州藩の公文書僞造をしたのは寛政の末で、廿二三歳でもあつたらう。平山平原に寄食して十五兩持逃げした時は廿歳だつたが、此の手紙に私文書僞造は澤山あると書いてある。此等の詐欺は何の爲めでもない、放蕩資金に入用だつたのである特に藝藩の臀手形を拵へた爲めに廢嫡になつたのだ。斯うした始末を顧みて洒落たことが云へる男だから、久太の無恥無慚なことは云ふ迄もない。儒者で有るの無いの處ではなく、恥を知らない者は人間でない。さうして此の間に日本外史の筆を執つてゐたのだ。

女學生が妾になつて、旦那の給費で學問をする。最近には慶應大學生が色々の婦女から金錢を捲き上げて學問をして居た。學問が何だ知識が甚麼に難有のか、自身を殘暴して了つて學問が何になる。只だ或る學問の持主になつて何とするのだ。立派な人間になるために學問する筈なのを、學問のために自身を打毀して了つては、立派な學問にもせよ、それを誰が持主になるのか。將たオマンマ成佛、月給往生にしても、世間が相手になればこそだ。相手になる者のない程な人間になつて了つて、偕持ち合せた學問が何となるのだらう。久太は僥倖にも世間を瞞着して、大家先生に成り濟したのだが、彼の如きを許すならば、天下に名教を維持し得らるべくもない。

久太は才子である。輕口が上手で洒落も巧妙だ。彼の書後題跋は如何にも面白い。彼を嫌ふの甚しい僕でも渠だけは讀んで興じる。しかし曾て其の書後題跋を拋出したことがある。僕は此の事について二十餘年前に藁下した舊文を爰に揭出したい。

山陽は文章家よりは詩を許され、詩人よりは文章を許されて、大家たるを得たり。一部の日本外史、腐史の筆を背負ひて立ちたれども、全套孰れも妙なるにはあらず。人に知られる處々は、何とはなく芝居めきたり。往にし岡十郎の活歷とやらいふ事も、多分は此書に香觸れての沙汰ならずとせんや。宜なり、重席諫言の一場を、新富座に開演せることや。未定稿とは聞けれど、日本政記の拙なる、殆んど

外史と同一手筆なりとは思はれぬまでなり、大好物の東坡を襲踏せむとしたる通議も、議論に於て文章に於て氣の毒ならずとせず。何人も拒み難きは書後題跋なり。語句の簡潔なる、着想の敏給なる、瀟洒たる體裁と相俟ちて、群を抜き、倫を絶ちたるものといふべし。

蘇詩雖戲、猶士大夫之善謔也、如明清二袁、乃幇間牽頭耳

といひて、袁中郎袁太史をおとしめ、善謔妙談にも士と、幇間との分際あるを云ひし彼は、八經考文をいひては、但如八經考文、考缺於彼、而存於我者、如補鯨息劍、則是女媧五色石、出於扶桑也として、他の苦修を白眼に付し、一旦の渾話に做したる亡情に庶幾きのみか、謔浪笑傲も物により事によるを遺却したる惡作なり。更に三禮を辨じて、

如三后九嬪二十七世婦八十一御妻、輪番直夜、是以古聖王爲一牡百牝之膃肭臍也

といへる、輕薄なる口吻ならずや。

其所謂士太夫の善謔を以て見るべきものならむ乎、比譬の巧妙は然り、滑稽突梯、之に至りて窮まれり。古聖王既に膃肭臍たるが故に、後學の山陽は駱駝たるを諒すべしと云はゞ、亦是幇間牽頭の流亞なり。

久太は、何の奉ずる所あつて經書を滑稽視し、聖賢を洒落飛ばすのか、不敬不遜も甚しい。彼は釋氏に仰信するのでもなく、老莊に依倚するのでもない。彼は何に立脚するのか。釋志を奉じて儒を闢くとならば、又た議論も別なことだ。儒行儒業のない久太と雖も、儒家を離れたでもない。日本外史で勤王の忘氣を資けたといふ。其の勤王の根本は何から出たらう。名分論などは何の發頭があるのか。名教を崇奉するならば、其の名教は何に依つて立てたか。それは遠く國土を遠へたにもせよ、渠の古聖王に由來するならば落語者流の口氣で翻弄されべきものだらうか。久太が名教を崇奉しそれからの勤王論を懷抱するならば、十二分の尊敬を古聖王に持つ筈だ馬鹿にするやうな口氣の出る譯がない。果して然らば儒にあらず、釋にあらざる久太の尊王論は恐らく迷ひ子の尊王論であらう。

日本外史に就いては委細に春城先生が書いて居られる。史實の考據も怪しく、史料も貧弱極つたもので、其の方は久太相應な好い加減のものであつたこと、及び其の文章に對する諸家の評論は盡してある。渠以上に云つても今日の世間では請取れまい。誰やら、和習があつても當然だ、元來日本人が書いたのだから論じるまでもないと云つたが、和習といふのは誤譯と文法の過謬とをいふのである。それは漢文に書く以上は許さるべきものでない。けれども和習といふことさへ分らない者に云つて聞かせても何にもならぬ。多少其の邊の素養のある者を待つて談すべき事柄だと思ふ。

さうした日本外史が倒幕運動に騷いだ連中に愛せられた。恰も其の連中は學問の人ではない、田舍武士の不滑稽な只だ肩肘張つたゞけの儕輩なのだから、一も二もなく煽りを喰つたのだ。維新の志士と稱する人々の詩を見ると、猫の嚙み合ふ聲に似た調子の、しかも御粗末な不作法のものだ。或は五字七字の一句さへ田舍蕎麥のやうに切れ〳〵である。まして一首として看ることは出來ない。彼等の作詩から考へれば、會席料理を賞味する舌を持つて居ないのが知れる。從つて繩

腰纏を潜つて片足持上げて喰ふ彌太一を喜ぶ譯が知れよう。

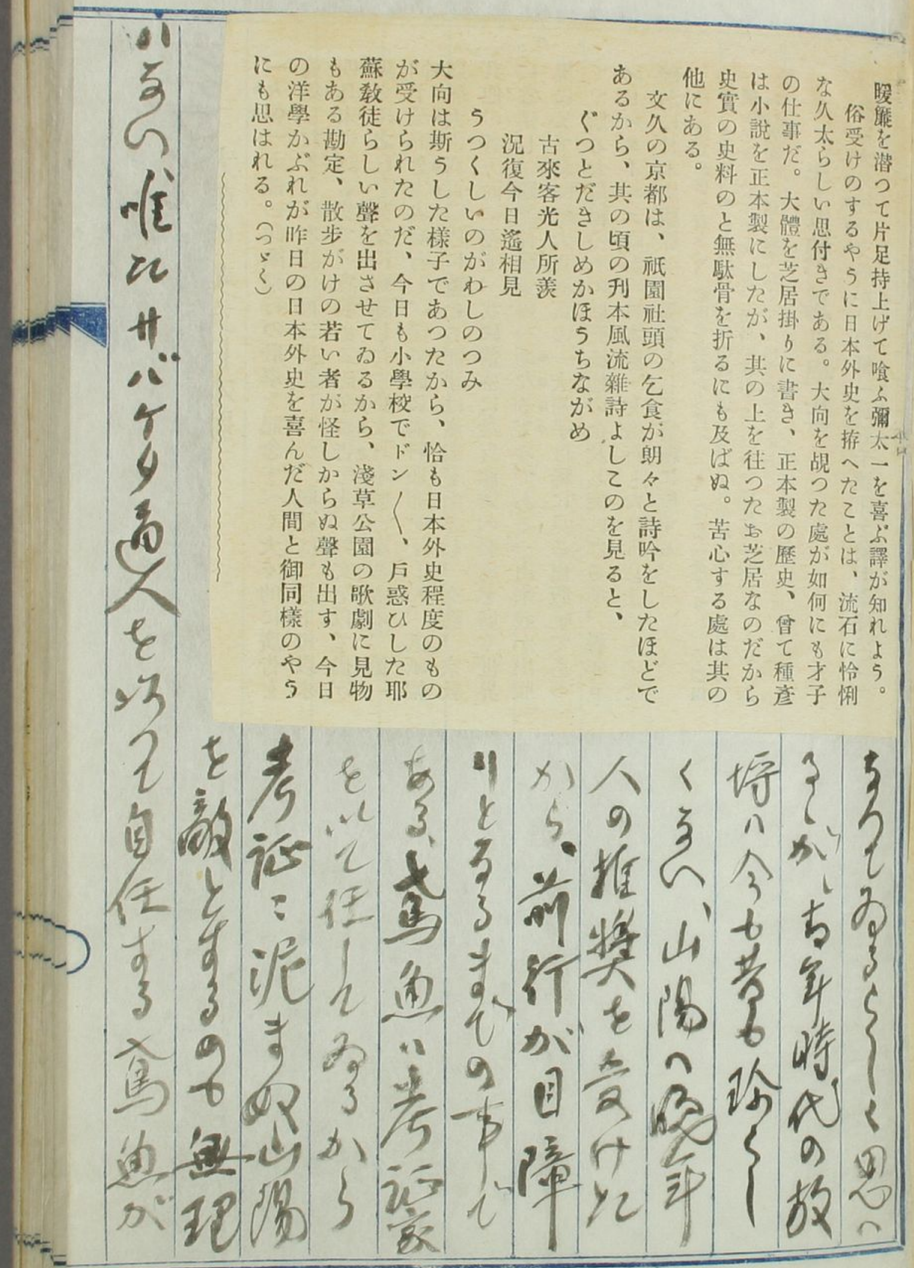
俗受けのするやうに日本外史を捧へたことは、流石に恰悧な久太らしい思付きである。大向を覘つた處が如何にも才子の仕事だ。大體を芝居掛りに書き、正本製の歷史、曾て種彦は小說を正本製にしたが、其の上を往つたお芝居なのだから史實の史料のと無駄骨を折るにも及ばぬ。苦心する處は其の他にある。

文久の京都は、祇園社頭の乞食が朗々と詩吟をしたほどであるから、其の頃の刊本風流雜詩よしこのを見ると、

ぐつとだきしめかほうちながめ
古來客光人所羨
況復今日遙相見

うつくしいのがわしのつま

大向は斯うした樣子であつたから、恰も日本外史程度のものが受けられたのだ、今日も小學校でドン〳〵、戶惑ひした耶蘇教徒らしい聲を出させてゐるから、淺草公園の歌劇に見物もある勘定、散歩がけの若い者が怪しからぬ聲も出す、今日の洋學かぶれが昨日の日本外史を喜んだ人間と御同樣のやうにも思はれる。（つゞく）



[illegible]ヵ〻ら〻く儒者の本領を論ずるなどハ寧ろ之なのし
感ずるも、彼の論評ハ今時の毒嫌ひ(元ハら)幕末の漢学
者の論評をそのまゝかぶれるを思ふをもて、荒し登載されん
旅行日本人を遍しそれをせこ掲載の年月
を載のべ、恐らく後人ハ思ハざる事と見べし
　　十月十五日記

○ほゝ毎日遊歩無聊を慰し徒ら書筆
を弄ぶ如を嘲ふ、昨日八拇を固しなどの二枚
地ともに到来、一紙ハ高山於内を書し一紙
ハお夏狂乱を書す、共に過ぎ中の人物
もお夏狂乱の状況強ち誇張ならず、敬祖に
心中の文をおもす、特に満児の珠什となすを
得ざし、美哉此の二心ハ児三絵の首を入るる先づ
終のるるの如き時代ハ也、過去の書ものの多き
あるも生時代ハ之あるものの多き
揮毫の不得ざるハ却て之あるのごとく、此の二高の筆
如の敢て異とするを要せず、或ハ此を
を乞を断て、或ハ此を人と勝手をなすべし、比
の賜宴ハ之を以て
○住宅金参百弐拾円を以て
世家相を相談をもて
示しも打捨をするを、家
人とともに此家ニ手を
住ハるるけの心真す法

治山田の為持を好まず、四字の右典あり即下に注して曰く日本古印の字に倣えるものと、
俗古印を心得る普通の篆刀を用いてなく成印なり、此印も此刻する日本式の小刀を用いてなくとも、鈍する所なく味あるべし　五月十四日記
○家老の印は大小程々の箱に入れあり、点検の時何の某に何の書ありや或人と見届かつかず、毎に印を捺すを便とせるものなり、七ツ八名家の私印、又七一印を納めたる便利を感じ久しく其を捜しみたれど思いしき印なし、前大隈参議と京都名○に及びしが、偶し数の者近の程々の仏者を陳列

十二行

七寸許の手箱あるを多くは、九個の抽子を具し、銀かなものの入ドンのこあり鍵のかかる外部とトンニ入れこと、七十金を投じ購い得たるが無聊の折手之と達しおきを幸ひ、多くの印を注ぎ名家の私印のみを抽子の設計とする事漸く八合目に早く満ちんとす、重なる印を納めなり、地祇の印小章を用ひ印ある故を以て動もすれば他人の私印と盲目するものは、その他人の意義あるを、印と盲目する故を以て、或人みとられ汚すこ

ときこと無きを保せず、相南三汎の事に鄭寧
を保存するの要ある等、此一部を得る為め一部
数の整理を得とう、左に書こぶべし　青丹十八の徒

名家私印大略四十五家　一家十顆乃至数
十顆と及ぶ、其の大印あり、大印と数の
大きさの比印前に入る能はず別に巻す
但し二三顆を比印前に収めまたまたる
目録左のごし

狩谷棭斎　二顆　　中村正直　木警渓　一顆
山中信天翁　一顆　自刻　　長三洲　三顆　　山本梅逸　一顆
木戸孝允　二顆　　尾崎三治　一顆　　大倉和親　五顆
　　河鰭実英　一顆　　巻菱湖　一顆
重野安繹

巻菱湖　二顆　　高橋泥舟　二顆
永井尚志　　　　坂口五峯　二顆
池田筑後守　　　古川鉄眼　　
辻元荘庵　一顆　　井羽伯山　一顆
高久靄厓　一顆　自刻　　巻田英江
林谷大　二顆　　吉雪操　
安田善　二顆　　田邨太一　一顆
西郊西浦　　　　川山大迂　一顆
細井九皐　　　　仇人鷺洲　二顆
清人（二家）　　楊南鎔　一顆
語茂之印　銅印三　　同上　大石印
　　秋月古香　二

○友人和田芳吉余と手を携へて山陽の下筑後川を下り高良の廟と醒窓の岡しばらく懐古の情を叙し又もとの舟に帰る日くれ方の山色水光を賞し一揮を煩すものなきを以て余其の深意を解せんと筆を執て一気に成る蓋し余の意を尽すの所也 和田記

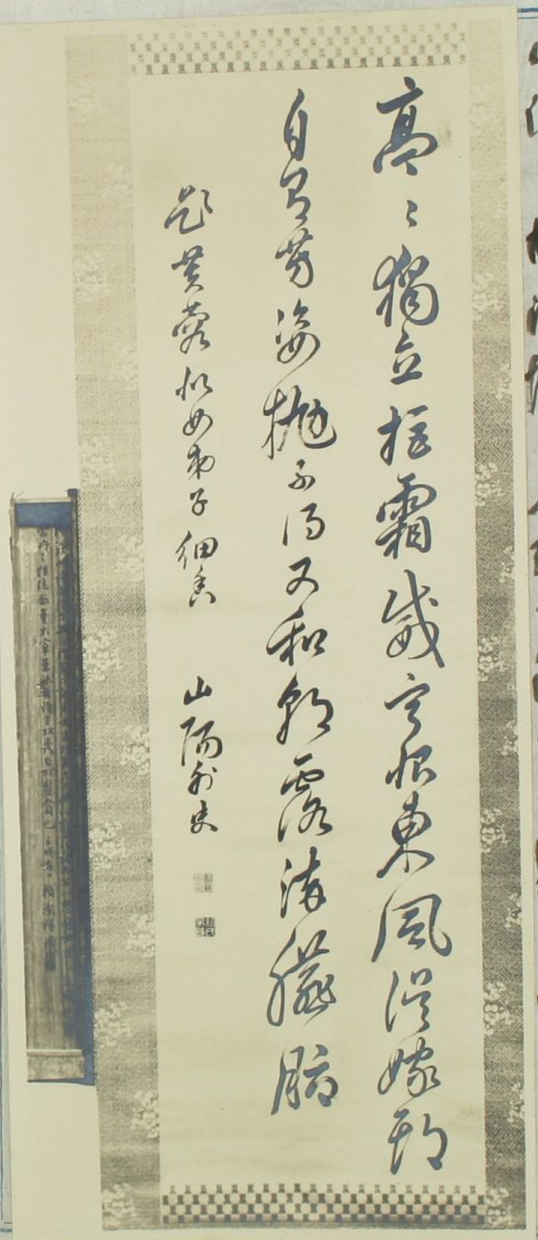
六月廿一日の汎

荒瀬僦舟下筑後河懐古帳然成詠

山勢接天起、雄抜似蟠虬、遠望肥州近筑州、長河岸浮、我来便道僦扁舟、波万古愁、想見菊池子、出日落荒煙合、忽惹蒼茫万古愁、想見菊池子、出師此運籌、指揮八千卒、行軍肅不咻、賊兵六萬夾河陣、飛箭如雨暗沙頭、潜師渡河直撞突、勢如鷹隼撃鵂鶹、一戦殊勲已無匹、数世全節有誰儔、千載忠魂帰何処、山光水色鎮悠悠、両岸漸寛灘漸緩、鷗鳧拍拍水如油、兒女不知當日事、菱歌唱起満汀秋

右恒遠醒窓（遠帆樓）作

○追筆山陽の絵画で未だ余り一幅を
高く評する。細香に与えた也は
氏不満のもの今へ他に嫁して
山陽の画幅を獲ひ得べき歟　立斎共一



十二行

山陽翁咏芙蓉詩ヒ真蹟　（紙本中味巾一尺一寸八分　立三尺九寸七分）

山陽翁此詩文化丁丑ノ作蓋比細香女史托芙蓉
賦似耶吟誦ス可キ為可以想見女史ノ高風也書則
當時ノ佳境秀董玄宰筆法者詩書双秀
尤可鑒賞也　戊寅春日　頼潔拝識　口口

右貴著「隨筆頼山陽」第四九頁ニ御参考資料ノ
追ニ読軸物写真ヲ進呈仕度候間乍慮外ノ
御笑面被成下度いざ本懐之至ニ奉存候　敬白

大正拾四年五月貳拾日

山口縣防府町三田尻西本町
合田三郎

春城市島先生
侍史

○突如徳川家康の勅命を以て代々憧れの的たる江戸に移封せられ、殊に関ヶ原の役後は、名実共に天下の権を掌握し、終に徳川三百年の基礎を確立するに至つたことは、人の知る所である。

中一寝以て先祖より剛に勝つ事十倍すること、家康未一回も重過の恥辱を得ず、終に天下の権を得る迄に永訣とする、家康の逝去は我国古今の重大事であつて、幕府の前途に関する、実に国運の消長を決すべきことであるから、自ら重きを置き、終焉を見届けるは当然である。特に徳川家康の逝去、夜間徳川邸を辞去の時、自動車を供され、大礼服の数名の人丈が車を送つたことなど、実に破格の待遇であつて、家康の大正元年の大正天皇の時々長の大臣を遣はされたことも、家康の余光であつて、家康を祀つた日光東照宮の祭典に勅使を発遣し、又数々施行を許されたことも、家康の余光とは言ひながら、九州行の時は、幕府の特命を以て家康代参し、或は勅命を以て家康の法統を継ぐ者、将軍宣下の時は、勅使を以て将軍宣下を伝達することなどは、実に破格の待遇である。

支訳を聴きし日断腸の思あり、故なきにあらず
候、茅野雅子九州在住の閨秀、五十四字
の短命の中に彼を葬れるものあり
五月廿二日記

○三宅雪嶺の個人雑誌「我観」は同玄録が掲げて
ある、三宅と全くの同名であるから、三宅の同玄ぬきの
の同名ぬきである、中々余のうそつけること云々もあるが、三
宅一流の筆法であるから、うそつけることもあり又
方の迷ひもあることもあるが、大体的流九鉢の同
期生とうくの人おを出しと結論をつけたのは誤
つて居ます

自分の同窓（再）

同じ學校でも年に依つて出來不出來があり、或る年に善い學生が多く、或る年に其れが少く、或る年の卒業生に人物が多く、或る年に其れが少いと言はれる。如何にしてさうなるか、種々の事情があつて、之を詳かにするに難い。必ず毎年平均する者でないといふ事もあらう、新たな需要供給で人の動きが違ふといふ事もあらう、無能と見えたのが時勢の變化で有能となる事もあらう、何にしても年に依つて違ふが、新たに出來上がつた學校へ眞先に入學する者は、善いか惡いか、幾らか尋常と違つた所があり、普通より優等生が居り劣等生が居る。第一期生に何程か替りものが出るのは創立當初に入學を思ひ立つのが奮發か、輕率か、僅かながら他人の足跡を蹈まぬといふ氣分あるにも因らう。

帝國大學は南校、開成學校、東京大學を經て徐々に變遷し、何時第一期生が出たかを言ひ得ないが、法理文三學部で卒業式を擧けたのは、明治十年、理學部の三人であつて、之と同級以上は卒業せずに洋行し、洋行が卒業とも見做すことが出來、其中で力を伸したのが幾人もある。希望を囑せられて發達しなかつたのもあるけれど、希望を囑せられずに發達したのもあり、兎も角も大學出身者で爵位の最も高い小村侯を始め、種々の方面に重きを成したのが居る。洋行を命ぜられた者は、貢進生があり、他より來たのがあり、種類が雜駁でも、孰れも新敎育を受けようと心掛けた所がある。

其後に種々の人物が輩出し、何年が必ず優等と言ひ難いが、明治九年、開成學校に入學した級は、割合に各方面へ人を出だして居る。是れ新學制で全國に七個英語學校を設け、他日大學を建設するの素地を作らうとし、後に當局者の意見が一變し、之を廢して學生を開成學校に集めたのであつて、英語學校の命脈は短か

つたが、創立して新空氣を敎育界に注ぐかに見え、之に入學した者は性分よりか、家風よりか、多少當時の世間竝と違ふ所があつたらう。七校とは東京、大阪、名古屋、仙臺、新潟、廣島、長崎であり、それを寄せ集めたので二つの特色がある。一には前よりも多く入學させ、各科に配當するを得、二には全國の各地より人を募り、或る一地方に偏しなかつた。今から觀れば何でも無い事ながら、汽車といへば東京橫濱間及び京都神戸間に限つた時、全國に於ける同程度の學校より人を集め得たのは、幾らか前の貢進生に似た所がある。選拔といふ程の事でなけれど、後に各高等中學又は各高等學校より人を得たと同關係になつて居る。

入學生は總數七十九名だつたと思ふが、それを三組に分けて豫科に入れ、後に大學豫備門と稱した。大部分は明治十五年大學を卒業し、殘つた分は十六、十七、十八年に卒業した。大臣になつたのは文學部の高田氏一人のみで、爵を得たのは一人もなけれど、大臣になるべき可能性あつた者は幾人もあり、存命したならば隨分政治界に幅を利かして居らう。明治十五年、法學部卒業は八人であつて、現に生存するは土方砂川の二氏だけとは、健康の點で落伍したのが多い。歿した中で三崎龜之助氏は在學中から政治家肌を顯はし、帝政黨に屬し、機關新聞明治日報を經營し、九鬼駐米公使に書記官として赴任し、歸つて衆議院に入り、自由黨に加はり、黨内に重きを成した。隈板内閣に縣治局長となり、貴族院議員となり、一方に正金銀行副頭取ともなり、金に困らず、早晩入閣すべき順序であつた。岡山兼吉氏は辯護士業に從事しつゝ、衆議院に入り、三崎と派を異にして之と匹敵するの位置を占めた。中島議長が議事に慣れなくて困まるとの評ある時、「議事に慣れる慣れぬの問題でない　慣れなくても常識で出來るのに、それが出來ぬので困まる」と言つた。これも何時か入閣したらう。

山田喜之助氏と渡邊安積氏と、竝んで樞小書記官に任命されたのは、當時異數とした。其頃大學卒業生が書記官になるは容易でなかつた。渡邊氏は山口縣人でもあり、最も論文に長じ、主權論で各新聞と渡り合ひ、當るを幸に薙ぎ倒した。若し肺病で早く斃れなかつた

ならば、長閥有數の働き手となつたらう。それで徒らに閥を恃み、上に取入る方でなく、純粋な處があり、謂ゆる少壯有爲の人物に相違なかつた。山田氏が初めほどに働けず、失意に終つたのは、才を恃み過ぎたか、酒精に中毒したか、何にしても人の豫想を裏切つた。

法相山田顯義伯も面白い男として用るたが、酒の相手で面白がられたのが後に禍したかも知れぬ。砂川雄俊氏は政治界で優に此等と驅逐し得ながら、法律事業及び其他に興味を增し、大阪で辯護士の長老となり、關西大學の世話したりして居る。關直彥氏は十六年卒業でも、此等と同期生であつて、在學中から東京日々新聞に關係し、帝政黨に於て三崎氏と竝んで居つた。香阪駒太郎氏は十七年卒業でも、やはり同期生であり、友人と共に遊廓に遊ぶや、他人が變名するのに、彼れ一人麗々と姓名を書くを常とし、何處か膽力あるらしく、何事かを成さうと見待せられたが、それ程の事なく、永らく檢事を勤めた後、小林源藏氏と選擧を爭つて敗れ、程なく歿した。荒川義太郎氏も十七年卒業となつたが、在學中に望みなしと見られたに似ず、內務畠で羽振りがよく、知事として年功があり、貴族院で相當の位置を占めて居る。藤田四郎氏は更に一年後れて十八年卒業となつたが、官は農商務次官に至り、實業界に關係し、貴族院議員となつた。荒川氏は白根男の姻戚、藤田氏は井上侯の婿、共に長州系に屬する。

法學部に大臣と爲るべくして爲らなんだのがあるが大臣になつたのは文學部の高田早苗氏である。文學部と稱しても、政治理財といふのであり、後ならば法學部となつて居る。それでも文學部は文學部と稱するだけ、何處か文學に緣故があり、法學部よりも法文學部といふに近からう。高田氏も初め政治向きであつたか、文藝向きであつたか疑はしく、後にも尙ほ疑がある。政治に奔走したもの、、教育事業を主にし、それよりも文藝趣味を以て生れたものでないか。大臣になつたのは政治と教育とに跨つたのに由來し、それが適任であつたかは判らぬ。同學の山田一郎氏は賴山陽と同鄕で、之に私淑する所が多かつた。眞實の山陽よりも傳說の山陽にあやかつた。在學中、山田喜之助氏と相撲で、何かにつけて兩山田といふ名前で廻狀を廻はし、

性質は互に違ひながら、酒精中毒に罹つた所が似て居る。天野爲之氏は在學中から高田氏と共にし、共に早稻田に關係がつき、共に學校を經營し、共に衆議院に打て出で、影となり、日向となりながら、後に全く分離して顏を合さず、それで共に早稻田から離れぬ所、奇なる運命とする。市島謙吉氏は卒業しなかつたが、此等と切つても切れぬ中であり、在學中から一種の調査を好み、手寫した所が多く、後に愈〻其の趣味を增したと見える。早稻田に寄附金運動があれば必ず其間に隱れた功がある。高田氏の日向となつたことなければ、其の影となつて附添つてゐる。坪內雄藏氏は十六年に卒業したが、其頃學校でも、世間でも、文藝に重きを置かず、氏も强ち文藝を以て立たうとせず、高田氏が文藝に關係する程度に於て坪內氏が政治教育等に關係した。それが何とあるにしても、氏が早稻田に出掛けたので、早稻田に文藝が植ゑ付けられた。若し自然に芽が出るならば、氏の爲めに幾年か早められた所がある。大隈侯が學校を設立したのは、權力扶植の意もあつたらうが、其の爲めに大學生を招き、色々と思はぬ拾ひ物をした。有賀長雄氏は哲學が政治經濟より分れた明治十五年に卒業したもの、、後に元老院に入り、行政に注意し、赤十字社關係にて國際法に注意し、到る處で調法がられた。袁世凱氏の顧問となり、外臣と稱して物議を惹き起したのは、調法がられ過ぎた爲めであらう。氏は結婚で種々の逸話があり、モルモン宗類似の所あるが、最初の妻は同期生丹乙馬氏の妹で、丹氏は同級中最も英語に長じ、中途で退學した。

法文學部は在學中の優劣が必ずしも後の優劣とならず、顚倒したのがあり、法學の藤田氏は三年後れて卒業し、それで後の位置が惡るいと言はれぬ。文學の坪內氏も在學中の優劣の後に影響ないことを證明した。學科の性質として已むを得ぬ所があらう。理學部では在學中の優劣が後の優劣を決定して居り、物理學で、田中正平氏、藤澤利喜太郎氏、田中館愛橘氏、生物學で石川千代松氏、地質學で橫山又次郎氏、採鑛冶金學で野呂景義氏は、田中氏を除いて重要なる大學教授となつた。田中氏も教授となるべきであつて、種々の事情で方向が違つた。獨逸留學中、音樂の趣味よりして

樂器の改造を企て、カイゼルに知られ、カイゼルが伊藤公に田中の事を言ひ出だし、伊藤が其の何人なるを知らなんだとして日本で噂に上つた。かういふ事は世間に有り勝ちで、嘗て米國大統領グラントが日本に來た時、米人が幾人も大學で教鞭を執つて居つても、誰が何やら知らなかつたらしい。カイゼルは何でも知りたく、何でも知るを得意とし、種々の方面に注意を拂ひ、田中をも知つたのであつて、それを伊藤が知らなかつたのは不注意と言へば不注意でも、別段に怪むべき程のことがない。其類の事が田中氏に幸となつたか、不幸となつたかゞ判らぬ。後に種々研究しても、世間で認められて居るのは音譜であり、今一層適材を適所に發揮し得ないものかと惜まれぬでない。藤澤氏が教授の停年を力說し、田中館氏が自ら辭職を斷行したのは、孰れも後顧の憂なきにも因れど、位置に戀々しない所は遒がとする。藤澤氏の英語、田中館氏の羅馬字は、道樂でも唯だの道樂でない。

理學部は比較的教授が職務に熱心であり、生涯を委ねるの跡あると同時、場所が狹く、同等の人が竝び立つに難たい。菊池部長の下に矢田部教頭が放逐せられ、北尾教授が農學部へ移されたのは、多少の疑を免れなかつた。石川氏が理學部でなく、農學部に生物學を受持つたのも、さういふ所がある。理學部に居つたならば、成績も幾らか異つたらうと思はれる。理學部教授と違ひ、停年に反對したのも妙とする。單に反對したのでなく、後任者其人を得ないと言ふにも因り、又た其の爲めにゴールシュミットを聘することになつたが、同じ理學部での教授でも色々になる。野呂氏は自分が愛知英語學校で一緒になり、共に開成學校に入學したが、年長でもあり、學力もあり、後に採鑛冶金で第一位に推され、水道の鐵管問題に嫌疑を受け、無罪になつても日蔭者となつた。病氣もあつたが、後に元氣がなく、昨年歿した。採鑛冶金に適したか、法學部に入れば同縣の加藤子と孰れといふ事にならなんだらうかさうならずとも、能力が割合に伸びたかも知れぬ。同學の原田佩治氏は永らく三菱の鑛山部長を勤め、裕かに隱退して居る。明治九年、開成學校に入學した者は、有望なので早く病死したのがあり、種々の方面で力を

○昨日美術学校陳列さる此大東美術振興会の六朝唐宋の書画陳列を一覧す巻首は概ね幼稚なる列品ばかりにて目瞭しきことがあつたが、保しく実物を見ると、元曾の筆を見ると初めてあるの如くにて菊池提督が特り此の巻丸卷物の如くにて北條氏時代のものである、日東渡の裏表装時代を端方の跋尾とを得たるは、真に過当の幸福である、李北海の清和碑の味掬

六朝唐宋書畫名蹟展覽會目錄

後漢	永壽二年瓶子書	（中村不折氏藏）
曹魏	譬諭經	（仝　氏藏）
北凉	佛說菩薩藏經	（仝　氏藏）
晉	王羲之孔侍中帖	（岡田正之氏藏）
晉	王献之地黃湯帖	（中村不折氏藏）
後晉	燉煌石室所出觀音圖軸	（山本悌二郎氏藏）
梁	蕭偉摩訶般若波羅密經	（中村不折氏藏）
北魏	三尊佛律藏初分卷口繪	（仝　氏藏）
西魏	大涅槃經義卷	（山本悌二郎氏藏）
隋	僧伽吒經	（中村不折氏藏）
隋	大智度論	（山本悌二郎氏藏）
唐	法華玄贊第四卷	（中村不折氏藏）
唐	法華玄贊第七卷	（仝　氏藏）
唐	妙法蓮華經第五卷	（山本悌二郎氏藏）
唐	景教經卷	（大正一切經刊行會藏）
唐	燉煌石室所出文選	（山本悌二郎氏藏）
南唐	董源雲巒松風圖軸	（仝　氏藏）
宋	李成喬松平遠圖軸	（仝　氏藏）
宋	蔡襄謝賜御書詩卷	（中村不折氏藏）
宋	蘇軾寒食詩帖	（菊地長四郎氏藏）
宋	黃庭堅書墓誌稿	（阿部房次郎氏藏）
宋	王詵柳溪漁浦圖軸	（滑川　達氏藏）
宋	李公麟瀟湘臥游圖卷	（菊地長四郎氏藏）
宋	米芾樂兒帖	（山本悌二郎氏藏）
宋	刻絲花鳥圖軸	（仝　氏藏）
宋	李唐山水圖卷	（仝　氏藏）
宋	高宗勅書卷	（仝　氏藏）

宋、高宗書李長吉詩巻
宋　張栻眞書巻
宋　胡舜臣蔡京書畫合璧巻
宋　龔開駿骨圖巻
宋　素然明妃出塞圖巻

以上

すべきことがある。阿部房次郎の黄山谷　山本悌次郎の米芾、共に東坡に於ける多くの逸品である。黄山谷の書に通ずる風格気韻を具へ、山本の宋高宗の跋も恐らく北人か、高宗の王羲之ハ亦のものである。中村の王献之も

（全　氏藏）
（全　氏藏）
（阿部房次郎氏藏）
（全　氏藏）
（全　氏藏）

十二行

六張り鉤勒本ならん、義之も鉤勒されたることを覚ゆ、経巻数百、政拓あるも、恐らくは北苔のごとき今ハ割合に世に多くなき六朝の色と筆力を具ふるもの、但し燉煌出土巻子本文選断簡とすべし、画幅の高く南唐の董源の深の幅宋の李成の幅流石に堂々たるの観あり、兎に角一重に北苔の数の得なるかなと云ふ一しほ

十月廿四日記

○昨夜ハ図書館協会の会長として和田垣謙三氏と共に徳川家の邸に到り九時より十一時に到る間柏前に通夜をつとめ十二時家にかへる、故侯の法名ハ樹徳院殿四郎城高の卿兵士とあり、墓城

八角岡山と云ふ紀初の城名も来る度の旅ごとの
まく吟ぜられる高節なるを思ひ
のあることゝ、其の八枝の高きことを意味する
外に此の珠あるを多くの伴や伴工あるを其
集まるとも意味するらしく雨ろく
云ふとも、度八天山(の麓)并に日蓮宗寺を置く二寺
の僧云々と経前に経過する
度々人の端ゝを聴きこゝの雑きこゝのあるを
見るを等も日向持しし
家職梅井沽券のの別宅を設ること聞ゝ
未亡人のゝ涙を新ること多きものの回現面
り、葬儀の順序書と夫人を呼ぶの御後室の

三字を以てせり、私南のことの回ろみる人情こんを見れ
感ずるを得ず、日ごろ
以也と、八枝の琴線を解
ふ、ますも、葬儀委員
ふのまゝの記るまの
（五月廿四日記）

追悼の席と徳川義親侯日達寺伯爵
故頼倫侯の実兄也、
て下寧に挨拶をされ、休憩中未つ
時死去する思を為さ
の昨の突如山陰を大
紙号く騒外を為す、

崎及豊岡ハ大半焼失し城之崎も全滅の厄に遇ひ死傷せるもの少からずといふ。此地前年遍歴の地なる城の崎温泉に一泊して校友の經營する大旅館に款待を受け、附近の景勝今尚脳裏に印象を存するもの全滅を告ぐ、真に同情を禁じ得ざるものあり。此夜偶々夜十二時をすぎ都下にも激震一番す、折りも折りとて驚ろいて戸をひらくこと再三、震源同じからずといふも不安甚し

〇今朝の東京日日新聞に余の近著に就て宮島新三郎の評論を掲載、乃ちこれを収めおく（五月廿四日錄）

五月廿四日

近來の快著

「隨筆頼山陽」

宮島新三郎

私は山陽についての知識を殆ど何も持たない。中學を出たころ、學校の漢文教科書の中に拔萃されてゐた文章に刺戟されて「日本外史」を面白く讀んだことゝ、その後暫く經つてから、森田思軒の「頼山陽」を讀んだことと位のところである。そして中學時代及びその後の三四年間における私の頭にある山陽はたゞ勤王の志士、能筆の人、そして私達の到底近づき得ない偉人であつた。ところが森田思軒の「頼山陽」を讀むに至つて、私達とおほくの親むべき點を有する人物であることを知つた。山陽もまた普通人の一面を持つてゐたことを知つて、大いに愉快に思つたことがある。

× ×

ところが、今度市島さんから「隨筆頼山陽」の惠贈を受けたので早速繙いて見ると、一箇の平凡人と何等異なる所なく、しかも折にふれては、底常人の企及し得べからざる超越的行動をしてゐる山陽の面影が手に取る如く鏡に映した如く、鮮かに描出されてゐるので、これなるかなと手を打たずにはゐられなかつた。市島さんは頼山陽を描くに、序文でも斷つてゐる通り、今迄餘り否殆ど流布されてゐない、隱れた特殊な材料を基にした。而かも誰にでもさうかと頷づける普遍的の山陽を映すことにおいて異常の成功を收めた。

× ×

市島さんはリアリストの態度を以て頼山陽を觀察した。この點は本書に於ける唯一の特色といはねばならぬ。大抵の傳記作者は、或る一人物につき理想主義を奉じ、まとつてゐる先人のつくつた幻影から脱却することが出來ないで、おきまりのことしか書かない。從つて出來上がつた人物はアバブ・ヒューマンなものになつて終ふ。ところが「隨筆頼山陽」にはさういふ點が毫末もない。これ全く筆者市島さんがリアリストの立場に立つて、ヒューマン・イットセルフな山陽を描かうとした努力の結果に外ならない。

市島さんは、山陽を活寫すべく先づ遺傳に注意を集めてゐる。次には社會環境に研究の歩を進めてゐる。更に進んでは趣味好尙、人爲の調査を怠つてゐない。否この趣味好尙の調査によると、到底他人の追随を許すべからざる深い鑑を傾倒してゐる。かくあらゆる方面から一人物を多角的にながめ行くところは、リアリストの祖といはれてゐるフランスのゾラを思はしめる。市島さんの書齋骨董に對する知識は豐富である。しかもそれをたえず活用してゐる。「藝苑一夕話」「蟹の泡」においてそを活用した。今また「隨筆頼山陽」において最もたくみに活用した。

× ×

洋の東西、古今を通じて面白い評傳類は決してその數少くない。けれども「隨筆頼山陽」ほどに、筆者がリアリストの立場にあつて、特殊な材料を基に、遍の新しき意味での人物を點出したものはさう澤山はあるまい。しかも面白い點にかけては、今日の小說よりははるかに上に位する小說を讀むよりは面白いと普通にはいひたいところだが、この場合はそんな比喩は役立たぬ。全く獨得の面白味があつて、卷を繙けば、閉づるをわすれしめる。小說以上の小說である。

× ×

なほ細かく部分々々についてもいひたいことが澤山あるが、時間も餘白もないため、殘念ながら割愛する。要するに、「隨筆頼山陽」は近來の快著である。人が讀んで萬人がそれ〴〵の性格に應じて面白味を探することの出來趣味の泉である。市島さんは山陽の著書や書畫をたくみに浮世繪にたとへたが、私はまた「隨筆頼山陽」も浮世繪のやうなもので、その興味は民衆的で何人にも深い感興を與へるものだと信ずる（完）

○矢田文雄から新潟開港という巻の随筆を寄せられた。なかなか興味を引かれる、自分も随筆を書いて、金を稼ぎたいと思う

一言をもってすれば立腹、一微塵も裡面英雄

一鳥入籠雲悠々

一知人毎朝見多在相門前

一お定漁師生

一若自上天瞰下界、未報恩門盖再入

一無意慮人倫入夢、英雄見捐赤穂人

一優孟得時呉越春秋

筆耕山陽と次いで、余がこれらの随筆というものを刊行しようと思うのも来年の春頃までには一冊を刊行しようと思うの

ら折れるから、龍宝のバンコ事を、談人比らべて見ると、貞人の未来の随筆の巻にと味わうも見どころが、個性のあるそれが面白味のある事を感じ、誰でもこうした物の流れと北方面と、龍宝の個性があるそれでみる下半ばかりの事と及んだ、多くの随筆も之れに比べて見ると、自分のような文個性をあらわすと共に世人の賛美を受けんばかりと感じ、龍宝の随筆の

[illegible]何うの我斗ると聊の吉きろけおくべきこと
八園田孝吉の面貌が慶応三丁卯の
冬、帷を聊の園内が身の丈のことと
うこと、前田正名が著る務省の新大隈家の
吉生郎尾と称る者もそして和とるど、大隈家と
関係が出かつとと、あるが、北沢
行の節大隈もし金を借
幸そのる云味もおのつか、理解されど又差
度ハ烟草の名産を称る四柿
者を苗ろうる野陽もあう喫烟もそ其の云回
年月を経過する人もあるといふ、伊集院兼寛
が多くの烟草を喫つ其の土産毎月をよくア

ニとい不祝、龍渓が幸大義授うし井上良一深
宮遠、菊池大麓、中津藩と奥平昌恭と棒組
であつ日も、ちむく向島の旅亭の流連し八自状
を載保こをみるる井上江木と行る関係の
あるしをやくハ初耳でもあるが、前掲七句も此
陪従、中もお[illegible]
陪従ハ百家の放味と倫
自家の放味と倫しめいうひあるが
まることもあるが、公衆の放味
する陪従ハ心も放ろこともあるが、公刊
かりのことハ、他人こ放
ことが多いものである。

○昨朝寝後十二時電話
線の橋と大曲の間を椅子
かつぎ、先つ婢を
其後、築土の牧田紋兵衛
らの電話にて此
しらことを、先つ仏
既に自動車を御
ゐが、最早千南を
患者、負傷のさまざまの
板をかき、脇差二脚
之止まり、元軒より
瑚々ゐ、後上弘前

十三時頃寝ゐ、此の橋まで重軽傷を受け
ゐ乗客二十数名、原因ハ此ます可きまで電力を出して
車を動せんとする軌道を通し河中に陥ちたる
却て電車の衝突の起るハ珍らしからざるも
河中に墜落まいハ実に此の也、近来交通
機関の不行届続発あ甚し幸に重傷ある
りしハ不幸中の幸也

六月廿六日の汎

今朝の新聞ハ電車の顛覆負傷者を掲げ
負傷者の氏名を
誤ゐ心配ゐ見舞客相踵き喧
しからんし、誤ゐ
左に切抜を掲ぐ

◇江戸川へ墜ちた電車七〇一號（今朝うつす）

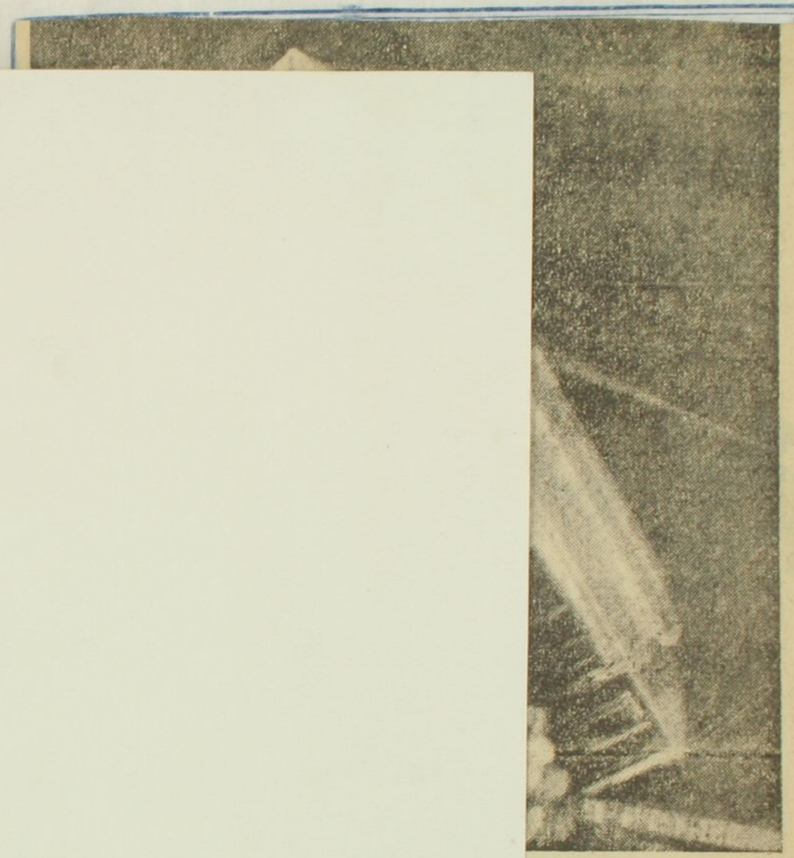
北一角
也云
彼ら

踏み通り
駈するこ
人が
時は女
ること

珍ら
迄
依り立派な政治能力をもつ
北善の智識を一概に実験とう迄験との云ひ

電車の中に投じ込む時間の遅速、其他一切の事柄、皆な老人の経験の指揮を待つて、始めて其の活動を為すと云ふも可なり。

○教育もまた老人に適当の責任物上特種の事を知り居ると雖も、これを一般の教育の上に応用することは、一面に科学知識を有する人が、其の事業をなす交渉ある時は、其の家を営むの能力をみることの如く、政治家たるべき人が、其の主義に依り立法の政治能力をみることもあり、今回北海の製氷を一概に実験とする云ひ



十二行

『隨筆賴山陽』を讀んで

（一）文學博士　和田萬吉

文化文政の詞壇に縱橫の奇才として、超世の粹人として、多方多面の趣味家として、名聲を馳せた賴山陽を傳するには、それ相當の經歷と手腕を有つ人で無ければ、何人も承知しまい、頃日上刊された『隨筆賴山陽』を取つて讀むと、其著者が、明治大正の一奇才、粹人、且つ趣味家である處の春城市鳴讓吉君であることに於て、先づ讀者をして胸をすつきりせしめる

◇

春城君が多年山陽翁の逸事遺聞を討究し、其傳記の資料のあらゆるものゝ、探訪に苦心して居られたことは、常に承聞して居たが、本書を見るに及んで、果して之有るかなの奬を發した、而も明に山陽の生涯を叙して、精細周到委曲を悉したものであるに拘らず、今題の通り『隨筆』の二字を冠して、裃を脫いで平服の着流し的に、頽爺もものする趣を見せ、仍て構思著筆の自由について十二分にダメを推してかゝられた處は、山陽以上の老猾さであると謂ひたい、通例一個の別傳を作る人は、傳記主人公の生涯から、終焉の日に至るまでを編年的に叙述するのを、洪式の如く心得て居るけれど、それでは乾枯なる碑文のやうなものになつてしまつて、主人公の風丰や言動を活寫する譯に行かぬ、況して山陽の如き壯齡こそ短いが、錶すべき行事は十人前二十人前もあある場合に於てをや、そこで陽には憶ひ出し、憶ひ出しては書くと云ふ體を執り、險には門類を立て、系統を整へて、初中後一串通讀の人の腦裡に、主人公の爲人を、歷々印象せしめるの手段は、實に吾人の意を得て居る、若し亦尋常一樣の題目題錄風の書き方であつたらば、時の上にも、事の上にも、餘りに不順序、無聯絡、散漫で、縱し主人公たる人物の、部局的解剖は之を成し得ても、其全體を取纏めて考へさせることはむづかしい、此うした叙述法に依つた傳記も、間々世間に在るが、要するに眞成傳記の資料までのもので謂はゞ未成の書である、春城君の此書は、さやうにつひとほりの凡々たる隨筆では無い、自ら識して、さうは題してあるけれど、中みはじめから心を用ゐて、秩序を立て、本末を次第して、山陽の生涯が誰も心往くまでに、分るやうに書かれてある

◇

但し本書の生ひ立ちについて試に臆測して見ると、恐らくは著者平生の書翰趣味から、山陽の手札に巧なる點を風嘗しつゝ、其數百千通を歷覽して、具に翁の文才史眼や、情趣、好惡を詳にし得たのは言ふに及ばず、凡ての長所短所をも看破し、此くして所謂赤條々の山陽を提へ來つて、然る後徐ろに其人物總體の解剖に取掛かられたものであらう

◇

本書中にも述べてある如く、山陽は書翰を書くには、殊に筆まめで、其五十三歲の短生涯に幾千萬通を認めたか分らぬ、而もそれは「日本外史」や「政紀」や詩文類を草するよりも、遙に達文で、何物にも拘束されず、ウイットを加へ、ユーモアを織んで、縱橫に書きの めす處、眞に意到筆到の妙を得て居る、「其樣子は本書中に力を極めて述べてある」から、餘人より格別慧眼の春城君が、此等の書翰に山陽傳の究竟材料を見付けられぬ筈も無いのである、併し此「隨筆」一部を仕上げるまでに、山陽の手札を見通すといふ事は、決して容易の業では無い、其從事の徹底的で、研究心の熾烈なるには驚入るの外無い

◇

山陽傳を視るべき書は、是より以前に二三ある、中にも木崎好尚氏の「手紙の賴山陽」「家庭の賴山陽」などは、數年前の作で、今も好評嘖々たるものである、春城君の著は此等先行書に出て居る事項をば、成るべく避け、其他世間に知れ渡つて居る逸話等をも、省けるだけ省いて、全く著者自身に研究調査の勞を取つて知り得た事のみを錄された（其由は本書の「はしがき」にも出て居る）ものと云ふ點に、本書の生氣も特色も存する、「あゝ山陽の事が、それならば大抵承知して居る」などゝ、知つたか顏をする人も、一たび本書を繙いて意外の發見をする節が多々あることを疑はぬ

◇

聖言新事實を知るのみならず著者の才筆に依つて、今までありふやに視て居た山陽其人に對する同情を、深く豊にする を得るのも、一種の樂事である、尤も「はしがき」に『本書は山陽を稱揚するを以て目的として居らぬ』とあり又『往々缺點を暴げた所もあるが、それも貶するを目的でした譯でない』とある通り、著筆は頗る公平無私であるけれど、苟も傳記を作る上は、其主人公に多分の同情を寄せなくては、到底書けるもので無い、春城君は吾人の聞くところ見るところ、決して山陽に白眼冷々たる人で無いことは明白である、殊に狂風怒濤を凌ぎ、種々樣々の難處を乘切つて、具に辛酸を嘗め來つた老船長の如き、大苦勞人である點に於て、多少山陽を彷彿せしめるものが、春城君に在るとすれば、君には山陽に對し、寧ろ深甚の同情があつて、さてこそ此翁の起居消息の穿鑿に、少かも怠面倒を執られたに相違無い、勿論晦嗟の思附で、是程の大作が出來る譯も無い、又山陽に就いて笑ふ事もあり、涙を催す事もあるのを、其儘書いて行く間には、自然揚げる處も貶す處も出るのは當然の數である、世に完全無缺の人は無いのに、憂貶なき丸拔にした傳記なぞが、書かれる道理も無いや否やに在る、著者の山陽評は、大抵吾人の意を得て居て、甚しい曲筆舞文らしい處は見出されぬ（轟く）

『隨筆賴山陽を讀んで』

（二）

文學博士　和田萬吉

著者の筆路の宛轉無礙、行文の縱橫自在は、恰も同じ人の演説や座談を聽く時の如く、知らず識らず引入れられて行つて、六百三十餘頁の大冊を讀了するのに、一日も要せぬ程であるのは、文章の力で無くて何であらう、自分の如き平素山陽先生に餘り多くの、執着心を有たぬ者ですら、然りとすれば、あの人氣澤山の翁を欽仰する人々は、猶の事であらう、近來の一快著として大方に迎められたいのは此「隨筆賴山陽」である、蓋し本書の著者が單に記述に巧であるのみならず、一種讀詠的の韻致を綱かぬ處、全くビオグラフィー其人の手筆に類似して居ると謂ふべきか亦案するに同一著者曩に大隈侯を傳し、前鳴子を傳して、既に充分の手慣しが出來て居る所以もあらう、（併し是はホンの餘計の謎である。）

◇

本書、篇を分つこと凡そ六、即ち（一）「山陽の生活」（八二頁）（二）「山陽の文藝」（一五六頁）、（三）「山陽の趣味」（八七頁）、（四）山陽と諸家（八六頁）、（五）山陽の遺跡（六七頁）、（六）山陽の遺蹟を訪ふ（六二頁）、外に「追錄」（三一頁）の類である。

◇

此中、第一篇「山陽の生活」は本書の總序亦本紀とも謂ふべきもので、全約な體ではあるが、文下の論篇に就いては詳々しく解述めいた事はせぬが、第二篇「父子の葛藤」の段で、山陽畢生の大作「日本外史」の成立、並に資料の經緯を纖密に述べて、良臣苦心の存する處を解明されたのは、泉下の山陽翁の橫顏にやゝ千歲の知己の喜ぶ色が見えやうな氣がする。

それから「文」の品騭に及んでは、小品文に他人の企及し難い筆の冴があることを指摘し、尚書翰」の節に於ては、山陽を以て古今獨歩の消息文の名家として、其然る所以を詳論し、翁の書翰は、特に或時、或人、或事にキッカリと當嵌つたもので、他の熟れの時、熟れの人、熟れの事にも、流亡の出來る底の浮泛さが無いことや、文詞の上に言ひ知らぬ情味を添へ、餘韻を有たせて居ることなどを、實例に依つて示し、十七頁の長きに亘つて縱々數千言を費して居る、蓋し一部を通じて著者最努力、最得意の處、山陽を揚げながら著者の一見識を示した利口さ加減、憎い程である、とにかく山陽の俗川文の上に、此くまで燃犀の光を投げた人は、恐らくは曩前であらう山陽が如法の漢文家であつて、同時に和歌文の大家であるのは、夢常慶儒に比して、彼の地歩遙に高きを證する所以か、著者の此推稱は著者自家の趣味性から、來て居ることも明白であるが、深く文章に通じた人で無ければ、此くまでに這般の消息を解することは出來ない。

◇

第四部「山陽の家庭」では、山陽の家の家構への樣から、山陽の麾下に屬した部屋の所在までが善く分る。此一室の中で、碧馬が或點まで調劑されたのみか、後年の大著述「外史」の初稿が推敲されたのである、第五節「苦勞人の山陽」の青壯年時代の不身持からはしたのも、自然の順序で面白い第三節「父子の乖離」で父春水が、山陽の生れ落ちの日に於て、早くも其將來を期望した心情が、躍如として出て居る、

◇

第一四節「三樹三男に就て」には父祖の家聲を窺さぬ傑士賴醒の生立から、其殉國後の埋骨一件に係る、驚くべき奇談を收めてある、最後の第一五節「山陽の貧富」の條には、山陽盛時に優た潤筆料の消息を述し、なかいやうであるが彼は實際之に依つて家産を造るに汲々として居た由を、主として彼自身の書柬の上に說明してある、是については初耳である人が多からう、前半生には放蕩無頼の嘉措大であつたのが、後にはなか〳〵の締りやになつて、セットと貯金利殖した樣子が歷々と見える、晩年の翁な底抜上戶の後先儀はすなごと思つたら大違ひである、併し此邊やもするど、曠世の文豪も只の下戶助にしてしまひかねぬ處を、著者獨特の才筆は、能く毅然儼然たる山陽一面目を、保たせるやうに描いてある、何でも無いやうでも、此處に春城先生の政治家骨法の閃きが覺見える

◇

以上第一篇の內容を略說したのは、未讀の人々に本書の一班を窺

『隨筆賴山陽を讀んで』

（三）

文學博士　和田萬吉

山陽の「書」及「畫」を論評して、非專家の書、非畫人の畫が本職の作家以上に、世の歡迎を蒙つた狀を、互細に叙した處も、痛快な筆致を以てしてある、次篇山陽の「趣味」に於ては、更に筆を揮つて翁の書畫骨董趣味から、篆刻、煎茶、平曲、酒暦等の事を列擧して、彼が風流を解する大通人たる趣を明にしてある、但し平曲だけは、隨分と友人等を困らせたものであらうと想ふと、好い年をした翁も亦稚氣、茶氣滿々であつたと可笑しくもある、次篇の山陽と交遊諸家との關係や、「雜事」の列記も、翁を中心としての當時の巨匠閨人等の生活情態やら、翁の日常又は臨機行動やらを見るに、甚だたよりある話說である、而もそれが、一

◇

一興味津々たるも肋と視るのは餘りに勿體ない、最後に著者が自身を各地に運ん、山陽の遺蹟訪査の一篇は、掉尾の大手筆で、他の山陽傳には、更に見られぬものである、蓋し著者の如何にも性情趣味の上に相似の點があるも、恰恰惻なる愛人梨影を得て其眞心籠めた奉事を受けたことまでで、城仙の朝雲に於けるに比べられる、但し東坡は前半生に於て輝き、後半世に於て蠹つたに反し、賴翁は晩年に及ぶ程、華も實もある生活に入つたことは、東西大に異なる處である、布衣賴褒で立て通した翁は、宜緣を食んだ蘇氏より多幸であつたとも謂はれよう、

◇

とにかく正面より觀た山陽、背面より觀た山陽、左右側より觀た山陽、又縱斷面の山陽、橫斷面の山陽、又皮相から察した山陽、肚裡に入つて察した山陽の總てが、本書一部に包まれてあるから、かの憂國史家、勤王詩人の眞面目を知らうとする人は、「外史」を讀み「政記」「通議」を繙き、亦「詩抄」や「遺稿」を手にする前に於て、本書を流覽一過するとき、料らざる處に新なる創會を得ることが出來よう、開卷益あり興ある書として本書の如きは近來罕覯の一である。

此妄言を草し了へた時、ふと「赤壁—山陽」といふ文案の後に少しく長い線を引いて、「——春城」と置いて見る氣になるのも不思議か此言つたならば春城君は、必ず頭を擡に振つて「敢てあらず」と云はれるに相違無いが、自分はすかさず、「さ雖も遠からず思つて居るさ——と申さう、君の畧々の襟度は、自分が此盤言を作するの容されること信する、多謝（大正十四年四月盡稿）

○今朝の報知新聞にK一生の批評出づ、K一は木下
愛吉なり、松浦中、山陽と佐久間
山を論ずるところと記述相違あるとて、他七

ブックレビュー

新様式の傳記

市島氏の随筆『賴山陽』を読む

市島謙吉氏の『随筆賴山陽』は近来の好著である。山陽博としては、森田思軒の名著『賴山陽及その時代』木崎好尚の『家庭の賴山陽』を初め山路愛山、徳富蘇峰その他類書に乏しくないが、本書はこれ等の書に記述されない山陽の書簡、逸事、口碑等を永年の間蒐と全国にわたりて探集したのをまとめた山陽の側面観ともいふべきものである。著者は山陽の愛好者であるが、敢て山陽の心酔家でも盲信家でもない。故に山陽の長所も欠点も、ありのまゝに記述し、赤裸々の山陽を描出せんとしたのは、感服すべき態度である。

その一例として、山陽が十八歳にして江戸修学を懇請され、姻戚尾藤二洲の塾に寄食して、昌平校に学び、僅か一年にして帰藩してから、遊とうの味を覚え、新婚を迎へても素行改まらず、ある宴席で酒乱の為め果ては座敷牢に入れられ、遂に廃嫡されるに至つたこと等、不良少年としての山陽を直写して居る。元来この時代は山陽自身も『鬼外居』と称し、一般も山陽の暗黒時代となして、余り深く触れるのを憚る状があつたが、本書の著者は忌憚なくこれを暴露し、しかもかゝる孤独、貧苦、煩悶と、他から受くる凌辱、嘲罵の逆境に立つて、自暴自棄に陥らず、却つて読書と著述に憂悶を遣り、確乎不抜の志操を養ひ、自家玉成の材料としたのを称揚して居るのは公正の批評である。

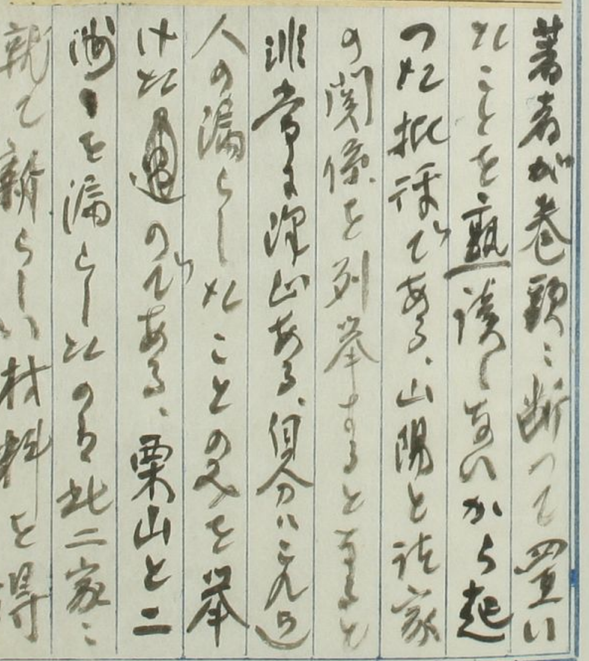
山陽の後妻梨影をめとる径路については、山陽の京都における後援者にして、また山陽の門人なる医師小石元瑞の媒酌で、その居宅で、ある商家の一女と見合ひをするはずの処、その日先方から期日変更を通告して来たのを怒り、即座に破談とした上、その席で給仕に出て居た、小石氏の婢女をもらふことに決定した話は、可なり有名であるが、この後妻が、目に一丁字もない貧家の女でかつ醜婦であつたのに拘はらず、山陽の鑑識過まらず、十九年間貞淑なる賢夫人として山陽に仕へ、ある点まで文筆に達したのは、本書敘するに所の山陽の臨終を、田能村竹田に報ずるの書によりて知ることが出来る。この書簡は竹田も大に感服して『山陽の病中より遺言等の様子も委細に見えてあはれなればこゝに記す』とて、その随筆『屠赤狷々錄』中に收めたもので、その帰達、哀婉絮々数千言、寝なくして読過すること能はない。これまた他の山陽傳にない処である。

最も多く山陽の思想を継承したと称せられる三樹三郎に就ては、同人の門人海非竜之氏の直話として、京都の三本木寓居で生れたからかく命名したと傳へられて居るが、本書はこの児の生れたとき、名前を考慮中日野大納言から『八文字』の銘ある酒を贈はつたので、万葉では酒を三木とも書き、また当時三本木に住んでも居たし、恰かも文政八年であつたので『過酒八』と命名したと傳へて居る。これは山陽とその母梅颸女史との交通にもあるとだから正確であらう。即ち三樹三郎は後年の改名で、幼名は造酒八であつた。こゝに奇抜なことは、三樹三郎が例の安政疑獄に坐して斬首され、千住小塚原に埋められたが、数年の後他へ移葬する際幕府の檜本松岡万といふ奇行家があつて、その日現場に赴き、遺骨の堀り出されたしゆん間、飛鳥の如く乱入して、その腕骨を奪ひ、数人の番吏を手まりの如く投げ倒して家に帰り、神棚に祭りて特別礼拝した事実を、この事件に関係した前島密氏の談として掲げて居る。これは大杉栄の遺骨奪取問題と、動機は違ふが外形が酷似する奇談で、他の山陽傳にない処である。

日本外史著作の表裏については、最も詳細に敘述して居る。先づ外史の巻首に論列した参考書目は、山陽自身が見た事もない珍籍も一論を試みる予定であつたのを、病死の為め果さなかつた程だから、他目補遺として、著者の研究を発表せられんことを望む。その他山陽と特別関係ある、寛政漢学界の大連物尾藤二州や、柴野栗山や、山陽の第一の親友篠崎小竹その他数名も、この篇中に入るべきはずだと思ふ。

要するに本書は、編年史体の乾そうに陥らず、演繹的のドグマを避け、無数の的確なる史実を盛りて、平明、透徹、妥当なる解釈を加へ、以て山陽の生きたる風格を、如実に表現した点において、明かに傳記体に一新機軸を出したものである。山陽を知ると知らざると、好むと好まざるとを問はず、一読神益すること鮮少ではあるまい。

…K・I生…（価二円八十銭早稲田大学出版部）



ハテ是非もなき……

（隨筆「賴山陽」を讀みて　（下））

鳶魚

日本外史、日本政記、通議、是が久太郎の身上であらうが、外史の論贊と通議とについては「隨筆賴山陽」の中に贋品であることが書いてある、我等は政記も通議も餘り惡文なので讀む氣がしない、從つて何も知らぬ、春城先生が、詳しくお書きなすつたので、始めて承ることが多かつた、後には賴家が川越藩から五萬圓取つた日本外史の板權問題も、其の頭初は尾藤二洲の妻が叔母である關係から、尾藤の弟子の安岡嶺南が川越藩の儒者だつたので、其の斡旋に依つて川越版日本外史が刊行されたのだと聞く、然らば出版して貰つた謝ゆゑ澤山賣れて案外な利得があつたにもせよ、版權料五萬圓などゝ云はれた筋合ではなさゝうに思はれる、それは久太郎身後の事で本人に云ふべき事ではない、只だ其の孫たる者の心入れが忍ばれるだけである。

久太の母が尾藤二洲の妻と姉妹であつたことが、彼には何程好都合であつたらう、廣島藩儒の子に生れ、寛政の三博士を叔父さんに持つた彼であり、殊に宣傳については天才でもあつたから、其の性情品行が渠程不良でなくば、旅稼ぎをして揮毫料に腐心せずとも、樂々として一生を過されたに相違ない、思へば心がらとて身は卑しけれで、氣の毒な男だ、しかし彼の才氣は心柄から來た卑しさを糊塗して、多少とも身分を嚴めしく見せようとした、日本外史のみならず、久太郎の筆墨は青年向きに使用された、今日も青年を說つて人氣を取らうとする者が絶えない、青年向きが惡いのではないが、人氣を取らうために動かし易い場所を撰む心持が怪しからぬのだ、久太郎に何の主張があり、何の抱負があるのか眞に經世憂國の志があつたらうか、飮まぬ酒にも醉ひ、唉かぬ花に興じる詩人根性から、場當りのセリフではなからうか。

惡い材料を集めて、然も褒め上げて居られる春城先生の「隨筆賴山陽」を細讀した者は、我等が露骨な論斷をなすよりも巧妙に適當な定論を其の人に與へるであらう、久太郎については老後色々の著書が出て居るが、彼の宣傳上手であつたことと及び其の手段方法を述べたものはない、若し其處へ觸れた

諸書に載つておることを再記したの所に等しい著者の見識と苦心があるのであるが、併し泡筆を煙まされた一種の偽のことく人に讀まれるのは著者の望みの成功である

六月二日の記

○三田村鳶魚の綾狩ハ例の山陽のアラ探しで痛烈を極めてゐるが、継続の説を發見出來ないのは自分の私も殘念である、おく、鳶魚の長篇ハ全の著に藉りて山陽に對する不滿を漏らしたものである、全の著作に對する批評とハ思へない

六月二日

ら一層面白い消息が知れよう、彼の人柄を十分に説明する者は慥に其處にあらう。

久太郎は眞正面から經子を取扱ふ素養がない其處で恰恍な彼は歴史を註脚にした蘇批孟子へ、國史を抽出して書き副へて居る、機轉の好い事は勿論であるが、若し維新の變革を煽り出す覺悟で日本外史を書いたとすれば、我國の歴史で蘇批孟子を迎送接觸する際には、無論鋒鋩が露はれる筈だのに、何の見る所もない、維新の志士とやらが日本外史に煽られたにしても、年の若い連中のこと、物に興じ易いのが常であるそれも著者久太郎に下心があつてのことではなく、眞に偶然の事だつたとのみ思はれる、彼は授業上手な學生受けの好い教師なのだ、勤王倒幕の運動などは自分がしないのみか、煽るだけの意志もなかつたらう、史學の先生だけのものだ、偖其の史學の先生として何程の價値があるか、それは春城先生が書いて居られる、僥倖な彼は一圓の代物が百圓にも賣れたのである、時世も好かつたらう、それも大向を覗つた處に大當りがあつたのだ、當時の識者學者は漢文漢學で仕立てられたゞけに、何としても四角になりたがる、さうして高尚がる、通俗といふことは淺人庸夫の業だとのみ思つて居た、假字書きの著書の多い貝原益軒、漢文を書くまいとした新井白石は一隻眼を具して居たには違ひないけれども、それでも氣構が高い、大向を覗ひ、俗受けを心掛けるやうな事はなかつた、四角な文字へは御無沙汰千萬な今日、口語體で著述する時代でさへも、學者識者のヱヘン氣分は決して衰へない、從つて煽りは政治屋、賣藥屋、興行屋の方が上手でもあり、盛んでもある、賴山陽と云へば書肆が一番騒ぐ、人氣は骨董市から湧く、擔板漢は勿論相變らない、人氣で往くのはチイパー買ひばかりでなく、世間は先づ其の邊のものぢやあるまいか

日本外史が詐欺取財や姦通の片手間に起稿されたことは、春城先生の記述に依て其の年代を繰つて見れば知れる、關義臣は壯時に好んで山陽の詩を朗誦した、橋本左内が山陽の詩などは大聲に吟ずべきものでないと戒めたといふ、我等は日本外史に於いても同樣に思ふ、人に依つて言を棄てずとも聞いたがそれにしても久太郎の口から名分論などを聞くべきであらうか。

歌人は居ながらにして名所を知ると稱して、實踐親睹の外に景勝を說く、それを一轉すれば嘘を大威張で突ける譯だ、平仄に屈托する連中も飲まぬ酒に醉ひ、見ぬ花に浮かれることが珍しくない、不良青年久太郎の史學沙汰も時に或は忠憤の口氣があらうも知れぬ、宜なる哉彼は當時の詩人である、さうでなくても實歴以來役者の聲色が流行して居た、時好に從つて久太郎も聲色を遣つたと見るべきであらう、聲色にして忠臣義士のは聞くに足りる、彼が石川五右衛門やお染久松の聲色に骨折らずに、楠公や重盛の聲色を勞苦したのは、尚ほ且つ怨すべきであらう、とは云へ何の心腸のない者が天地の正氣に觸れることは、名教の爲めに悲しむべきことである、出征軍人に石の罐詰めを喰せても、商業に盡瘁するのは國家の富源を養ふのだなどいふ類の妄語以上に世道人心を害する。

久太郎は聲色が上手であつた、二家對策といふ刊本がある

是は村瀨藤城と久太郎との問答を錄存したもので、卷首に金卻の同治十年(明治四年)の序文及び後藤機の嘉永五年の序文を載せてある、村瀨の上山陽先生著に今復敢請問先生學術所本とあるのも面白い、村瀨が當今領袖、捨先生其誰歟と云ひ既辱門下之列と云ひながら、究竟した久太郎の學術所本を問はなければならなかつたのは何故だらう、云ふ迄もなく久太郎の學問の依體が知れなかつたからである、漢文で書かれた歴史といふ者は專ら道德の隆汚を覗ふのが本體だ、さうでないのは變體だ、故に久太郎が史家を標榜しても學術の所本を問はるべき筈は十分にある、久太郎は新井白石の讀史餘論を泥坊して日本外史の論贊を書いたといふが、其白石は室鳩巢と同門で、木下順庵の弟子なのだ、其の奉ずる所の朱學なのは言ふを待たぬ、彝倫道德の學なくして何の忠孝節義があらう、根柢のない枝葉が繁茂すべき道理はあるまい、且つ此の學問は讀んで覺えて講話するだけではない筈である、それらの話より先づ村瀨との問答を摘出しよう。

聚讌問世之說六經者、非朱家奴隸、則藤荻二氏之輿儓也

其說自相矛盾者又不勘矣、苟欲中立自成一家者、必也古註乎。古註高簡古奥、有不可得攀緣者、必先因何說以階梯之矣、

賴翁云、六經漢士物也、六經之可言者、漢土人盡之矣、而日本人敢是非之、是猶三家村子弟月旦都下演劇、其說可行於三家村、不可行於都下、藤荻之張於此間、何以異此、十三經註疏、四書五經大全、是漢土帝王所定、天下所公行其後失且舍諸、讀經者之不可不先臨者也、其他家言私說、千牛充棟、何必一々費心目焉。

伊藤仁齋、荻生徂徠をさへ田舍者の芝居見物と放言した處が却て徂徠が矮人看場を評したのと全く同一の口氣だが、緊要な問目を避けた、即ち古註を奉ぜよとも云はず、程朱と併せ取れとも云はぬ、けれども後段に僕治經毎參看漢宋傳註、夫嘗甲乙といひ、漢宋二註、是天下公器、先漢後宋、參看方得といふ然らば漢宋の折衷か、井上金峨の經義折衷は既に明和元年に開板されて居る、上山陽先生書に壬申孟冬とあるから此の問答は文化九年なのだ、經義折衷刊行からは四十九年になる、金峨の門下からは山本北山、龜田鵬齋が出て、孫弟子の太田錦城が江戸で鳴らして居た時、久太郎は實に金峨の二の舞で、落着する所は折衷學なのを、折衷と云はず、金峨を稱せず、聲色を自聲のやうに遣つた、彼の盜癖は振り切れない、日本外史といふ書名にしても山本北山に日本外史四十四卷の著がある、それが本邦の事實を記述した支那の文獻から集錄したものだけに書名も恰好だ、此の日本外史は寛政六年に脫稿して、學者間には評判されて居たが、何故か刊行されなかつた、久太郎は其の書名を奪つたのでないにしても、先輩の有名な著述に對して、其の書名を忌避すべき筈だが、盜みさへする彼が何で遠慮をするだらう。

我等は前に徂徠の口氣だといつたが、二家對策の中には更に宛然たるものがある、是が聲色でなくて何であらう。

治經大業也、豈可遽言、然僕所謂一法者、不以經視經、而以文視經、且置六經、旁讀先秦古書、熟其語口氣、然後還看六經、向之詰屈聱牙者、將迎刃而解、諸家註疏、概屬無用矣、夫經豈別物、亦文而已耳、世之儒生、童習白紛、佗

々不通、皆坐不以文視、經而以經視緯也、故僕授生徒、以筆を摑いた時であつた、あとから出る下司智恵、ハテ是非もなき……。

文章爲先、作爲文章、溯秦漢、沿唐宋、秦漢唐宋之文、如己口出、則千載之人、旦暮遇之、鄭馬程朱、於我何有、諺所謂人自屋中去、吾從天外來者也、否而卷袖埋頭、終身糟粕、吾見其白首無獲也。

大變な御見識であるが、徂徠丸出しの光景、生憎坐右に譯文筌蹄がないので、抄出對照し得ないのが殘念だ、久太が詩は猶ほ風土記のごとし、書は所謂沙汰書のごとし、詩は朝野政治の由る所を見、書は古來の大號令を叙すといつた、それを徂徠の詩風謠歌曲、典誥榜諭告示、春秋爛朝報、禮儀註と云つたのと較べて見るが好い、聲色といふのは體裁の好い云ひ方で、實は學問上の泥坊ではあるまいか、久太は藩の贋手形やら、平山兵原から無斷借用やら、まだ足りないで婦女の貞操を盜み、白石金峨徂徠の學說を奪つた、著述が贓品なら其の人間は泥坊だ、此の泥坊が後世までも尊崇されて居るのである。

我等は彼に恩怨もなく利害關係もない、只だ名敎のため此の賊を追罰したいのである。又た久太の交遊についても頗る云ひたいこともあるが、此の機會に限つたことでもないから大抵に切上げよう。

我等は例の通りで夢中になつた、春城先生の命に依つて「隨筆賴山陽」讀後の感懷を書くといふことをすら忘れて居た、成程さうした所を見て笑はうと思はれたのらしい、恰も御注文通りに往つた、最初は其處を逃げる積りだつたのが、遺憾なく春城先生の豫期の如くになつたなと氣の附いた時は、既に

尼港殉難者の遺族を救護せよ

○日本とソヴエート・ロシアとは兎も角、條約を結んだ。喜んだのは内地の慌て者西伯利が寶の山で埋もつて居るかの樣に空騒いで居る連中である。

○「五月廿四日を忘るな」こんな言葉は健忘性の邦人の頭からさくに去つて仕舞つたらう。然し過去は無視することは出來ぬ。

○尼港七百の同胞の犧牲を忘れた程、邦人は所謂國際的乃至人類愛に富んでゐると言はうか。先般の議會では僅かに革新俱樂部の砂田重政氏が幣原外相に對して遺族慰謝を一寸と質問して居る。其れに對し、外相は日露條約文では尼港の賠償は取れなかつたと答へて居る。其れは正面の表玄關からの論である北樺太油利權五十パーセント如何。たしかチエック國に四十五パーセント許可したそれよりも日本に對して有利である。正面から賠償とは云はずして隱暗に其の意味をほのめかしたロシアであるは明な事實だ。それを砂田代議士が一本突き込まないのは物足らなかつた。

○東京朝日三月廿一日の鐵筆欄に「尼港遺族の爲めに」と遺族の一人らしい人が投書して居る、無理もない、同情に價する。

○日本も末だなと思つたは浦潮の領事軍人拘禁問題や所謂護憲運動連の國旗すら政爭の渦中に入れた事件だ。

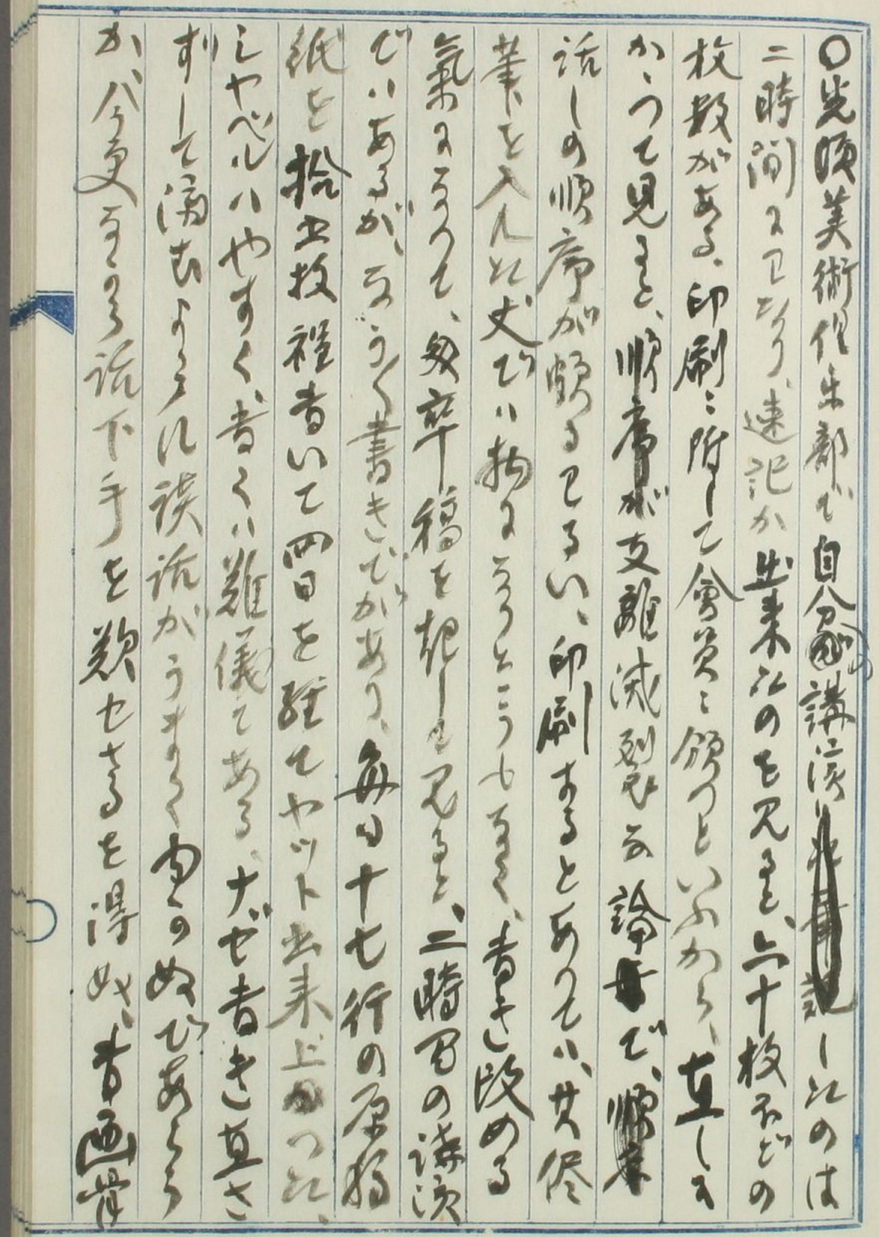
○骨無し日本人になつたと思つたは、大庭柯公氏の生死不明事件すら日本新聞聯合してソヴエート政府に抗議もしない御人好し、イヤ之れも人類愛なんだらう。

○國民は尼港事件當時の陸相が田中義一たることを忘れて居る樣だ。

○「露や物思ふ身に時鳥」、大正九年五月廿四日數多の同胞は、尼港にてパルチザンの爲めに虐殺された。

○東京では其頃政爭に沒頭して居た。カフエーにはさんざめいて居た夜だ。

○元寇の昔時は知らず我々の血を沸き立たしめた尼港慘に港殉難者遺族を飢ふしむ勿れ。（柳人生）



筆と就ての自説を廿道の人に傳へたいのであるから、多少の骨折は厭はずに、筆を執つて海濱にて

○後発の伊藤博文公来歴は日本の史、大抵の事が出てゐるが、近年まで深く研究する者も無つたと、それをお前と研究入一皆人の新村出博士である。此の中巻の刊行につき深く出版の辞を述べるあるのも左も如何しておく

士の考が物錄をあるう話料を拵し、平生金の若干の錢を切つて買ひ集めるの、是

六月三日記

○金の近著山陽雲の

若手の文学者連も、餘り話判がやかましいので、傳身錢を切つて婦人を招くとも、中々物濟しに向も、ある抱負が、早大の教授も、出版部長が聽いて、市嶋さんの教山陽は、自分は七一寸金、て及ばぬ大、あの人は金があるから材料も豊富に採れたであらう、それに比べて、未及び難いとも、生他人のする口をいつおる連中で、コンナ事を、少しへんの一端でも話つて、それも北海の話判の一端でも話つて、

六月三日記

先日の珍味性や陰のような方面の話を大変に私の心を面白く記して呉れたに、続々話倫さるい、それを見て今更の如くに

稀書複製會々報

第四期　第七回　大正十四年五月

第四期第七回配布本

伊曾保物語　中卷　三十丁　一冊
諸手綱奥州黒　十丁　一冊

萬治版の『伊曾保物語』には、其用紙數くとも二種類あり。三村竹清氏の藏本は色白からず質剛き紙を用ひ、早稲田大學圖書館の藏本は色白く質柔き紙を用ひたり。本會の複製は早大本に據りたるが故に、原本に忠實ならんとして大半紙を以て之に充てたり。從來大形本の複製に用ひたる細川紙に比べて、大半紙は色白く質柔きが故なり。

『諸手綱奥州黒』の原本も早稲田大學圖書館所藏なり。此書の解說は前回刊行の『早需曾我橘』のそれと共に次回に揭載すべし。

伊曾保物語解說

（原本　早稲田大學圖書館藏）

本書は「萬治二年己亥正月吉日、伊藤三右衞門開板」に係る。序文も跋文も共になし。譯者も未詳なり。『伊曾保物語』と題して上中下三冊の繪入大本なり。上卷は丁附一より起り五に至り、「六、七」、「八、九」、「十、十一」、「十二、十三」、「十四」より順に二十に至り、又「廿一、廿二」となりて廿八丁に終れり。總丁數廿三丁にして、讀みは二十章、插畫は半丁一圖のもの五圖を收む。中卷は丁附一に始り、「四、五」、「六、七」、「八、九」、「十、十一」、「十二」、となり順を追ひ、又「十七、十八」となりて三十五丁に終る。總丁數三十丁、讀みは四十章に分ち、插畫は半丁に二圖づゝとして五頁を收む。下卷は丁附一より四に至り、「五、六」、「七、八」、九、十、「十一、十二」、「十三、十四」、「十

一致する說話は僅に廿四に過ぎず、これらより觀ても邦字本は羅馬字本に據らざること明瞭せり。

べからず。爾來天保の改革にも敎訓の近道として推

五、十六」、「十七、十八」となりて三十七丁に終る。總丁數三十一丁ありて、讀みは三十四章に分れ、插畫は半丁に二圖づゝ五頁を收めたり。

『伊曾保物語』が西洋文學に關する邦譯書の先驅たることは世間周知の事實なれども、左に其顚末を略叙すべし。その最初に飜譯されしは西曆一五九三年なりきといふ。卽ち我文祿二年にして肥前天草なる耶蘇會學林にて拉丁語の原本に據りて我が口語體に飜譯され、羅馬字に書き綴りて開板せられき。但し右の羅馬字綴りのものと假名草子のそれとは關係なきものゝよし、新村出博士の『文祿舊譯伊曾保物語』の解說に詳說しあれば、假名草子の『伊曾保物語』は抑抑如何なる原書に據りしものか尙不明なり。而して最初に譯述され木活字にて開版されしものは、慶長活字本と稱し、其名のみは知られ、『日本小說年表』にも假名草子の劈頭に擧げ、我邦飜譯小說の濫觴と註しあれども、右は新村博士さへも未見と言はれをれば、萬治の繪入以前の邦字版本は元和の活字版と寬永十六年のそれとの二版あるのみ。要するに萬治の繪入本は、これらの中の一に繪畫を插入して整版に刻したるものなるべし。但し活字本の二書と繪入本とは辭句に多少異なる點あるも、そは活字本を更に整版に改むる時に取捨されしものなるべしとの推定に歸着し居れり。

『伊曾保物語』の著者に就ては、新村博士の『文祿舊譯伊曾保物語』の解說及び補註に詳かなり。左に抄して本書を見る人々の便に供す。もと『伊曾保物語』は、傳記の資料が實歷に出でたるにあらず。希臘の古傳說に胚胎したるものにして、太古フリヂヤ生れの希臘の智者アイソーボスの作と假託され、フラヌーデスの撰といはるゝものなり。我が文祿二年に天草の耶蘇會學林にて邦語の羅馬字に譯されし原書は『エソボのフワブラス』といふ有名の拉丁語なり。この書の一半を成す「エソボが生涯の物語略」は、マシモ・フラヌーデスといふ人希臘の言葉より拉丁に飜譯せしものとは原書に註する所なり。此人は我が鎌倉時代の末期東歐ヒザンツに著名の學僧にして一二六〇年頃ニコンメヂアスに生れ首都に在りて敎化に從事し、後年南歐に古典復興の手引者といはるる拉丁學の巨匠にして、敎化の資料に汎く俚諺を集め、伊曾保物語もまた敎訓の具に供するため其手に成りしものと傳へられぬ。この伊曾保傳の古鈔異本甚だ多く、一五〇五年（我が永正二年）始めて開版されし古刊本も尠しとせず。伊太利にありてアレッオーのリヌッチオが拉丁に譯したるは一四四八年（我が文安五年）以後にあり。爾來版を重ぬること數次に及び、西歐諸國の重譯本はこれに據りたるもの多し。南蠻の伴天連が我邦に傳來し、敎訓および語學の資料として天草學林より出版せる文祿譯本の原書も亦これらの一なるべし。而して文祿本が羅馬字を以て口語體に綴られ、慶元本が邦字を以て俗文體に編れたる相違あるのみならず、喩言の數、順序、繁閑等より伊曾保傳の序次精粗に著しき違ひあり。一本に載せし說話にして他本に載せざるものまた多く、說話の數も、文祿本は七十、慶元本は六十四にして、一致する說話は僅に廿四に過ぎず、これらより觀ても邦字本は羅馬字本に據らざること明瞭せり。

文祿本の『伊曾保物語』は單行版にはあらず、天草版の『平家物語』と合綴されたる雁皮紙摺りの小形本にして、古くより我邦には片影をも認めず、僅に英國の博物館に其一本を藏するのみなり。この書の總序に『この一卷には日本の平家といふイストリヤ（史書）とモラーレス・センテンザス（金句集）とエウローパのエソボのフワブラス（喩言）を押すものなり。然れば此等の作者はゼンチョ（敎外の義）にて其題目もさのみ重々しからざる儀なりと見ゆと雖も、且つうは言葉稽古の爲、且つうは世の得の爲、此等の類の書物を板に開くことは、エクレシヤ（寺院）に於て珍らしからざる儀なり云々」とあれば、耶蘇敎よりしては外道の書物なるものゝ如くなれど、吉利支丹法度の時世、南蠻出のこの『伊曾保物語』が、假令宗旨の方よりは敎外の書とするも、吉利支丹宗門の此書が禁止焚書の厄を免れ、當時新文明の產出なりし木活字にて印刷され、慶長元和の頃世間に流布し、版を重ねて繪まで插まるゝに至れるは奇蹟といはざるべからず。爾來天保の改革にも敎訓の近道として推

奨をうけ、天保十五年には草双紙體にて『伊曾保物語』の開版をさへ見るに至れり。蓋し宗旨の宣傳外にありて單に教訓的なりしを以てならん。

文祿の羅馬字本と萬治の繪入本との譯文に就いて、其譯し方の一例を示す爲に、同じ説話を對照すべし。但し文祿本の譯文は、英國博物館藏本羅馬字本より新村博士が原文其儘に邦字に書き改められしものなり。

犬が肉銜んだ事

或犬肉(しゝ)を銜んで河を渡るに、その河の眞中で銜んだ肉むらの影水の底に映つたを見れば、己がふくんだよりも、一倍大きなれば、影とは知らいで、銜んだを棄てゝ水の底へ頭(かしら)を入て見れば、本體がないに由て、すなはち消失せて、どちらも取外いて失墜をした。

下心

貪慾に引かれ、不定なことに頼みを掛けて、わが手に持つた物を取外すなといふことぢや。

(羅馬字本　エソポ作物語抜書三章目)

犬しゝむらの事

或犬しゝむらをくわへて川を渡る、眞中にて其影水にうつりて大きに見えければ、我くわゆる所のしゝむらより大成と心得て、是を捨てかれをとらんとす、故に二つながら是を失、其ごとく重欲心の輩は、他の寶をうらやみ、ことにふれてむさぶる程に、たちまち天罰を蒙、我持所の寶を失事有。

(繪入本中卷第十三章目)

今また羅馬字本より邦字に書改められたる新村氏の『文祿舊譯伊曾保物語』と萬治の繪入本とを對照すれば、文祿本は書出しに「エソポが生涯物語略」としてエソポが傳記を掲げたれども、萬治本の方は殊更に傳とせず、普通の假名草子式に上卷二十章と中卷十章とに斷續して叙述し、其順序繁閑等も著しく異なれり。又諭言も文祿本には傳記と切離し「エソポが作物語抜書」として、上下二卷に七十のたとへ話を擧げあるか、萬治本は中卷第十章にて傳記を終り、第十一章より同一樣式を以て諭言に移りて中卷に三十章、下卷に三十四章、合計六十四の説話を收めたり。然れども抜書の下卷に收むる四十五の説話は、萬治本には一つも見當らず。これに據りて觀れば抜書の下卷にある説話には、假名草子の譯者は手を觸れざりしものの如し。

また此書の譯者に就いて傳ふる所の諸説を記すれば、羅馬字本は『平家物語』を口語に移したるハビアンと法名を呼びし邦人、加賀の禪僧たりし慧春ならんかと云はる。又元和本の譯者を岡本三右衛門とも云へれど覺束なし。又山崎美成の『好問堂海錄』には「元和寛永の頃やんごとなきかたのかゝせ給ふ書と桂川氏いへり、最上氏の話なり、此書蠻書を譯せし始めなりとぞ」と記せるが、こは烏丸光廣卿などの才覺に成るものとの説もあり。猶萬治の繪入本、即ち今回刊行したる『伊曾保物語』の插畫に就いて説あり、もと『伊曾保物語』の繪卷物三本あり、書畫ともに雛屋立圃の手になりし珍品と傳へられつゝあるが、萬治本の插畫は其畫風もとより立圃のそれとは相違し居れども、圖案は立圃と光廣卿との案出に出でしか。

三右衛門が普通の畫工にかゝせ、插圖したるならんとの説もある由なれど信ずるに足らず。これらのことは唯參考までに記し置くのみ。但し本書の插畫はこの頃の假名草子などに見る畫風なり。

本書は中卷、下卷共に表紙も題簽も開版當時の儘に存し居れば、總てを完全に複製して提供することを得たり。上卷の外題は他卷に倣ひて刻したり。

の趣味家の批判を待たねばならぬ。自分のことき
も、多角の性格を有してゐる。偉大なる一端
の性格すら知らぬ。徒らに全局の批評を無するもの
のは迷惑も極ひ。これ等批評は通り間違ひのあ
ることは無い。自分に對する批評は五角見の一人
六角見の六人から受ければ公平を得ないのである
ある。自分は如何に多くの四角位の別方面の性格方
面の觀察をされることを自信してゐる
○來る十一日東京梅川亭で稀書複製會の同人等展
の圖書の陳列を為し、公衆の觀覽に供せんとするに付 自分
も起ちて四五の珍本を出すことゝしたが、

獎をうけ、天保十五年には草双紙體にて『伊會保物語』の開版をさへ見るに至れり。蓋し宗旨の宣傳外にあつて純然たる文學書として行はれたものであらう。

ハ　各自の愛好本（種類を問はず、一人五點以内）
ニ　本會複製本の原本
ホ　木版彫刻用器具、木版印刷用器具（小刀、刷毛、バレンの類各種）

久しぶりに折角催します事ですから、成るべく多數の方々に出品して戴きたいと存じます。會員各位の御宅へ拜借に參上すべき筈でございますが、主催者は日常の會務に追はれまして手廻り兼ねますから其點御酌量下さいまして、甚だ勝手ながら當日御携帶下さるやうに御願ひ申します。御返却の方法は書留小包郵便に依りましても萬一途中汚損などの事がありましては申譯がございませんから、閉會間際に成るべく御自身に御持歸りを願ひたいと存じます。

會場に充てまする梅川亭の樓上は三十疊ほどの廣さで、室内の周圍に書籍を陳列しますと、多數の人を入れる餘地がありませんから(一)本會會員(二)會員の同伴者(三)本會から御案内した方々に限り御縱覽に供し、其他は入場を謝絶する事に定めました。

犬しゝむらの事

或犬しゝむらをくわへて川を渡る、眞中にて其影水にうつりて大きに見えければ、我くわゆる所のしゝむらより大成と心得て、是を捨てかれをとらんとす、故に二つながら是を失、其ごとく重欲心の輩は、他の寶をうらやみ、ことにふれてむさふる程に、たちまち天罰を蒙、我持所の寶を失事有。

（綸入本中卷第十三章目）

今また羅馬字本より邦字に書改められたる新村氏の『文祿舊譯伊會保物語』と萬治の繪入本とを對照すれば、文祿本は書出しに「エソポが生涯物語略」としてエソポが傳記を掲げたれども、萬治本の方は殊更に傳とせず、普通の假名草子式に上卷二十章と中卷十章とに斷續して叙述し、其順序繁閑等も著しく異

『版畫禮讃』宣傳

『版畫禮讃』は稀書複製會第三期刊行の完成を記念し、併せて斯の事業を宣傳する爲に編纂したものですから、元來米山堂に於て出版すべき性質の書籍でありましたが、米山堂は數年來複製會本の出版に專心努力してゐまして、遺憾ながら販賣の便宜をもつ

一　北禽先生伊勢物語断簡

一　伝高上田秋成歌書一巻

一　頼山陽稿本

一　夜半亭蕪村遺墨　四幅対　色摺　唐紙

一　三才人遺墨　四枚折帖　明治初年又は其以前

一　天文刊本大平記　二部

一　歌書古写本

一　心敬僧都自筆百花詩送

一　豊臣秀吉朱印状　徳川家康添状

一　浮世形六枚屏風　菱川師宣筆

北国者のおよそ来の間一元禄三序る名家私印　十数種

の印影百顆を捺して之を大印譜と称す

初めて出し人に示すことを思ひたち、雪倒を思ひたち、印

義を思ふ、これの印論考の也

陳列用の印義を思ふつつ陰未答却運き点検

に忙しく偶く来客やつつ陰未答却運き点検

つて数十顆の印を捺す、大西賊半截二葉

ここ数十顆の印を捺す、大西賊半截二葉

為めの半日を消すと云ふ

の新居の人河村儀兄（未知の人）より来也且つ言ふを俟

ず、北人余が跑輩山陽を後文挙を以て多数のこ

と分明ならざる事を叙し且つ日人の不見に山

陽と雪舟とが多の書画の為めに詩幅自ら

りとなる事を言ふ、山陽と雪舟と

過錫の時を用ひよと雪を踏みて詩を賦するの約を
を要めよと時一詩を添ふるに答し、雪業も
元二次韻して之を贈る、其の後、其二中間に報旋して
乃数の後に至るまで、おもしろき事あり、
悔ゆるまじきが如き雪業の侍者なることを知
りぬ多分の礼えを思ひしが、若者ゆえ眼
断を控へ書かざりしがこれを恨む妙枕
うう

□
保松懐中伴会珠津渠度時止相扶
嘱伊記取南元物致憂焼楼我無
雪業の事ほお述余以揚登枕贐之有
七心侍者うえ取事の甚勤故六之

北奥之来翁之枕也
山陽外史襄口口

□
五来檀枕潤如珠別意あ眠業枕
忽起故人連楊夕、再三少ニ供意無
山陽元二贐余重ねて此等檀枕後
剛中詩次韻之信往来侍者うえ
周旋甚力、未元慣而元、う語典之
余亦和似
七二会口口

宣統帝在天津一日過日文老臣
江藤豫證筆談隨清流集點然動
容侍臣和泣帝厭舊隆因為朕謝
碧堂先生筆潸然感愴如之絕句
燕都游絲細雨清明節偶接雪音悵
我神怡作白髮過如雪滿
岡天津清朝宮闕已黃塵陵
谷今成戴假新名逢宮醜筆當

十二行

斜耿然來海老詩人 玉爾揚
殘風閑非山河故舊依此日
前清皇帝侯
右山本翁詩
辛酉五六月初四
李俊 里達筆

○四月（望日来る）訪次云狂芳凌滄集端午宣統帝の詩二人、其の紫金城の詩を賛ずるを見て感じ、其状を目撃するが如く、江春霖と凌滄集を作ることを約したる旨文曲阪の江春霖の墓誌銘に載せたるに依り四月（五日）君に謝意を表する両函を書き即ち北京に於ける三首即ち北京に於ける

明治文学初期の追憶

自分の東京に出たのは十四年だから丁度三十年前のことが流行であるが、まだ其頃は貸本屋から八犬伝を三冊ずつ借りて来て読むのが楽しみであった。

のも読んだ。大体は判ったが、まだ其頃は貸本屋から八犬伝を三冊ずつ借りて来て読むのが楽しみであった。

江戸時代の型が残っていて、自分の親戚の家に客が来ると、八犬伝を全部揃えて出すのが礼儀であった。

琴の巻に親しみ、八犬伝を全部揃えて出すのが礼儀であった。

進んで其他の大部の小説に読耽ったが、七五調の文章が其頃大変流行で、八犬伝中のサワリ文句は多く吉生間で暗誦が出来ないと友人間に伍して行けなかった。

話

狭く感じられ、西洋の諸学を（習うべきこと）
方田汎の小説に耽けりなどせぬ事勿論
が此頃の新体の小説（ハ）まだまだ（あまり）無つて
やうである、
先づ九年を開成学校の稽古人（ハ）十余名
会で塔内堆裕君と交つた、此人（ハ）南時大の馬琴
通で、馬琴のある（ものを）読むことを（ハ）（好）（のみ）
馬琴風の文章を能く書いた、何んといふ
樗牛ぶりの指を染めた南朝畑の材料（も）一冊（ハ）（小説の）
書いて示されたのを見ると、馬琴ソックリで
例の七五調で、おもしろきの件（ハ）（を）
（十二行）

ワリもあり殺し文句もあるが、自分ながらエラ
イものと驚いた、塔内君ハ馬琴はかりでなく、三馬の浮世風呂も一九の膝栗毛も愛読家
で通じて重宝、談語の文ハ滑稽本ぢやあるまいと、
んハッド後で古いと馬琴全集を（ハ）何人も今
得しとあるが、大学時代に古いと談語文字
八自分の記臆にあるのみ、五六人の同窓が連んで
て鴻之巣（通）へ徒歩で往る（ハ）（ハ）此の紀行を膝
栗毛風で書いたこと（ハ）（も）あつた、これハ偉うて記
臆にないこと（ハ）（も）ある、ある時の塔内君に示された
目録、これハ後日本橋本石町の本屋双紙の
数まで千種以上も収めたものであつたが、

何の目的うと少くとも、
（重）から傍論に於ては、
あると云ふ、その海
を喫した、堺内君は甘
つた事実のない、
自分の大学の文科と入つた
なのに、文学とは無交渉
何も云ふ資格が無い、唯だ親しい友と堺内
君のことゝき人が
聖るまで四十数年の間交はが連綿として
見、北人から文学上の（董陶）を受けたこと
もあるとくらいの、時々往来して話をす

（物惣）
（資本）
（名の大略）を書き記したのに
（廉）の小説家である
（院に）
（志す所）
（文学）
（遠つ）

うりへ文学の淡い、自分からワカラヌ事を問ふこと
もあつたが、堺内君はいつも深切に一時間も二時間
も其の蘊蓄を傾けて説き諭すそうさえ
あつた、コンナ（偽）の往来
文学上の感（董陶）も
毎年例として熱海へ
週日位（堺内）君と落合つたり一
週日位毎日六時間の堺内君の文学論を
聞くのが定例で、新らしい各国の文学思潮
七例の巧妙な説き方で
殊に劇に関しては深切な話しを呉れた（講）
（堺内）君はまだ
（ま）
（堺内君）
（九）
（説）
（諭）
（考へてみると）
（人があるが、自）

十二行

会場もそれも大も深切に且つ多量に教育を受け
ルノ人であるから、自分の仕事文芸の趣味が
統一せるが性来の善鈍で筆沼を受け
ル割合に、一向満喫する所迄ゆかない多
少とも文芸に就て理解のある人、はの内君の
お蔭である。はの内君は自分を割引の味の帰
依者にしたい下心もあるらしく特に熱心
に割に関して講説されたがどうもそのかの自
分の割の説味が起つて来ないのでは内君も
いのぞや君の仕事ーと云われたこともある、
が割丈は取除かるゝ事になり入れ
かゝる割の趣味があるを俺も助かるがあと

云われたこともあるので、はの内君の期待に背
かるのへび割趣味があつたら、折角参かーと
文芸協会もモーサーキ脱退ひ揮ひとび
あるう、志かし、はの内君の自分に対しては特別
の同情がある、いつぞや大隈老侯が雑誌を起さ
るゝに付、自分に擔任せよとあつた時、はの内
君に委しく次第連綿的に書いた早稲田文学を
徳に執筆ーすることを思い止まるようとのこと
が、此ーもあるを告き、君がやるーならば俺も
努力して助業するとも云われたが、はの内君の同情に真に感謝に
堪えない。

私の場合の君と右いふ様な間柄であるから場合の人の
ことを是丈書き給へ。（）つてみるまい。唯と
大正の田口亡時代のことを追憶して見るのも、自分
の観察が（）誤つてゐなかつたことを、又人が（）他人がどう
をも云つて見ても、又人の何をいふと、前に述つた通
り場合君は今の亡時代と既に主流な旧派の
説家であつた、ところが（）新派の素養がある
が、（）殊に（）、その素養が（）なり君を大家
とするのであるも、西洋風の小説に推
し移つてゐる（）、又は却つて
も考へてゐる（）一つの型式に囚はれてゐる
人がそれに描くことを他に転ずる場合でも、

十二行

御国籍を感ずるものである、場合君に旧派の小
説家の（）業が無つたとしても、西洋小説を早く
本当に意味に於て（）モットの新らしい小説が（）書けたであらうと思
はれる、場合君の書生気質には有名なるものである
けれども、旧派の業務や執向が随所に隠見
するの（）憾みがある、
田君があの小説に対しての批評は（）如何
すると、半分書きかけて（）あつたが、三日と共に静岡へ旅行したことがあつて、
八枚位の後半を静岡の（）酒楼で書き畢つた
ことを（）思ひ起こす、（）昨今

の批評、坪内君の病根こゝに言及してゐる、
高田君の小説眼が一段高い訳と思ふ、全
の翻訳、体高田君は坪内君
説い高田君の方が坪内君
又私も見解もあつた訳
の長い文を高速度の高田君の批評を
読んで見て、高田サンも
エラカツタのですナーと
も文を論ぜんことを志しとらば恐くは
らも批評家の方がよかつたらう、今の高田君
ハ教育家程営業
文学の天分をあらはしてゐる、高田君は
坪内君のことをし
力が無つたが、英文を綴り
書き得た人であつた、今日本屈
養かもうこう
ものあらう、坪内君の
個人雑誌我観
内に高田君のことを言ひ
文章である
あるが、西洋小説
つか政治や
あるか疑
いと
云

十二行

●坪内博士（逍遙）が春廼舎（藏）
現いん出ごのを驚異の目を以て
評論のことき比較的新思想に理解のあつた
ものでもあるが、苟くも文学を以て
立つ小説家とならうといふ
をかへりみて、小説家になんぞ
ならんやである。北村時今の假名垣魯文
が小説の文体を擯つてみて、小説家になんぞ
趨り来脩を事（納）めて門下生となる
なを頂戴しようけんハ世こそ住てあるの
ら、時事新報が小説家を軽蔑したのも
無理ハ無つた、坪内先ハユシナ坊實に捕ハれず
藐然獨立獨歩でやつてのけたのハ流石に一見

十二行

識である。
漢文が無けれハ文学ひ
維新の頃ハ一概に擯斥を受けて、当時ハ
西洋に所謂る文学
なんてものハ一端も世に現れ
いたハ坪内先の小説神髄であつた、ハ
ハ此の著述のことハ誰も知つてゐるけ
ども、其当時に於
で、小説が重んぜらるゝに至つたハ尤も時宜を得た著述
版から発したと云ふも誣言（動機）ではあるまい、
坪内先当時の傑作ハ書生気質であるが、
ろ小説神髄であると
私の思ふに、坪内先ハ心家

提供しようと思い出す、その標題を私に
書けとあるにふさわしくそれを断ることもできないと思い出
す、龍安町時代[redacted]
であったやうに思いつく、君は朧月夜にふさく
わしく、君は戯心満々と笑いながら春宵座興と名を
命じたので、其の古歌から春宵座興と訪れ見ると、掛物も顔
も北の和尚に囲んひとの掛けてあり筆
通るも月下の桜が散つてゐる蒔絵風呂
が蒔絵で出来てゐて、如何にも気取つたもの
あつた、傑し君へ贈る
を異にし、とふのハ学の相違がある
かもあつたが、君は名家の子弟を家に預つて

日用の筆

そもそもエライル杜(もり)氏のかいえらうも君ハ文壇の
教育家としても大エライとなる事自分ハ思つて
みる、君ハ文学の各方面に先鞭を着け、それ
を開拓し、且つその将来と期するべきことを指摘
もし数へてみる、それ十数年来の事一歩ハ即ち十説神
龍じある、
ほか君との長い文ハ文壇から、龍宝町の僑居
時代から大久保余丁町に移つてからの事をよく
知つてゐるが、文学上に関係あることハ少く憶ひ
出し得るも、自分も雑誌未来の夢を書き
われら時ハ自分から兼来る材料を

十二行

提供したことを思ひ出す、その標題を私と
書けとあつたがそれを断つたことをよく君も覚えと思ひ出
す、龍宝町時代ハ
であつたやうに思ひます、君ハ臘月夜に志く
ものもうき」といふ古歌から春廻座臘と名を
命したので、其の家に訪ひ兄ると、掛物も額
も北の和尚に頂んだものが掛けてあり筆
遥かに月下の桜が数つてゐる蒔絵の硯
が蒔絵で半ばてゐて、如何にも気取つてゐる
あつた、傑し君ハ若しの
を異しがつたとかいふのハ芝の品
かうもあつたが、君ハ名家の子弟を家に預つて

乃ち歌曲に
等を君が
北小説神髄
けたるを
外に学ぶ
忌み服
い出しと
確かと記

日用の
筆

日用の筆

△乃ち歌曲に就き、ベーゼント(そで)に就き、
皆な君が指揮しにかゝるものあるを、
北小夜神髄の目稿も早く大学にある頃、ノートに書きつけたものを書き直したのであつたやうな覚へがあるが、まだ外に学生時代の古いものがあるかも知れない。自分の名を署すまでもなく忘却されてゐるかも知れないが、友人橋健三の名も出してあるし、北著の書名は自分も確かと記憶がない、春廼屋作とあつた筈だが、多くは閑却されてゐるだらう。

十二行

乃ち歌曲に就き、ベーゼント(そで)に就き、皆な君が指揮しにかゝるものあるを、

北小夜神髄の目稿も早く大学にある頃、ノートに書きつけたものを書き直したのであつたやうな覚へがあるが、まだ外に学生時代の古いものがあるかも知れない。自分の名を署すまでもなく忘却されてゐるかも知れないが、友人橋健三の名も出してあるし、北著の書名は自分も確かと記憶がない、春廼屋作とあつた筈だが、多くは閑却されてゐるだらう。

英語替やら教育やらを擔任してゐた、且つ
早稲田大学の前身東京専門学校に日勤を
して文学の教授をやる身でもあつたので、君は自身
を持さねばならず、事実君
の半面は甚だ苦しい先生であつた、
早稲田中学が起つた時は君は大久保余丁町に居を
移してからであつたらうが、君は其の教頭とならう
さるを得無つた、君が後年私に語る所に據る
と、実の心も無いことであつたが、高田や君が早稲田大
学の使命に共鳴して居るのに、自身も何もし
ないとあつては気が咎めるので、初めては教頭とな
つたが、教頭の受持は倫理の一科を十年も講し

十二行

のないことは自分に取つて此上ないつらいことであつたと自
白を与へて同情に堪へなかつた、あれ丈の文学者を
其の心に専らならしめず、アタラ大切な時間を中等
教育位に費さしめたのは如何にも勿体ないと感じ
たが、君に一種の倫理の研究心出来たのは、君の其
後の文学にどんな影響があつたか、それ等のこ
とは今茲にいはないとするも、是れが坪内君の経歴中
に漏らす可らさる重大事件に相違ない、
勿論倫理の研究が君の修養や人格に益
する所があつたかも知れん、それを与へた所と較へて
差引損得どんなものであつたか、
それは別問題であるが、何れにしても坪内君の経

歴中大事件であつたれば、北事と関却しなば
君の文芸を称し又君の人格を評するものが
如き其の甚だ不備の譏りを免かれま
山人とは
次は紅葉山人と就てもう一言追憶と移さう、北の思ひ出
もそこ〳〵に尽きて居るが、随分長い間の交り
であつたし、私も最初北人の小説「地獄極楽」を読んだ
などの上、郷里の新聞を主宰して居た頃
あつたとて思ふ、北の小説を読んだ
しに筆致にカがこもつて居て山人の描ける
まだ北時は山人と出会はぬ前であつたが、
チヨウド鉄侠二移るが、北色地獄を脱するに

脱元は青岡拙太郎といふ人で、この人は宮
つて同宗であつた、気の利いた才子肌であつた、
山気があつたとて見えて、小説出版を企てたとやく
と聞もなく北手から色地獄が出版されたのだ
おもしろく風俗描写の風流佛も気味の
此人と伝つて出版された、著眠か
ようかつたのである、
なうつたらうと思ふ、
紅葉山人と懇意とは
氏と代つて満堂記臨する、北須田山人は後年紙

上れ回の艱難の小説を連載してゐる社
（日々来るひもるこうにが時々の望月の原稿を
みつから社く持参つて来れることもあつて、社で書く
様なことは滅多に無つて、実のうんなる無雑作
に出来る文章ゆゑ、坪内君が一寸
千里と筆を走らすのといふ）つて、山人は一向
訪く喋んも出すやうな苦吟の跡うる山来る色
もあつた、山人の風格の貌も渡も幹高く色
黒く根日明かれ顧こ共が味、頗り筆止軽快が
言葉はキビくしてゐる、高快を以てのへしもる
（私数すること何とうく称
日の兒とふ風格の自称、備つてゐる、自分は

社で文いつ（これはのうひの無い、山人のほしい生の
横寺町の居くも或十回を運んだ、自分が漫
筆をもつてから山人との交りは長く続いて
其の終焉に迄人た、自分と文学と趣味があつたのだけれども、文学の方
しあつたのだけれども、文学の方
未だ未だ未だ自分の知らない、自分の短所を補ふ
文学の者と交はるのがよい、自分の短所を補ふ
交りの互ひを知つて居ることを交換する
ことまでもない、面白くつまらないと思つたからでも
つた、山人は食物に頓る趣味がある菓子

刳してやるまじめであつたが、下戸でもあつた、其の
下戸の山人を上戸の自分が随分度々連れ出して方
々飲み回はつたものである、山谷の八百膳へ出かけ
た時、膳部の中に猪口もある、野菜の胡麻
合を丁寧に解剖して、どんな物の中に七八種のもの
が混じてゐるかなどと、台所で手帳に書きつけたり、或
鳥屋へ出かけた時は、女中にデハの注文をして女中
が解し兼ねて料理番を呼んで二人がこと
もある。山人は食通であると共に写真道楽でもある
て有名な料理屋の台所を写真に取りたいと
言ひ出し、一二ヶ所試みたこともあつたが、台所はドコ
も暗いので不成功であつた様に覚へる。ともかくの凝

り性で趣味も甚だ広かつた、自分が多少江戸趣
味を解するのは、山人に得た所が少くないと思ふ。
山人が業を苟くも志さうとした一例は、「隣の女」を書
いた時、篇中に尺八の事が出てくる、山人
は尺八の吹き方には心得が無いので、其の研究に
向島に隠れた知人作楽某を泊りがけで訪ふ
たことがある、其の苦心談を讀賣紙上に二日ばかり載せたが
り讀稿が全部切れた、其際山人から私に寄せた手紙
が今も手元に保存されてゐる、當時の讀賣社長
本野盛亨氏（本野一郎氏の父）が編輯局へや
つて来て、紅葉の時々ナマケルには困るといふて ○

十二行

小説の続稿の催促を受けることを恐れて攻撃するのだ。
自分は紅葉の為めに雑誌を犠牲にしたのだ。
こう云う向きに出ること、
あの小説の中途で切れるのは今度に限ったことである。
アノ男の校正はスラスラ書けるものか何故時々停頓するのかと詰問すること、
スラスラ読めるものへ、
山人の小説は一字一句も苟くもしないこと、
容易に校正を続けるのへ、
紅葉山人の原稿を校正方から取寄せて社長に示したこと、
北原稿の数ヶ所の貼り紙があること、
つぎに中ほどへ一ヶ所に三枚も四枚も重ねて貼り紙をしてある所もある、
私は一枚一枚剥き取って来事の
社長と読人で聞かせた、
原稿と戻った時、
もとの通り珍珠の如き文章であるかしら初度の
貼紙で
更によい、二度の直しを読み較べること初度よりの
最もよいことが斯く歴然
とふ時、社長も始めて成る程とうなづいた、私の
スカズ実は小説といえども漢詩を作るが推敲に随分苦心さ
アナタも漢詩を作らるるであろう、紅葉の大家の名誉の為め

まもナグり書する言い出来るのでい、尺八の吹き方
を知らないうちといふよりて書けぬ譯もあるへか、
大事を取つて吹き方まもも研究九するのみと説
明しぬ。社長も漸やく文学者の苦心の容易
ならぬことを悟つた様子。北事を後日
とし、北の隣の世「山人」に就て更も憶ひ出ること
とかあるやあらんと問ふ際とい雲まで葉が迫人
でゐる、前島慈男君から一封の書
状が回送されて到達したが手紙ハ極めて
簡単で「隣の世危険迫る、詳しい隣の危氣
とかの詳しいことは三行くらい書いてあつて、
十二行

時合い新すに對する政府の取締が馬鹿と畜生
で、小説も晴風俗壊乱やらえることが頻繁
であつたので、前島男ハさえ
つたり、
山人が全色夜叉を書いた時、貫一の死愛に苦心した
く塩原まで出かけて、実地を探検して死愛を定
めたとこんい誰も知つてゐる事實だから委しく語
るまもないが、北事も實地から委しく語
と語り合つたことがある、西洋あるの例に倣へ
貫一の死愛と一碑を日村に、それを塩原の
名所とするもおもしろいではいかと、幾分の資
を投じて経営しようかと相談したことがあつ

此無論紅葉山人（双後の事ひ山人の記念の意味もあつたのであらう）と北斗を終に果さなうと云譚は、塩原の某寺の住職が（略々仏類似の事）を考へ出し、塩原の宣傳若くは奥三郎兵衛（盆田と號す）尾崎紅葉両人塩原に関する事跡を刻して碑を建てる企があつて、こと聞いたので、私の友人松手康四郎氏をして撰文を求めたのであるが、其の際、こんな事の手を成つたことは、北寺の住職が其後他人の往書で顧慮をなし、終に沙汰止みとなつたことを聞いたので、思へば無茶苦茶なことを企てたものだと、今更ながら冷汗の出る様な気がする。

従而（従つて）君と紅葉山人とは互ひに能く知り合つて、其交りも深かつたが、勿論両人の間に疎隔があらう筈は無かつたが、偖し両頭鉄の末流の間柄と動もすると相軋つて及田する様の事があつたと、私の當時耳にしたことを覚えて、と云ふのもいつも両雄の並び立つ難きの疎隔及び自分から論を発し、兎もすると意外の事を惹き起す流との差があるからで、或る時牛込の寺院の幹部の寄合があつて、其席で、其事の日階下に偶と階下に自分の名刺が有るとの事で、其両君と自分とが揃つて階下の集會があるとの事に、得難の北様人をも聞へて、自分は秘かに事に、

雨の
利用して又目を解きそれいまのことを、ワザと婆の君を誘ふ
しは精しい事柄を読み初め、笑ひ婆の君を誘ふ
て階下の一室を明けて見ると、山人を初め
砚友社の面々二十人計りが有り、居並んでおり、
席が狭くて互ひの意味で此席を伴いんとするも理解しも
ハ何人の意味で此席を伴いんとするも理解しも
ないので一寸面喰ひたが、未席を改
して日例の常意即ち
満座に挨拶謹を弄して
す拍手して答礼をし、一同ハ日ヶ元ハ
と雅量とハ未だ流の誤解を
一掃してそれからは甚だ釋然たるものがあつた

十二行

按ずるに、
山人が食通であることハ前ふれつたが、日本橋の中華
亭の料理が氣に適つて、臨終の病中もマヽから
料理を取寄せたと聞へたが、この中華亭に
就て逸話がある、北の亭のお福と云
ふ娘が大の紅葉山崇拝で、山人の小説とならバ
十二ヶ月の物語でも読むと云ふ、私の亡友山田一郎と云ふ
が此事を知りて、或る時二七紅葉を連れて此の
お福に一杯喰はせたことがあつて、山田の死る人
で静岡縣の或る年若の醫師が俳句をやる
所から思ひつき、伴あて中華亭へ到り、日
をふハ尾崎紅葉を同伴したから、短冊

びん書いて貰らひと、お福を書いたり、二七
おと知るのお福のひどく喜んで酒事を斡
旋し揮毫を請ふからと、コンナ事があつ
てから数日を経て私が行くとお福の姿先日
紅葉先生が山田さんとお出ましたと二
こくして云ふから、自分一寸不審の思ひが
山田の尾崎を知らるゝ、自分一寸不審の思ひが
つて来たかしら、とお福と紅葉さんはドンナ関
子の人びあつたと、色の浅黒い、見丈
の高い、鼻下に髭のある人といふから、私は
噫出したと、お福さんそれは偽おもよ、紅葉
は亀が里く丈が高く肥つて、お前は山田と

ハメられのとゝいふ、お福のくやしがるから
私の美を慰めそれの本初を連れて来る
といふて終る其約を果した、山人が中華亭
の料理を受けるの端いこんから発して
山人は下戸で二三杯の呑もと見らす其席と横臥
するのが例であつた、或る時柳橋で三四の妓を
招き、二三杯傾け例の如く横臥し、半睡半醒
の境に入て、妓等の為すに託し合ふことが
銘々の前の本膳の肴を見るとすき其席と横臥
するのが例であつた、或る時柳橋で三四の妓を
招き、二三杯傾け例の如く横臥し、半睡半醒
の境に入て、妓等の為すに託し合ふことが
聞えるので、山人も之と
なく耳を傾けると、甲も乙も両五ひに事
情の本説を奉仕と光芽の優劣を論

いつであろうか時い忘れたが、私が幹事で
帝大の同窓会を東台の有櫻雲葉（後に梅川
楼）に開いたことがあつた、其際紅葉君い私を
助けていろ〳〵周旋さえたが、餘興には伊井蓉峰
に書生氣質をやらせていどうかと云う相談で
台詞は無論あるが、蓉峰と云う男意地が悪いから、
寄附的にやらせる、別に報酬は一圓もと
はずんであるから、素人で山人と任かせた、伊井も
快諾して門人数名をはめて登場し、確か
西瓜を割るところをやつたが、こんな意見が出
向かうと朝しれのが全く裏切られて失敗
に帰した、何分吾々時代の大立物の生の氣合

（あつたい）（全然）（梅時代の）

無理はない、（焼跡）十年頃の（伊井の）（のも）
出来ごころと、座中の人丸も甲乙両方
りの本尊三宅雪嶺君い舞台と接近して
ロもとも、銘々のことを時代（も）ひの書生から成
り上つた洲傳のことを言い出すことが
うが現いんで、一十分も経つか経いぬに、皆な
退屈を生じて、早く止めさせよ、アレらもお
互いがやる方がまずいよ、ものもあつて
蓉峰の氣の毒がある山人と格
別関係のあることのが、思い出さるまゝ

（地震の作者様内兄ル席さゐ処、）

ここに書いておく、

山人に就てまだ思い出すことはいろいろの事があるが、餘りに長くなるから一二雜事を錄して他の項に移ることとしよう、山人は多趣味であつたから、白用の印を心つけ、足跡もあつて、志きる時村氏の作かと思つたが、不起の病に罹り覺束なくも其意味の印を時村氏に刻させ、其印自文は確か「化及我」の三字であつたと記憶する、山人は時々私の家に来ては私の讀み殘した隨筆を持ち去り、それを脫稿として世に出すことが一再ならず、今の精神記臆ではとの程度か破茶苦茶の小說か書名の定んだかが分明しないが、或る夢幻の境に入つて、其の家に鶏の一羽を飼つてゐるのを見て、私は其鶏を殺して食べようと思つたが、其心を察してか、山人は私に謝をかけ、半ば暗に無念さうな容子をしたので、何とかして無念を云いやんとし、却つて仇となり、主人は其代に酬ゐる馳走の材料に窮し、鶏を四五羽と供く、

婦人の大失望を買うに至ったという一話が山人の興味をそそり、こんな山人の経済奇談となったが、探索好きの人々の思い出せる限りを書き綴けてあるのを初めて志きりに褒めるから、私は山人に自分のその日誌は何の役もたぬ、山人の私が長い間日誌を書くべきことを勧めたことがあって、山人もそれから日誌を書き初めた訳であるが、不起の病に罹ってもその日誌を書いたことは誰も知る通りだ、長逝後日誌が出版されたのを見ると、その年の元日の記事に私と佐藤某とが、山人の横寺町の二階の書斎で、長時間酒を酌み山人を困らせ、其時の記事が

トニカク七月八日罵倒を受ケリ

一行あけ

もまた、自分のために知ってもおいた文人は今はもう故人となり

の記事は吾等二人を新年の悪客と罵ってある、日誌を書くことを勧めたお蔭で本[illegible]譯ひもある、山人は江戸兒氣質の卒直で、日誌まで何んでも赤裸と書く流儀だ、人から私を馬鹿ものと罵倒されても笑ってゐると罵倒人が又コンナ人を賓客として悼ってゐるのだと山人の面目が現れてゐるのだ、北日誌を公刊する際に、その記事は削り去られるであろう、(いくらか)

外政党事情という隔日の署刊の新聞を起
して見ると従事して
こ机を並べて勉強しているから、服部の事業
稿を書くのを常に見ておって、如何なる達者
なる漢文といえども無論上り點をつけ
ぬが、書きくだした上りの点を横つけてやるが如何
田辺達也君も横
ぬと、アンナ綺語を弄する拙劣な人と意気投
合落ちの比人でもあるかのやうに人は想像するが
あろうが、顔も
訛りのヅウくしい痘痕があり、弁舌も東北
千萬の人であった比、東京江戸の歴史を書きた

つてみる、服部誠一という人などは故人となって余程
ど久しいことがある、社人は撫松と號し、東京繁
昌記の著者として知れてみる、新橋辺
銀座の通りの角れ九春社という社があり
そこから東京新誌という雑誌を発行し
一時は盛んに行なれ、可なり繁昌したもの
である、服部は此雑誌に北畝の漢
文体の戯作を掲げ、北畝合はまだ支
那小説酌の文章が流行れて服部の文は
私の北畝九春社と看の股をあけて友人と共に

十二行

つ[redacted]てゐる、服部誠一といふ人であるが、故人となつて随分ど久しいことであるが、此人は撫松と號し、東京繁昌記の著者として知られてゐる、[redacted]新橋近[redacted]く銀座の通りの角に九春社といふ社があつたが、そこから東京新誌といふ雑誌を発行し一時は盛んに行はれ、可なり號を積んだものであるが、服部は此雑誌に、~~大事小説脈の~~漢文体の戯作を掲げ[redacted]れ、此時分はまだ支那小説脈の文章が喜ばれたが、服部の文は艶麗であつたが、成島柳北の[redacted]に較べると文品は下つたけれども、それが却つて俗に投じた、私は此頃九春社に番目販をあけて友人と共に内

綺

外政當局といふ隔日発刊の新[redacted]を起して居れて従事してゐたが、服部と同じ編輯局に机を並べてゐながら、服部の[redacted]草稿を書くのを常に見てゐたが、如何する達者なものであつたか、漢文には無論上り點をつけたが書きく上り點を[redacted]つけてゆく、それが甚迅速~~如何にも慣れてゐ~~で慣れたものであつた、アンナ綺語を弄する撫松其人は意氣な洒落れた人でもあるかのやうに人は想像するであらうが、顔には痘痕があり、弁舌は東北訛りのヅウヅウで、文章と打つて變つて案外千萬の人であつた、[redacted]江戸の歴史を書きに

如何する

十二行

随分思ひ切つて活動のことを書いたものだから、

いとうを材料を蒐めたと聞くこともあつ
たが、遂に果さずにやうである。

乳垣森田思軒氏も多少の交りがあつたが、此人は慶
応出身で、年は若かつたが漢文の造詣を
達者れた方であつた。時、特に細き漢文評を漢文
にて、後れ
ハ筆と文譯殊に西洋小説の文譯に業を
専にしても卓絶の色があつた。早稲田大
学の東京専門学校時代に、雑誌であつた
が講義録であつたが、思軒氏の譯業を
掲したことがあつて、其頃位うの用ゐ初早く

岡倉覚三氏を根岸の
なつかるると、氏は朝でありまして、主客対酌まるといふノンキな事もあつて、西
洋人のさしへ一客の入り来たつたのを見ると、
思軒氏は、思軒は主席を立ち上つて、客に挨拶もせず
上席を立ち込んで、客から挨拶をするまで
傲慢の態度であつて、私の席に坐るのを
見て、学校へ上げるべき草稿は既に青田にて
あるけれども、今日の程の口而天ル金玉の文
を聴き、私は北男氣が頭もあるというと
思ひまして、如何にも自負
狂之
湯々

(ゆら)

人でした、

日報社 想痴居士福沢源一郎氏が銀座街頭にて大改宗御用の看板を掲げ東京日々新聞記者として名声を馳せたのは、私共の帝大に在学中の頃でありまして、其の日々の社説は大学生として気格が高かつたと、敬意を払つて居ました、後ち第七年目に読み、敬意を払つて居ました、後ち官権新聞とあれは文章がよくとも自軽傲慢の念を以て読んだものだ、福沢の説は官権新聞を権威があつたが私共は今日ではかう考へる、吾妻子の文品も異つて力が

と何ともく取うい扱ひ方の気もしますが、吾

十二行

高先生の警欧を掻し一ひ議論を戦いし
と見たいと思つたが、実は崇拝の念もあつたの
であります、而るに所議論を戦かわす機会
が生じた、其頃私し一は東京帝国大学の
学生と故人となつた岡山並に山田一郎氏の
三人と共に
来元老院へ官吏学生の改談演説を禁
することを不可として建議をしたことがあります、
大学生の身分のコンなまをやつたのは、大学
で前例のないことでありまして、田中稲城氏が
何う建議をしたことがあるまいかと、それは改訂
し関係したことでもあるまいかと、北建議に
対し福沢氏の禁止に賛成が出来ぬとの趣

聞きましたのが、當時日報社に櫻痴居士の編
で西洋小説を反譯して居られた關直彦氏で
は君々の同窓でまだ在学中であつたのです
から、此人を仲して福池氏に面會することゝな
り、三人連れ立つて日報社の樓上で初めて
福池氏と顔を合せたのが初對面であつたが、
しれ、福池氏は此頃四十年輩であつたが、
華美な服で袴を穿ずに贅澤づくめ
の日本服で袴はつけず、一體大使ひもあるうの
如き身なりであつたが、流石に議論は鋭
く、行き詰まると逃げることなど巧みであ
れ、併し書生輩...當時...
ものかと、

君々を輕蔑する様な風が見えて、
癖に障りましたが、いつまでも議論
が盡きません、但ね君の關君が社長へまで
社説を書き畢らんからと私を指したので
之れを機会に引揚げました日報社を
八福池氏の先代で福池はヅルイと云ふの
評でありますコンナ事があつてから
後、二十年も會する機会が無かつたが、榮枯
盛衰の變は係る如き世の中の常で、一時飛ぶ
鳥を落す程の櫻痴居士も劇場の経営
に失敗して衰へたる境遇に陥り、新聞
に絶ち、戲作者として糊口する程のことゝ

考証家で、ちょうど東西こそ違え、釣に関する稀覯の書籍を
いろいろ挙げられ、釣に関する稀覯の書籍に就ての詳細な
記載のあるのは、支那の陸竜蕚の釣の
達人ばかりということ、釣の書物及び稀本に
ついてのものが一番よいことである、それから後私が図書
時に図書刊行会で新撰書類従を編纂する時に、
狂歌の部と外に一二の部門を露伴先生に勧めて
おいたが、氏の快諾された部門の編纂が未だに、氏の

精力の絶倫ぶりを表するのに驚いたのは、武千首の
狂歌を悉く自筆で書かれたことである、自分の手元に達しる時に
の凝り性には周知の事実であるが、露伴氏
多くの一枚摺りの和漢を蒐集めた事度々
ことがある、丁度私が向島の氏を訪ねた頃
北の蒐集にかかっていて、氏のいふまゝ和漢をあらゆる
設い北るまで渉つて、氏のいふまゝ和漢をあらゆる
集めて見たらいろ〳〵面白いやつて見ると、案外同じ
あらうと研究的にやつて見ると、案外同じ
のものが多いのに失望したと、アンナ統属の

やうのものハ、捜し出すのハ容易でハ無つたと一笑された、

以上の外、森脇外氏や、郷良庭室村氏や、川上眉山氏其他に就て語るべき追憶が無いでもないが、紙面を塞ぐの心ない業だから、北海道で新聞記者をして、北の追憶の序に、故人となつた、故笠を明り出して、旧の流文なるまゝを、偶然残つてゐる、十五通ほどを探して見ると、中にハツマラヌものもあるから、悉皆ハ掲げないでおく、

一谷干城子の書簡一通
一俄名垣魯文氏の書簡一枚
一坪内逍遙氏の書簡一枚
一坪内逍遙氏の役行者の和歌
一旦話の腰を折つて附加へる事ながら、今の利本と同じ版を摺つた初稿
一福地桜痴居士の芳原の狎妓と代り番文[redacted]の俗入新聞へ正誤を申込んだ正誤文一通
一右正誤文に対して、民鳴柳北氏が福地

を愚弄する狂歌并に兎文の狂歌

一 假名垣魯文の猫に題する狂歌（一猫の国ぢう）

一 假名垣魯文の狂歌稿本一冊

一 尾崎紅葉氏の著作と書簡（数通）

一 河井孝叶默阿彌の絵看板画稿

一 小野梓氏の政治小説（大隈侯の政治上の一ツ橋内宮令幹事に充任歴）

一 森鷗外氏の「舞姫」長篇

一 川上眉山氏書簡

一 饗庭篁村氏書簡数通

一 河鍋暁斎の枕絵武四郎究記文

松浦武四郎より天満宮奉納の額面を暁斎に書かしむる事に付約を果たせば狩野大家の屏風其他の品を礼に遣つくる、若し期日遅る時は暁斎の名を以て他の画家に書かしむる、之も苦しからずとの諸書也

一 福地櫻痴居士の俳諧評論

角田井冷一氏の俳諧に對し櫻痴居士が晩年力を入れ研究せる俳諧を下し冷氏に充る

弱る長文の書簡也、紅葉の句も多く
引かれり

北村甲稲田文学の塲合、校正一回過浄
書の上十四日迄投稿を要す　六月九日記

○栗田真次郎氏より公孫樹の仆根一束切りの
花生を贈られたり、なかなか大なる仆根なり
そだち好文亭椅床柱の仆の根之

遠秋を利用して列公の孔子廟の
陰根元に乾割れを生じるおそれあり
しるし、其の乾割を鯨の
あり、背面に初丁の二字金を以て蒔
公の花押あり、鯨の上に丁群を為すらく
バ北紙もそえるも思いつきとるらしく
なまそおもしろし、

○六月分会費随業頼山陽手三枚成る、これも
当見しる誤謬の個所、抜かせしあり、偶と東
京のと新少を調する、並川路氏の評を載せ
あるを見る、話尚そえるを要を得ざる左に収め
おく

笹川臨風

近頃讀んだものゝうちで、一番面白かつたのは市島春城翁の「頌春鞭山陽」でした。流石に山陽通あり、山陽尺牘の多數蒐集家であつた丈ありて、博引旁證の妙、鹿鼎記抉の快、云ふべからざるものがあります。精彩なる一部の山陽傳です。「鞭山陽大觀」「家庭の鞭山陽」を補つて、前人未發の材料多く挿話逸聞に富んで津々たる妙味盡きざるものがあるばかりでなく有益なる好著と推移すべきものです

一 十二時 和解 花街美紙 小本 二冊
文政十四年刊
江戸 梅暮里谷峨
当久の狂歌を集て花園三千歳著
ゆう 彩色摺にて四季の花を分ち
各狂歌を載せ巻末に俳諧を附す
一 狂歌 雑もの
六々園著 文政刊
六樹園を採点 江本屋彦兵衛 江戸
おの巻頭に序有 中二冊

童話を雑文とつゞりうる著者と
板と解とを併せ出す狂歌を多く載
す、北六々園の著に狐七草物語、
一刀斎雑文(忠臣蔵)などゝりうる大坂版
雑文とおしてりうる 一名童伝奇
一 童話 書名 一名童伝奇
黒沢翁満著
おとき噺しを七体の長短に綴しと
ころのそう
文政四年の跋有
小本 一冊
一 西苑記
明治十五年版 菊池三渓 弘化二年

擬ふ所也、此外
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一西村氏之偽作（天祐の庚の元祐の年號あり）
陶淵明帰去来辞一巻子
（桑田庵蔵）
本を見るハ初めて也

一蒙古襲来絵詞　三冊
（井鶴真香旧蔵）
典（普賢寺の模写の模写也）此の筆子の多きを惜
（模本なれども往古の模写）
眼を以て用ゐ模しもの、初也、絵模
もの、鈎勒しるせる収めり

一唐画絵稿　一冊
（紙四ツ折の帖面に）狩野行信の画を

心ゑて初稿を草せるもの也
（人おほくて数なるも無んなり、軽妙
の味掬すべし、唐画の書本
あるといふハ、一を知つて二を知らざる
似たり、

一倣城評判記　一冊
（倣城評判記る所の一冊に擬か
安永七年
倣城の評判記なり、形式まねて書る
り珍らし

一大小張込帳　一帖
（昭和二年一冬の大小をいろくの品近ふ
扱ふ心りとるもの数十種あり

り、その修長の[illegible]枝老いて見るべし、謎の
如く解し難きものあるを極めて玩味を
要するものあり

此の複製の木版の参考と、未刻の順
序をあらわしたる標本を陳列し、苦しの
彫り方の行程とその一見比較
し得る標を出でいる研究の[illegible]、大いに
の利をバレン、并に[illegible]バレンを[illegible]る村井[illegible]参考の
為の生陳しとう、余の蕪村の摺をに注意がきを
しる一幅の此部陳列のるを掲げとう
北木政治の先河の大[illegible]城ちゃんとしよ
子ども共刻に係る有亭下絵を刻しる去難の

十二行

人物の摺物を[illegible]枚の標本として出陳もう
彫の細と粉とい人をしてめうとう

○近時の蒐刻家の印譜二冊を獲たり一は九名集
室集名城の印蛇を貼したるもの、多くは知名
の人のなるも刻しるるものを
蛇を貼りたるものなり収む他の一は円山大正の印
文三枚の刻あり、何人かの蒐字と一切の説を加えたり
世と玩賞と迄ることのあり

六月九日記

○本年上半季早稲田出版部不景気の折柄ながら三割配当をなし得たるは、新株払込の資金を低利にて代理部○○より借受けのあることなれば、五ヶ年十回賦償還の計画にて左の書類を以て申込みたるに付、御承諾の上は至急御送金相成度し

大正十四年六月十日

十二行

早稲田大學出版部用箋
東京市牛込區早稲田

市島謙吉殿

摘要	受取金額	支払金額	引残
株			
持株旧ノ分 株（一株＝弁七円五十ヌ）ノ配当金	一一二五・〇〇		
持株弟2ノ分株（一株＝弁七円五十ヌ）ノ配当金	二一三七・五〇		
役員賞与金	一六〇〇・〇〇		
納＝星キ代理部ヘ支払利子（一分八厘）（旬余リ三分六毛）		一二八・二五	
代理部仮払金七千百弐拾五円ノ戻入		二一三七・五〇	
雪部仮払金戻入		七一二・五〇	
	四九六二・五〇	一九四〇・七五	三〇二一・七五

上ハ仮払ヨリ支払金ヲ差引キ残額ヲ小切手ニテ受取候也

金参千弐百弐拾壱円七拾五銭也

大正四年六月拾日

電話番町三〇一一番
振替貯金口座東京四二二三番

十二行

十二行

十二行

閲覧室

閲覧室

創立目論見書

富士山麓開發ノ目的ヲ達スル爲メ富士山麓電氣鐵道株式會社（資本金五百萬圓）及富士山麓土地株式會社（資本金壹百萬圓）ヲ創立スルモノトス其順序方法左ノ如シ

一、會社ノ目的

（イ）富士山麓電氣鐵道株式會社ハ資本金五百萬圓ヲ以テ左ノ順序ニ依リ電氣鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營ムモノトス

中央線大月驛ヲ起點トシ吉田ニ至ル十五哩間

吉田ヨリ鳴澤、精進ヲ經テ本栖ニ至ル十五哩間

吉田ヨリ山中湖畔ニ至ル五哩間

精進、甲府間ノ內甲府丸瀧線ニ連絡スル十哩間

合計四十五哩間　此建設費金五百萬圓也

尙第二期線トシテ、山中、御殿場間十四哩及本栖大宮町間二十七哩ノ線路ヲ敷設シ東海道線ニ連絡ヲ圖ルモノトス

其費用ハ增資又ハ借入金ヲ以テ充當スルモノトス

（ロ）右電鐵會社ノ線路ハ大部分政府豫定線ニ相當セルヲ以テ此分ニ對シテハ地方鐵道補助法ノ規定ニヨリ補助ノ申請ヲナサントスルモ電鐵會社自體カ其株主ニ對シ土地ヲ提供シテ利益補塡ヲナス時ハ補助ヲ申請スル能ハサルヲ以テ電鐵會社ハ專門ノ鐵道會社トナシ外ニ姉妹會社トシテ富士山麓土地株式會社ヲ創立シ土地ニ關スル經營ヲナサントス

（ハ）富士山麓土地株式會社ハ資本金壹百萬圓ニシテ左ノ業務ヲ營ムモノトス

一、富士山麓ニ於テ別莊地ニ適當セル山梨縣有地ヲ借受ケ之ヲ富士山麓電鐵會社及富士山麓土地會社ノ株主ニ貸附ヲナスコト

一、富士山麓ニ於テ別莊地ニ適當セル鐵道沿線町村有地所ヲ買收シ之ヲ富士山麓電鐵會社及富士山麓土地會社ノ株主ニ賣渡譲渡貸借等ヲナスコト

一、其他一般土地所有、賣買、譲渡、貸借等

一、旅館及各種運動場娯樂場ノ施設經營等

一、土木建築ニ關スル請負、金融等

一、水道下水電燈ノ施設經營等

一、以上各項ニ附帶スル一切ノ業務

二、株式募集ノ方法

（イ）富士山麓電鐵、富士山麓土地兩會社ノ株式ハ壹株金五拾圓トシ電鐵會社ハ資本金五百萬圓（拾萬株）土地會社ハ資本金壹百萬圓（貳萬株）ヲ以テ成立スルモノトス

（ロ）電鐵、土地兩會社ノ株式募集方法ハ電鐵會社ノ株式拾株ト土地會社ノ株式貳株トノ割合ヲ以テ合計拾貳株ヲ單位トシテ申込應募セシムルモノトス

（ハ）右電鐵敷設ニ付大月吉田間ノ富士電氣軌道及吉田山中間ノ馬車鐵道、吉田鳴澤間ノ馬車鐵道ハ撤廢セサル可ラサルヲ以テ之ヲ買收又ハ補償ヲナス爲ニ交附スル代金並ニ沿線ニ於ケル町村有地壹百萬坪ノ買收代金ハ何レモ電鐵、土地兩會社ノ株式ニ振替スルモノトス此株數約貳萬株ナリ

（ニ）其他ノ株式ハ緣故募集ヲナシ其一部ハ公衆募集ヲナスモノトス

三、株主ノ特種利益

電鐵、土地兩會社ノ株主ニ對シ富士山麓ニ於テ別莊ニ適當セル地所ヲ株式拾貳株毎ニ壹百八拾坪ノ割合ヲ以テ株主ノ希望ニ從ヒ縣有地トシ料金ハ壹ヶ年壹坪金五厘トス

借地又ハ民有買收地ヲ左ノ方法ニヨリ貸附又ハ賣渡ヲナスモノトス

（但シ料金ハ拾ヶ年ヲ一期トシ其狀況ニ依リ幾分ノ變更ヲナス事

山梨縣有地（山中湖畔、福地村地內、精進靑木ケ原、本栖村地內ノ四ケ所ニ於テ）參百萬坪ノ借入ヲナシ其內ヲ同一條件則チ期限ハ永遠ノ借地トシ料金ハ壹ヶ年壹坪金五厘トス

鐵會社ハ資本金五百萬圓(拾萬株)ヲ以テ成立スルモノトス

(ロ)電鐵、土地兩會社ノ株式募集方法ハ電鐵會社ノ株式拾株ト土地會社ノ株式貳株トノ割合ヲ以テ合計拾貳株ヲ單位トシテ申込應募セシムルモノトス

(ハ)右電鐵敷設ニ付大月吉田間ノ富士電氣軌道及吉田山中間ノ馬車鐵道、吉田鳴澤間ノ馬車鐵道ハ撤廢セサル可ラサルヲ以テ之ヲ買收又ハ補償ヲナス爲ニ交附スル代金並ニ沿線ニ於ケル町村有地壹百萬坪ノ買收代金ハ何レモ電鐵、土地兩會社ノ株式ニ振替スルモノトス此株數約貳萬株ナリ

(ニ)其他ノ株式ハ緣故募集ヲナスモノトス

三、株主ノ特種利益

電鐵、土地兩會社ノ株主ニ對シ富士山麓ニ於テ別莊ニ適當セル地所ヲ株式拾貳株毎ニ壹百八拾坪ノ割合ヲ以テ株主ノ希望ニ從ヒ縣有地又ハ民有ノ買收地ヲ左ノ方法ニヨリ貸附又ハ賣渡ヲナスモノトス

山梨縣有地(山中湖畔、福地村地内、精進青木ケ原、本栖村地内ノ四ケ所ニ於テ)參百萬坪ノ借入ヲナシ其内ヲ同一條件則チ期限ハ永遠ノ借地トシ料金ハ壹ヶ年壹坪金五厘トス

(但シ料金ハ拾ケ年ヲ一期トシ其ノ狀況ニ依リ幾分ノ變更ヲナス事アルヘシ)

電鐵沿線町村有地壹百萬坪ヲ買收シ其内ヲ同一條件則チ壹坪ノ賣渡價格ハ無立木地ハ金貳拾五錢、立木地ハ金參拾錢ノ割合トス

四、株式ノ利廻リ豫想

(イ)富士山麓電氣鐵道會社ハ其株主ニ對シ運轉開始ニ至ル迄ノ間商法ノ規定ニヨリ年五分ノ利息配當ヲナシ開業後ハ本線路ハ大部分政府ノ豫定線ニ相當スルヲ以テ地方鐵道補助法ノ規定ニヨリ拾ケ年間七朱ニ達スル迄ノ政府ノ補償ヲ受ル見込ナルモ大月、吉田間ノ如キハ現在電氣軌道會社ノ營業ニテ相當ノ收入モアリ殊ニ將來富士山麓一帶ノ開發ニ伴ヒ多數觀光客ヲ誘致シ及富士山林ノ木材運搬等ノ爲メ收入增加スルヲ以テ電鐵營業ノミニテモ相當ノ成績ヲ收メ得ヘシト信ス然ルニ此外ニ壹株ニ對シ拾五坪ノ割合ヲ以テ土地會社ヨリ交付スル土地ノ使用價格ハ縣有地ノ永遠借地、町村有地買收ノ所有等富士山麓ノ開發ニ伴ヒ價格暴騰スルノ時機アルヘク大ニ有望視スル所以ナリ

(ロ)土地會社株主ニ對シ附隨セル土地ヲ提供スルハ前記同樣ナルモ此會社ハ縣有借地參百萬坪、町村買收地壹百萬坪合計四百萬坪ノ内兩會社ノ株主ニ提供スヘキ百八拾萬坪ノ地所ヲ控除シ殘リ貳百貳拾萬坪ノ地所ヲ貸附又ハ賣渡シ利殖ヲ圖ルヲ以テ適當ノ時機ニ於テ此ノ營業ヲナス爲メ多大ノ收益アル所以ナリ

五、株式及土地讓渡ノ方法

(イ)電鐵會社、土地會社兩社株主ハ最初株式金額ノ四分ノ一ヲ拂込タルトキニ於テ土地會社ノ賃借地上ニ賃借權ヲ取得シ土地會社ノ賃借地ニ對シテハ割當ラレタル土地ノ土地ニ付將來株金半額ノ拂込ヲ爲シタルコトヲ條件トシテ所有權ヲ取得スヘキ權利ヲ取得スルモノトス

前項ニ依リ株主ノ有スル賃借權及ヒ將來所有權ヲ取得スヘキ條件附權利ハ其株主カ其所有株ノ半額ノ拂込前ニ於テ他人ニ讓渡スルトキハ當然解除セラルヽモノトシ株主カ其所有株ノ半額ヲ拂込タルトキハ會社ノ賃貸地ニ付テハ其割當ラレタル土地ニ付キ他ヘ讓渡シ得ヘキ賃借權ヲ又會社ノ所有地ニ對シテハ完全ナル所有權ヲ取得スルモノトス

但シ賃貸借ノ期間ハ賃貸人タル土地會社カ縣又ハ町村ニ對シ有スル期間内トシ賃貸借關係依然土地會社トノ間ニ存續スルモノトス

(ロ)株式ト共ニ土地ノ賃借權又ハ會社所有地ニ對スル權利ヲ合セテ賣買讓渡スル場合ハ株金半額拂込前ト雖モ有效トス

六、別莊建築ト保管

土地會社ハ株主ノ希望ニ依リ一般メテ簡易低廉ナル小別莊ノ設計請負ヲナス外、極別莊建築ノ設計請負ヲナシ、且ツ留守中保管ノ責ニ

アルヘシ）

電鐵沿線町村有地壹百萬坪ヲ買收シ其內ヲ同一條件則壹坪ノ賣渡價格ハ無立木地ハ金貳拾五錢、立木地ハ金參拾錢ノ割合トス

四、株式ノ利廻リ豫想

（イ）富士山麓電氣鐵道會社ハ其株主ニ對シ運轉開始ニ至ル迄ノ間商法ノ規定ニヨリ年五分ノ利息配當ヲナシ開業後ハ本線路ハ大部分政府ノ豫定線ニ相當スルヲ以テ地方鐵道補助法ノ規定ニヨリ拾ケ年間七朱ニ達スル迄ノ政府ノ補償ヲ受ル見込ナルモ大月、吉田間ノ如キハ現在電氣軌道會社ノ營業ニテ相當ノ收入モアリ殊ニ將來富士山麓一帶ノ開發ニ伴ヒ多數觀光客ヲ誘致シ及富士山林ノ木材運搬等ノ爲メ收入增加スルヲ以テ電鐵營業ノミニテモ相當ノ成績ヲ收メ得ヘシト信ス

然ルニ此外ニ壹株ニ對シ拾五坪ノ割合ヲ以テ土地會社ヨリ交付スル土地ノ使用價格ハ縣有地ノ永遠借地、町村有地買收ノ所有等富士山麓ノ開發ニ伴ヒ價格暴騰スルノ時機アルヘク大ニ有望視スル所以ナリ

（ロ）土地會社株主ニ對シ附隨セル土地ヲ提供スルハ前記同樣ナルモ此會社ハ縣有借地參百萬坪、町村買收地壹百萬坪合計四百萬坪ノ內兩會社ノ株主ニ提供スヘキ百八拾萬坪ノ地所ヲ控除シ殘リ貳百貳拾萬坪ノ地所ヲ貸附又ハ賣渡シ利殖ヲ圖ル外ニ別莊ノ建築其他前項記載ノ營業ヲナス爲メ多大ノ收益アルヘシト信ス

五、株式及土地讓渡ノ方法

（イ）電鐵會社、土地會社兩社株主ハ最初株式金額ノ四分ノ一ヲ拂込タルトキニ於テ土地會社ノ賃借地ニ對シテハ割當ラレタル土地ノ上ニ賃借權ヲ取得シ土地會社ノ所有地ニ對シテハ割當ラレタル土地ニ付將來株金半額ノ拂込前ニ於テ他人ニ讓渡權ヲ取得スヘキ權利ヲ取得スルモノトシ株主カ其所有株ノ半額ヲ拂込タルトキハ會社ノ賃貸地ニ付テハ其割當ラレタル土地ニ付テ他ヘ讓渡シ得ヘキ賃借權ヲ又會社ノ所有地ニ對シテハ完全ナル所有權ヲ取得スルモノトス

但シ賃貸借ノ期間ハ賃貸人タル土地會社カ縣又ハ町村ニ對シ有スル期間內トシ賃貸借關係ハ依然土地會社トノ間ニ存續スルモノトス

（ロ）株式ト共ニ土地ノ賃借權又ハ會社所有地ニ對スル權利ヲ合セテ賣買讓渡スル場合ハ株金半額拂込前ト雖モ有效トス

六、別莊建築ト保管

土地會社ハ株主ノ希望ニ依リ一般別莊建築ノ設計請負ヲナシ、且ツ留守中保管ノ責ニ任スルト共ニ滯在中實費ヲ以テ食事及日用品ノ供給ヲナス仕組ヲ立ツルモノトス

尙建築用材ハ、山梨縣ヨリ富士山林ニ於テ拂下ヲ受クル豫定ナリ

閲覧室